⊠黒⊠のビースト、愛歌ちゃん

ぴんころ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り。主人公がヤベー奴をサーヴァントとして呼んだだけの話だ。

目次

第一話 1
第二話 9
第三話 17
第四話 25
第五話 33
第六話 40
第七話 48
第八話 57
第九話 66
第十話 75
第十一話 83
第十二話 91
第十三話 99
第十四話 107
第十五話 114
第十六話 122
第十七話 131
第十八話 139
第十九話 146
第二十話 151
第二十一話 156

第一話

どうしてこうなったんだろう。
言葉は空間に零されることすらなく。
掌に出現した赤い紋様を眺めながら、それの出現によってもたらされた〝己〟という意識の復活を嘆く。
ただ、嘆いたところでどうしようもない。
この紋様の存在によって、俺の運命はすでに定まってしまっている。
赤い三画の紋様の名前は〝令呪〟。
聖杯戦争に参加するための資格。
そしてこの世界における聖杯戦争とはつまり基本的には亜種聖杯戦争と呼ばれるものであり――――
俺が参加するだろう代物はその大元、『冬木の大聖杯』が呼び出した十四騎のサーヴァントが二つの陣営に分かれて争う聖杯大戦。
つまりは外典（アポクリファ）。
前世でＦａｔｅ／Ａｐｏｃｒｙｐｈａと呼ばれた物語が、俺が今生きている現実の舞台なのだ。
二つ存在する陣営の名前は、それぞれ〝黒〟と〝赤〟。
あの物語においてどちらが主人公だったかと言われれば〝黒〟の陣営、そちらに存在する一人のホムンクルスであり、赤の陣営に至っては二人のマスター以外は全員毒を受けて気がつかぬ間に聖杯戦争から脱落と言ってもいい状態に陥っていた。
俺の手に出現した令呪は赤の陣営のものなのか、それとも黒の陣営のものなのか、それすらわからないが、どちらであったとしても地獄のような予感しかしない。
赤の陣営になれば毒を受ける可能性があり、それを免れたとしても（俺の知る通りに進んでいけばの話ではあるが）最終的には空中庭園に突入せねばならず、死ぬ可能性が高い。
黒の陣営であれば死ぬか生きるか、それすらも不透明。
どちらがいいのかと言われれば、きっと赤の陣営。

魔術協会側であれば他の誰か……戦闘特化の魔術師にでも令呪を移譲すれば俺はこれからも普通の魔術師として生きていくことができる。

黒の陣営側であれば、きっとユグドミレニア一族の長であるダーニックに丸め込まれて聖杯戦争に参加させられるか、それとも〝このような魔術師に任せてはおけない〟と処理されて他の魔術師に令呪を渡すか、そのどちらかとなるだろう。

魔術師としては落第点だろうが、俺は死にたくないのだ。

あんな辛い思いは一度経験すればもう二度といらない。

きっとこの肉体、坂月真幌（まほろ）の魔術師としての知り合いであれば〝魔術師であるにもかかわらず死を恐れるとは何事だ〟と侮蔑の視線を向けてくるのだろう。

だが、俺は〝俺〟であって普通の人間として育ち、普通の人間として死んだ〝俺〟なのだ。

幼い頃から死と隣り合わせで育てられてきた魔術師では、ないのだ。

俺になる前の〝真幌〟の両親は、真幌が魔術師たちの巣窟である時計塔に留学するに先立って魔術刻印を継承し終えたのと同時に姿を隠している。

令呪が発現したのは現代魔術科（ノーリッジ）で授業を受けている時。

その存在はフラットに気がつかれ、エルメロイ先生……ウェイバー・ベルベットから参加しないほうがいいと言われて喧嘩するような形で教室を飛び出して家に帰り、そうして〝俺〟が目覚めた。

〝真幌〟はまず間違いなく聖杯戦争に参加するつもりで、きっと彼を含めた全ての人間が〝坂月真幌は亜種聖杯戦争に参加する〟と考えている。

というか俺だってそう思いたかったけれど、他の人たちが調べてくれている限りでは令呪が出現したという情報はないらしく、亜種聖杯は本来の聖杯に比べて出来損ないだという事実を考えるに誰か一人にだけ先に令呪を与えるなんてことはありえない。

ここまで思考が及んでは認める他ない。

俺が参戦するのは黒の陣営としてなのだと。
なぜなら、赤の陣営というものが出現する大前提となるのは〝ダーニック〟が離反し、ユグドミレニアを討伐に行った魔術師たちが聖杯の予備システムを起動した〟ということなのだ。
今はまだダーニックは魔術協会から離反したという話を聞いていないし、たとえ離反していたことを俺が知らないだけだったとしても〝聖杯大戦に選ばれた〟という考えに先生たちが至らないのはおかしな話だ。
もしかしたら俺がユグドミレニア側だから確保してしまおうという考え方なのかもしれないが、あらゆる要素が俺が赤の陣営である可能性を奪っていく。
だから、きっと俺は黒の陣営。
そうであるのならば〝坂月〟という家もユグドミレニアと協力関係にあるか、それともその一族に取り込まれているのか、どちらかであるはずなのだと、その証拠があるはずなのだと、都合よく〝真幌〟は令呪が出現するのと同時に、怪しすぎるから参加するなという先生に一度休学届けを叩きつけていたので、実家の方に戻って来たのだ。
数日間かけてユグドミレニアとの繋がりを探したのだが、俺の探し方が悪いのか見つけられない。
この数日間で少しは落ち着いた――――なんてことがあるはずない。
令呪が出現したこのタイミングは、俺の記憶が正しければ原典の方の世界では今から十年前ほどに第四次聖杯戦争（Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ）があったはずの時間軸。
つまりもうそろそろダーニックが魔術協会を離反するようなタイミングで令呪が出現して休暇に入るなど、自分がユグドミレニアだと言っているようなものだと少し考えればわかるようなことなのだが、それにすら思考が及ばない程度には俺はショックを受けていたのだ。
「先生……」
思わずロード・エルメロイＩＩ世に電話をかける程度には。
こういうところ、自分が現代魔術科に所属していて良かったと思う。

きっと他の教師だったら電話なんて持っていないから、思わず魔術師としての〝真幌〟ではない、俺としての当然を実行してしまってもきっと返答なんて来なかっただろう。
『貴様……いきなり休学届けを叩きつけておいて何の用だ』
いきなりの休学に対しての怒りもある。
にもかかわらず電話をかけて来たことに対しての困惑もある。
ただ同時に、生徒が無事であることに対しての安堵も見られるのだから、彼はいい先生だ。
どんな生徒であっても、悪態をついたとしても、基本的には見捨てない善人だ。
「先生……実家（日本）に帰ったのに令呪が消えないんです……」
『それがどうし……なんだと？』
エルメロイＩＩ世もその異常事態に気がついたようだ。
基本的に聖杯戦争において令呪とは『マスターとして聖杯戦争に参加する資格』であり、例外があるとはいえ基本的には『聖杯が存在している都市にいる魔術師に分配されるもの』であるのだ。
通常の聖杯ですらそれなのだから、亜種聖杯なんて紛い物の聖杯は『聖杯が存在しない都市に魔術師が出ていった』時点で戦う意思はないと判断して令呪を剥奪していたとしてもおかしくはない。
エルメロイＩＩ世もそのことを知るために、異常なのだと理解したようだ。
「逃げられないみたいなんで、俺はもう参加することにします」
『いや待て！　今からこちらに戻って来て別の魔術師に移譲すれば……』
「それをする間に他の聖杯戦争参加者に殺されかねないじゃないですか」
この連絡から少しして、ダーニックがユグドミレニア一族ごと離反したとなればエルメロイＩＩ世も俺がユグドミレニア一族なのだと知るだろう。
ただ、そうして敵になるとわかっているにもかかわらず連絡したのはきっと〝真幌〟の魔術師としての知識と〝俺〟の前世から得た知

識が関係している。
　これまでお世話になったロード・エルメロイＩＩ世ならば、先に連絡しておけばもしかしたら終わった後にかばってくれるかもしれないという。
　終わった後、ダーニックがすぐに離反したのだからわざわざ伝える必要もなかったにもかかわらず伝えて来たのは本当に関係がなかったからなのではないかと疑ってもらえるかもしれないという微かな希望である。
「じゃあ、聖杯戦争が終わったら先生のところに聖杯を持って帰りますよ」
　できる限り、普通の聖杯戦争参加者と同じ程度の知識しかないように思わせることができただろうか。
　電話をそこで少し強引に切って考えるのは、家の外に感じる濃密な死の気配。
　自分程度の魔術師では決して敵わないだろう、明確に魂そのものが別階梯にあるだろう存在について。
　きっと、サーヴァントなのだと思う。
　俺がユグドミレニアの魔術師だから迎えに来たのか、それとも期待できないから殺して別のユグドミレニアに令呪を移してしまおうということなのか、それともそうでないにもかかわらず令呪が出現したから先に殺してしまって自分たちの思う通りに進めようということなのか、彼らが何を思っているのかはわからない。
　ただ、一番最初の考え以外だった場合、俺は殺されたくない。
「っ……！」
　弾かれるように走り出して、考えるのはこれからのこと。
　令呪の兆しが存在したために、召喚しなければならないとは思っていた。
　ただそれも、Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒという作品で様々な英霊を知っていたために、性格と能力からサーヴァントを決めて、それにあった触媒を探して召喚を行えばいいという考えだった。
　というかそうでなくとも、記憶が正しければ大聖杯発見の報から

一ヶ月ぐらい経ってからヴラド三世とアヴィケブロンは召喚されていた気がする。
まだ聖杯発見の報すら入れていないのにどちらかは確実に召喚しているとは、一体どういうことなのか。
いや、今はそんなことはどうでもいい。
重要なのは、今から我が家の中にある触媒を探す時間はないということ。
消去の中に退去、退去の陣を四つ刻んで召喚の陣で囲む。
そうした魔法陣はこちらに帰って来てから用意はしていた。
今から触媒を用意して、なんてことはもう間に合わない。
触媒なしでのチャレンジを行うしかない。
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。手向ける色は〝黒〟。
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
魔力がこの身を蹂躙する。
内臓を他者の手で犯されるような感覚、という曖昧な表現しかされていなかったそれを初めて体感して顔を歪める。
けれどこの肉体はその感覚には慣れ親しんでいるのか呂律が回らないなんて無様は晒すことなく、魔術詠唱を進め世界に奇跡を顕現させる機構となることに一切の障害はない。
「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ満たされる刻を破却する」
詠唱が進む度に魔法陣が熱と光を帯びていく。
英霊という存在の召喚、それがいかなる神秘なのかを今の自分は魔術を知ってしまったからわかっている。
だから、今だけは外に迫っている死の恐怖を忘れないといけない。
「――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
俺は一体どんなサーヴァントの召喚を望んでいるのだろうか。
ふと心の中で問いかける。

無論、考えるまでもなくこの窮地を脱することができるサーヴァント。
ただそれは当たり前のことで、自分が考えているのは七つの座（クラス）のどれに座る英霊を呼ぼうかという話。
アサシンが一番正しいのだろう、とすぐに思い浮かんだ。
ユグドミレニアのサーヴァントがアサシン以外は全てミレニア城塞に揃っていたことを考えれば、ミレニア城塞外部にいたアサシンであった方が基本的な戦いに与える影響としては小さいだろう。
「誓いを此処に。我は常世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」
最後の一節に向けて力を入れる。
こと此処に至って、きっと魔力の猛りを感じているだろうにもかかわらずサーヴァントをけしかけてこないという現実に少しだけ早まったかなんて思う。
俺を殺すつもりだったのならばすでにサーヴァントに突撃させていただろう。
もしくは俺から令呪を剥ぎ取るために捕らえて洗脳をしていたか。
どちらであったにせよ、ダーニックであれば問答無用にできること。
それらをしなかったことから、彼は俺にマスターとして参加することを望んでいるのだと信じて、召喚の詠唱の最後の一節を紡いだ。
「汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――!!」
魔法陣から吹き荒れる魔力の暴風。
目も眩むような光もまた、暴風と出所を同じくして。
閃光が収束していき、暴風はそよ風へと緩んでいく。
魔法陣を中心として姿を覆い隠していた全てが剥がれていき、その人影をこの瞳が捉えた時、思わずして声を漏らしていた。
「え……え……!?」
金糸のような、という形容がとても似合うプラチナブロンドの髪のショートカットが一番最初に見えた。

次に印象的だったのは青の瞳。
そして少女の全体像がこの瞳に映り、思わず嘘だろと天を仰ぎたくなった。
青緑のフリルドレスに身を包んだ幼い少女。
俺の知る彼女と違うところなど、その額から生えている、彼女の〝令呪〟のデザインにこんな部分はなかったかと記憶のどこかを刺激される令呪と同じ赤き角と、これまた彼女の令呪を思い起こさせてくる翼。
そんな彼女がこちらに対して距離を詰めてきて。
「サーヴァント、黒のビースト。召喚に応じて参上したわ。……さあ、聖杯戦争を始めましょう？」
こてんと首を傾げる可愛らしい姿と、吐き気を催すほどの恋情と邪悪と純粋さが混ぜ込まれた声音で、少女はそう告げた。

第二話

〝黒〟のビースト。
そう名乗った少女のことを俺は知っている。
沙条愛歌。
原典（Fate/Prototype）の原典における黒幕。
星の聖剣の担い手たる騎士王に恋をして、彼の望みを叶えることだけを目的として東京の人々を生贄にして受肉させたビーストによって人理定礎を破壊することを目的としていた、まさしく『恋』が行動原理であった少女。
それこそが、今目の前に立っている少女である。
「あら、どうかしたのかしら？」
だから、決して気を許してはならない。
そもそもこちらのことを人間として見なしているのかすらわからない怪物なのだ。
どれだけ愛らしい見た目をしていても彼女は世界（ボトニアテローン）を食らう怪物なのだと心に刻みこめ。
暗示魔術を使用して自らに対して目の前の存在を気を許してはいけない存在にしか見えないように。
麗しい少女の見た目のままだといつ己の自制心が緩むかわからない。
そう思って使用した暗示魔術の効果が発揮されてきたのか目の前のビーストと名乗った少女がまさしくおぞましい獣に見えてきたところで。
「こう、かしら」
一瞬で、その魔術を解除された。
それも、俺とはまるで力量が違うことを示すように、強引に魔術を破られたにもかかわらず俺自身に対して何も影響がない。
こちらの動揺を無視してビーストは距離を詰めてくる。
おかしい、彼女はどうしてこちらに対してこんなに距離感が近い？
俺は騎士王というわけではないのだから、個人として認識されるは

ずがない。
というか彼女が本当に人類悪（ビースト）ならば、俺（マスター）なんて必要がないはずだ。
そんな俺の疑問などつゆ知らず、いつのまにか距離を詰めていた少女の宝石のような瞳がこちらの瞳を捉えて離さない。
「それで、あなたの名前は？」
「……え？」
「だから、あなたの名前。いつまでも『貴方』や『マスター』で呼ぶわけにはいかないでしょう？」
この女は何が目的なのだろうか、と思って一つ思い出した。
彼女のことではなく、他の世界（FGO）でグランドキャスターとしてあった魔術王ソロモンのことだ。
彼は視界を合わせただけで相手に呪いをかけるなんてことをしでかしていたのだから、（グランドサーヴァントと根源接続者のどちらが上かはわからないが）名前を知ればパパッと呪いをかけるぐらいなら確実にこの少女もできるのだろう。
つまりはそういうことなのだと理解して、ならば名前を教えなければいいのではないかという結論に達しないわけがないのだが、もう一つだけわかっていることがある。
そもそもこの少女は、理由はわからないが俺のサーヴァントとして召喚されている以上、俺は彼女から逃げられないということだ。
どれだけ死にたくなかろうと、彼女の気まぐれで即座に死んでしまうのだ。
それこそ、令呪を使う暇すらなく。
だったら、名前を隠していても意味なんてないか。
「真幌……坂月真幌」
「そう、なら真幌。これからよろしくね」
「……ああ」
そこまでやってようやく、俺はなぜビースト（サーヴァント）を呼んだのかを思い出させられることになった。
外の存在の気配がより強くなったのだ。
そういえば、外にサーヴァントの気配がしたからこちらもそれに対

抗するにはサーヴァントの力が必要なのだと思って召喚しようと思ったのだ。
もちろんビーストもその気配には気がついているのだろうが、だが何もアクションを起こそうとはしない。
「で、どうするの？」
挙げ句の果てにはこちらに行動の方針を決める権利を与えてくる。
なんなんだ。なんなのだこれは。
擬似サーヴァントと呼ばれる存在なのだろうということすら忘れて、この女は本当に沙条愛歌なのか、そんな疑問すら浮かんでくる。
彼女は彼女自身の目的のためなら全てを利用して、合理的な手段で願いを叶えるのではなかったのか。
「……とりあえず、敵かどうかわからないから下手に情報を与える必要もない……と、思う」
「ええ、わかったわ。それならクラスとかを誤魔化すってことでいいのよね？」
「頼む」
もしかしたらこの行為も『俺が使える相手かどうか』を確かめるための行動で、使えないようならば即座に殺して別の人間と契約をするということなのかもしれない。
だからできる限り時間をかけずに、その上で下手を打たないような方針を立てなければならない。
つまりはそういうことなのだろう。

外にいたのはやはりというべきかダーニックとそのサーヴァント、黒のランサー。
ダーニックとの話し合いは、最初からそのつもりだったのか、それとも俺がサーヴァントを召喚していたことによって変化したのかはわからないが、俺の手に出現した令呪は亜種聖杯戦争のものではなく大聖杯によって配布されたものだということを伝えられた。
大聖杯という象徴を手にして、サーヴァントという力を手にした

ダーニックは魔術協会から離反をして、そしてどうやら予備システムを起動することで七対七の聖杯大戦を行う予定らしい。
俺の記憶では予備システムを起動させられたことは確かユグドミレニアのミスだったはずだが、この世界では元から予定している、とのこと。
サーヴァントという力に頼りきってのものではなく、〝ユグドミレニア〟という魔術師の一族の力を見せてやるつもりなのだ、と。
「それで結局、お前はどういうサーヴァントなんだ？」
テーブルを挟んで向かい側に座るこの少女は、そう宣言したダーニックに対してアサシンのサーヴァントを名乗った。
それもキャスターに対しても適性があるから、別行動をさせてほしい、とも。
そちらにもキャスターが召喚されている、あるいは召喚されるだろうから工房同士が干渉して力を発揮できないのは意味がない、と。
確かにキャスタークラスの工房を作れるというのは嘘ではないのだろう。
だが、彼女がそんなものを作る理由があるのだろうか。
無制限の空間転移すらできる根源接続者、それがサーヴァントになった存在に。
そこまで考えて思い出したのだ。
彼女は擬似サーヴァントと呼ばれる存在なのだと。
少なくとも『沙条愛歌』と呼ばれる少女には英雄譚も、英雄譚で倒される怪物としての役割も、記録として残されていない。
ならば彼女は『沙条愛歌』というサーヴァントではなく、その少女を依り代にすることでランクダウンして召喚されてきた神霊か何かのはず。
「お前が本当に……俺が知る人類悪（ビースト）というクラスなら、俺（マスター）なんて必要ないはずなんだ」
『単独行動』というスキルがある。
マスターが不在、あるいは魔力供給がない状態でも長時間現界していられる能力のことだ。

それでもこの能力は『マスターによる召喚』が行われなければ効果がない。
そして人類悪（ビースト）には『単独顕現』というスキルがある。
これは召喚すらも自分の意思でできるスキルなのだと、そんな程度のふんわりとした理解しかないが、その程度の理解ですらも、マスターが必要というサーヴァントとしての大原則に喧嘩を売っていることがわかる。
つまり彼女には俺なんて必要がないのだ。
「そういえば、自己紹介もまだだったものね」
くす、と笑った少女はもう一度、今度こそは正確な自己紹介を行う。
この少女が擬似サーヴァントの依り代として選ばれたことにはなるほどと思う他ないサーヴァントであり、同時にこんな化け物を召喚してしまったと、恐怖を覚えてしまうサーヴァント。
「私は黒のビースト。真名はマザーハーロット」
マザーハーロット。
黙示録の獣に騎乗していたという大淫婦バビロン。
そして、その黙示録の獣とはつまり、東京の聖杯戦争において沙条愛歌が召喚しようとしたビーストなのだ。
かつての世界では型月におけるマザーハーロットはネロ帝だろう、というのが通説だったのだが、擬似サーヴァントとして呼ばれるにあたり彼女を依り代としたらしい。
……ただ、彼女の真名については納得できてももう一つ、彼女が俺のサーヴァントとして召喚された理由についてはわからないままだ。
まあ、それはそれでいい。
向こうが話す気がないというのなら無理に話させようとする方が間違っている。
人道的な観点から見ても、そもそも俺が死なないためにも。
「そっちも話すわよ？　気になってるんでしょう」
「……いや、確かに気になってるけど」
どことなく狂気を感じる。
正確には生き生きとし始めているような気がする。

いくらマザーハーロット要素が入ったからといって、一体その割合がどれくらいのものなのかわからない。
そもそもマザーハーロットという時点でヤバい要素しか入っていない。
そんな沙条愛歌が生き生きとし始めて嫌な予感以外の何かを覚えることができるやつがいるというなら手をあげてほしい。
「話はね、まずこの世界には真幌（セイバー）がプーサー（の）と呼ぶ人物（アーサー王）がいないことから始まるの。そのせいでやる気を含めた何もかもがなくなって、ふらふらーと歩いていたんだけど、そんな時に私、平行世界を見たのよ。そしたら何があったと思う？　その世界の私が恋人と手を繋いで千里眼チャンネルで中指を立ててる光景よ！　もうこれは喧嘩を売られていると思うじゃない！　それ以外に考えられるはずもないじゃない！　そうなったからまず私は考えたわ。どうしたら私は私の王子様と会えるのか、ヒントをくれたのは綾香よ。小さい頃のあの子が持ってた絵本が、私にヒントをくれたの。そう……『私の手で理想の王子様を作る』の。これならもう、私の思う通りの王子様ができるじゃない。妙案としか思えないじゃない！」
「……それ、俺を選ぶ意味ない気がする」
一息に言い放ったビーストに思わず、といった様子で呟いて、その直後にやばいと思った。
こんなことを言えば消される可能性だってある。
だって今彼女がいったじゃないか。
『理想の王子様を作る』と。
どうして俺がマスターとして選ばれたのかわからないが、それなら『彼女が契約するに値する理想のマスターを作る』ために消されてしまっても何もおかしなことではないではないか。
ただ、どうやら聞こえていなかった、あるいは聞かなかったことにするようで、彼女は俺の発言を無視している。
ちょっとホッとした。
「そういうわけで、あなたには私の理想の王子様になってもらうわ！」
「愛歌Ｐ……！」

いや、違う。
そういうことではない。
確かに彼女は俺を理想の王子様にプロデュースしようとしているが、別に彼女は俺のプロデューサーでもなんでもない。
「私の理想の王子様を作ろうなんていう話なのに、どの人物がなれるのかなんて確かめてもつまらないでしょう？　だから、私の直感に従って選んだの！」
……それは、誇ってもいいのだろうか？
一応見た目だけならば可愛らしい〝絶世の〟という形容をつけても文句は出ないだろう美少女だ。
中身を考えればアウトなのだが、そんな少女に直感であっても〝この人いいな〟と思われたわけなのだから。
恋情を向ける対象として見られたというのは、少し嬉しいかもしれない。
「その理想の王子様とやらがどんなものなのかについては俺はわからないから置いておくけど……」
話す時には興奮して、事前に沙条愛歌のことを知っていた俺以外であればきっとわからなかっただろう彼女の目的とそこに至るまでの経緯を知った。
そもそも彼女が死んでいるのかすらもわからないために、というかまず間違いなく死んでいないために第二の人生を望むわけではないだろう。
そして理想の王子様についても、今の話からして願うのではなく自力で作ろうとする様子が見えた。
ならば彼女は、一体何を聖杯に望むのだろうか。
聞いてみたい気持ちはあれど、聞いてはいけないという警告もある。
死にたくないので後者に従うことにした。
「とりあえず、聖杯大戦を終わらせないことには話は始まらないよなぁ」
日本にいたままでは聖杯大戦には参加できない。

正確にはできないわけではないが、局所的な戦闘には思ったタイミングで参加が難しい。
そうなるとミレニア城塞に拠点を移してしまった方がいいのかという話にもなるが、それに関しては彼女がすでにダーニックに伝えてしまった『キャスター適性を完全に発揮するため』という言葉が邪魔をする。
とはいえ、そのどちらもどうにかする方法はちゃんとある。
すぐに戦場に駆けつけることができる位置で、かつ工房同士が干渉をしないであろう程度の距離を保っている。
要するにミレニア城塞から離れた、けれどトゥリファス内部にある霊地として使える土地でユグドミレニアが確保している土地を使用させてもらえばいいのだ。
無論監視はつくのだろうが、その辺りはどうにでもなる。
「まあ、まずは何はともあれルーマニアに向かうか」
さしあたってビーストが霊体化するつもりはあるのか。
というかサーヴァントとして召喚されているとはいえ彼女に霊体化ができるのか。
するつもりがない、あるいはできないのであれば角と翼を隠してもらう必要はあるのだが。
ルーマニアに移動しない限りは話が進まないのだ。
彼女ほどの存在に隠蔽ができないとは思わないので、ルーマニアに向かうことそれ自体で詰まることはないだろうから、問題は本当に彼女の機嫌だけなのだった。

第三話

「はい、そういうことなので……」

令呪が出現して、休学届けを出してからすでに一ヶ月。

それはつまり、ユグドミレニアが魔術協会から離反をしてからの期間とほとんど同じである。

そんな中で連絡を取っているのは先生。

ぶっちゃけた話、俺はユグドミレニア相手に特別何か感じ入るところはなく、そんな連中のために魔術協会を裏切る義理も、ましてやロード・エルメロイII世を裏切る理由なんて見つかるはずがない。

というわけで気分的にはユグドミレニアに潜り込んだスパイのようなもの。

サーヴァントもいるのでそう簡単には殺されないだろうな、という安心感もある。

そのため、『ユグドミレニアがすでにサーヴァントを召喚している』ことと『ダーニックの予定では魔術協会側に予備システムを起動させて自分たちの魔術師としての力量も見せつける』ことが目的だということに関しては伝えることができた。

これらを伝えたことはユグドミレニア側にはバレていないと信じたい。

とりあえずルーマニアに入った記録、日本を出国した記録はユグドミレニアによって消してもらい、アサシンのサーヴァントの居場所を魔術協会側に知らせないために城塞とはまた別の住居を用意してもらった。

そうすることで、ユグドミレニア側なのだと思わせようとしているのだが、どれだけの効果があるのかはわからない。

無論監視はあったのだが、その辺りはサーヴァントによって誤魔化されている。

相手が通常の魔術師とゴーレム専門の魔術師（キャスター）だけだから、安心して魔術協会側と連絡を取ることができる。

「電話は終わったの？」

「先生にとりあえず状況は伝えた。怪しまれないように普通に聖杯大戦に参加しろってさ。まあ、ユグドミレニアが勝ちそうならそのままで、魔術協会が勝ってもそれはそれで受け入れられる土壌だけはある。だから、どんな結末だったとしても、まあ悪いことにはならないと思う」

どっちつかずであることを罵られるかもしれないが、生存第一なので、そんなことを気にするつもりはない。

ユグドミレニアが用意した、ということでそれなりの広さはある一般邸宅といった様相の家。

そのキッチンからフリルドレスの上からエプロンをつけたビーストが姿を現す。

持っているのは二人で食べるには十分な量のクッキーを載せた皿。

蒼銀のフラグメンツと呼ばれる物語ではセイバーのためにどう考えても一人で食べきれる程度の量ではなかったことを考えれば、料理の量が彼女が相手に対して持っている期待（恋情）の大きさなのだろうか、なんて益体のないことを考えてしまう。

召喚してダーニックと会話した直後には思わず愛歌Pと呼んでしまったが、このルーマニアで暮らす関係で現界して外に出るのであればアサシンともビーストとも呼ぶのは目立つ。

それに伴って愛歌と呼ぶことにはなったのだが、やはり彼女を呼び捨てにしているという事実に戦々恐々としてしまう。

まあそれでも、一ヶ月も過ごせば少しはわかることはある。

彼女が俺のことを『理想の王子様の素体』として見ているおかげで、基本的にはサーヴァントとしての仕事はちゃんと果たしてくれる。

あまりにも無茶な命令でなければきっとそれは変わらないのだろうが、そもそも彼女の無茶の基準とは一体どのラインなのだろうか。

「今日あたり、魔術協会側が派遣する『狩猟』特化の魔術師で構成された部隊がトゥリファスに到着するらしい」

つまり、聖杯大戦の前準備が整うということ。

これから魔術協会側がマスターを選定して、そしてそれらが派遣されることになるのが二ヶ月後。

後二ヶ月の間しか、俺が準備をできる時間はありはしない。
「礼装の作成も急がないとな……」
〝真幌〟は礼装を用意していなかったらしく、俺が一から作るはめになった。
きっと、〝俺〟になったことで一番良かったのはその事実だろう。
まず、通常の魔術師然とした彼は電子機器に関しては（他の魔術師よりはマシとはいえ）疎かったのだが、〝俺〟は特別そういうわけではないので普通にインターネットで調べて着想を得ようということを考えられた。
そして次に。
「あら、そこはこっちの方がいいんじゃないかしら？」
「そっか……」
通常の魔術師である彼では、きっと沙条愛歌から延々と繰り返される指摘と改善案に耐えきれずに発狂していただろうから。
かくいうおれも、彼の持っていた知識でどうにかこうにか礼装を作ろうとして数時間。
その休憩ということで先生に対して連絡していたのだが、今キッチンから戻ってきたばかりなのにしれっと直した方がいいところを数カ所指摘されてしまった。
一応これでも位階持ちになれるのではないか、と言われるほどの魔術師だったようなので、きっと当人が聞いていたら……。
そんな嫌な考えは頭の中から追い出して、この魔術礼装の核となる鏡への魔力の込め具合を確認。
我が家の魔術は〝反射〟であり、磨かれた石、透き通った水面、その他諸々の〝姿を映すもの〟を利用することが多いのだが、真幌の場合は起源が〝鏡〟だったらしく、一族全体から待ち望んだ子供だの神童だのともてはやされていたらしい。
では、そこに〝俺〟という存在が入ったことで何か変わったのかという話なのだが。
「起源が関わる魔術ができなくなったということもないんだよなぁ……」

俺が知る限りでは特に何も変わってはいない。
鏡の魔術はしっかりと機能していた。
強化された動体視力で捉えたビーストの動きをしっかりとトレースしていた。
サーヴァントとしての身体能力を使っていたために俺の体が痛みを訴えていたのだが、それに関しては自分でできる以上の動きをすればその分の揺り戻しが来るというだけのことで、別に変化したことでもなんでもない。
「できれば聖杯大戦よりも先に知りたいところだけど……」
どう変化したのかの予想すら立てられないのであれば意味がない。
ビーストは知っているのだろうけど、特に教えてくれる気配はない。
「あ、うまい」
考えれば考えるほど頭が痛くなってきたので、ビーストが先ほどキッチンから出てきたときに持ってきた、(おそらくは手作りの)クッキーを口に入れて思わず呟いた。

「あー……こういうことね……」
その日の夜、鏡でできた鳥によってミレニア城塞のことを覗いてみれば、黒のランサーことヴラド三世が魔術協会から派遣された狩猟特化の戦闘部隊を相手に無双をしている姿が見受けられた。
俺なんかとはまるで比べ物にならないほどの実力を持つ魔術師たちが、戦場を知る魔術師たちが為す術なく殺されていく。
それでも、一人だけ先に進んでいるのはやはりダーニックが最初から予備システムを起動させて魔術協会側にも聖杯戦争に参加させるつもりだからだろうか。
俺はダーニックではないためにその辺りのことはわからないのだが、代わりに一つだけ、魔術についての変化がわかった。
「これまでは魔力を通した鏡に映った相手なら複数を対象に出来たけど、今は一人にしかできないのか……」

対象が狭まっている。
それだけの違いであり、さっきまではビースト以外に対象にできる人物がいなかったために気がつかなかったこと。
ミレニア城塞に攻め込んだ魔術師たちは誰がどの属性の魔術を使っているのかわかりづらいので、対象は黒のランサー。
彼の動きを鏡に映すことで、俺(鏡)の中にも存在させる。
無論、身体能力は違うのであのレベルをそのまま顕現させるのは難しいだろうし、劣化しての顕現でも自分の肉体が堪えきれるとは思えない。
結局のところほとんど意味がないような気がするのだが、英雄と呼ばれる存在の動きを覚えられる機会など滅多にない。
「それで、どうするの真幌」
「そうだな……」
ダーニックからは手伝わなくてもいいと言われている。
皆殺しにしてしまえば聖杯大戦が行えないのだから。
〝魔術師〟としてのユグドミレニアを認めさせるためには、サーヴァントに頼りきって殲滅しても意味はないと、彼が言っていたのだから。
「幾ら何でもルーマニアで召喚されたヴラド三世を倒せるような魔術師がいるとは思わないけど……万が一にもあの中に愛歌レベルの存在がいた時のために、一応最後まで確認だけはしておこうか」
そもそもそういう存在であれば未来もすべて確認できるから自殺してしまうとかなんとか、そんな記憶があるから、俺自身そんな可能性はないだろ、と思いながら。
ビーストも、俺が如何なる存在なのかは知っているらしい。
なので二人でいる時ならばすでに教えられているヴラド三世以外のサーヴァントの真名を口にしても問題はない。
それにしても、とヴラド三世による、陣地と化したルーマニアにおける無双劇を見ながら思う。
前世ではテレビやゲーム、文章という形でしか英霊(サーヴァント)という存在の力を知ることができなかったので実感がなかったが、こうして使い魔

越しとはいえ実際に見てみるとルーマニアで召喚されたヴラド三世が敗れるとは思えない。
にもかかわらず敗北してしまったのは一体どういう理由なのだろうか。
いや、知識としてはわかっている。
大聖杯を奪われ、それを取り戻すために庭園内部に侵入し、ルーマニア(空中庭園)の外で戦った結果として形勢が不利になった。
その後、ダーニックによって宝具である『鮮血の伝承(レジェンド・オブ・ドラキュリア)』を使用させられて、吸血鬼と化したことによって天草四郎の洗礼詠唱が弱点となり、それを受けたがために消滅したのだ。
ならば、どこがミスだったのだろう。
「……」
ヴラド三世は吸血鬼としての力を使うつもりはなく、使わせるのであれば死を覚悟しろというほどの嫌悪を持っている。
だが使わなければ敗北は必至だった状況であり、あの状況で令呪を使用して使わせるのは別におかしなタイミングではなかった。
敵に天草四郎時貞がいるなんて、当たり前に考えれば誰も想像がつかない。
その結果、彼らの願いは永遠に叶うことはなくなった。
個人的には、信頼関係のあったアーチャー主従とバーサーカー主従は、というかこの世界以外の聖杯戦争も含めて、『信頼関係のある主従というのはまともな結末を迎えやすい』という関係性があるような気がする。
そうした主従のマスターの方は、最初から思い描いていた通りの形ではないながらも、それでも自分で納得する形の結末を迎えることはできていた。
となると、俺も自分のサーヴァントと信頼関係を結ばないといけないのだが。
「あら、どうかしたのかしら?」
「……いや、なんでもない」
これと?

沙条愛歌(ビースト)と？
いくらサーヴァントとして召喚されていて、俺と契約の経路(パス)が繋がっているとはいえ、ちょっと取り扱いを間違えれば世界を滅ぼしかねない劇物と？
いや、そんな未来のことを考えても仕方ない。
そもそも負けると決まったわけではない。
セイバーのように、彼女が背中を安心して向けられる相手はここにはいないし、もしも俺が万が一にも彼女のいう『理想の王子様』になったとしても、俺には彼女を一撃で殺せるような何かはない。
負けた後のことを考えるのではなくて、俺が勝つための手段を考える方が健全だ。
「とりあえず、あと二ヶ月程度で聖杯大戦が始まるわけだけど」
「それまでの間は魔術工房の作成でしょ」
つまらないというような表情を一切隠さないビースト。
その事実に殺されるのではないかとヒヤヒヤするのだが、それでも従ってはくれるらしい。
「でも、真幌だってわかってるでしょ？」
「ああ、わかってる」
キャスタークラスのサーヴァントは、召喚されてから聖杯戦争が終わるまでのわずかな期間でその工房を完成させる。
それは『陣地作成』というクラスがあるからなのかもしれないが、それは今はどうでもいい。
重要なのは、この少女が蒼銀のフラグメンツにおいて神殿クラスと明言された魔術工房を平然と踏破していたことだけ。
そんな少女が、根源接続者であるこの少女が、魔術工房を作れないはずがない。
無論、陣地作成がないから少し時間はかかるかもしれないが、それでも彼女の様子を見る限り、完成まで後二ヶ月も必要ないのだろう。
だが、今彼女が言っているのはそういうことではない。
この状況で魔術工房を作るのに二ヶ月間もかけるのは馬鹿げているという彼女の様子。

それは沙条愛歌の能力が原因ではなく、擬似サーヴァントであるビーストとしての顕現に伴って持ってきた能力に起因する。
「それ、そんなにぞんざいに扱っていいのか？」
「別にいいのよ、私のものなんだから」
そう言った彼女の手の中では、黄金の杯が弄ばれていた。

第四話

『溢れる邪淫の杯（ルクスリア・アウレア）』

それが、沙条愛歌（ビースト）の持つ黄金の杯、つまりは彼女の宝具の名称である。

マザーハーロットの持つ姦淫による穢れに満たされた杯と、沙条愛歌が繋がった蒼銀のフラグメンツの聖杯が合一となったもの。

その中身は沙条愛歌の持つ聖杯同様の膨大な魔力であり、マザーハーロットの持つ聖杯の中身なのかワインのような赤い液体であり、様々な効能が見受けられる。

例えば、魔力炉として使用すればこの霊地で用意できる程度の工房を遥かに上回るものを用意できるし、ワインとして使用するのであれば中身は姦淫による穢れそのものなのだから、お互いの理性を緩める魅了としての効果を発揮する。

つまり現界してしまった時点で、彼女がビーストか否かは置いておいたとしても、その気になれば、彼女は俺を殺して一人で聖杯大戦に突入することも不可能ではない。

そんな中で、俺の我儘だけを通そう、なんてことができるはずもなかった。

というわけでビーストのご要望によるデートである。

「あら、いくらなんでもそれはひどくないかしら。私はデートを求めたけど、あなたも出かけること自体には賛成していたじゃない」

彼女と繋がれた俺の手にあるユグドミレニア特有の二画分で構成されている千年樹の葉と、そして最後の一画である沙条愛歌が聖杯戦争に参加した時の熾天使の令呪と同じ模様でできている三画の令呪は魔術によって隠されている。

俺が手の紋様を隠すのと同じように彼女もその背中から生えた羽と頭の角を隠している。

「俺が求めたのはデートじゃないって。このあたりの地形とかを確認

するだけのことじゃないか」
訂正はしたが、彼女の耳には届いていない。
都合の悪いことだから無視しているのだろうか。
それとも興味がないから聞こえていないのだろうか。
鼻歌を口ずさみながら歩く彼女の姿にそんなことを思いながら、俺も彼女につられるようにして歩を進める。

『デートは男性にリードしてもらうのもいいけど、お互いの行きたいところ（興味のあるもの）を擦り合わせて、どこにいくのか決めても楽しいと思うの』

デートをしたいと言った彼女はそう宣言した。
彼女は怪物なのだと理解していて、それでもなお見惚れてしまうような美しい笑みを浮かべてそう言ったのだ。
俺は彼女のいう『理想の王子様』というものがどういう代物なのかわからない。
彼女が作る『理想の王子様』とやらが星の聖剣使いたる騎士王……彼女のサーヴァントであったアーサーだというのならば、きっと彼女はもう一度その『王子様』に殺されることになり、その恋情が叶うことはない。
彼女自身それはわかっているのだろう。
そうでもなければ、あらゆる事象を繋がったことで知っている根源の姫が、あんな薄っぺらい言葉を、あんな薄っぺらい笑顔で口にすることはなかったはずだ。
……そう、薄っぺらかったのだ。
本来なら恐ろしい、と思うはずの彼女に対して、ここまで空虚な言葉と笑みを浮かべられるのか、と痛ましさを覚え、それによってできた空白に、純粋に整った顔立ちの笑みが届いたことで見惚れてしまった。
きっと、彼女自身が求めている『理想の王子様』がどんな代物なのかに気がついていない。

強大な力を持っているとはいえ、いくら根源と繋がったことで知識を得ているとはいえ、彼女自身はたかだか十数年生きてきただけの、経験すらないただの少女なのだと理解させられてしまう。
ああ、こういうのはダメだ、そう思う。
彼女のことを完全に『こちらの人生を弄ぶ怪物』として見ることができていれば、きっと俺も怪物と人間としての関係で、どうにかして彼女から逃れようと躍起になることができていたのに。
こうして人間味のあるところを見せられると、ヤンキーが子猫に傘をさしているのを見た同級生のように、これまで見てきた根源の姫としての部分ではなくただの少女としての部分が俺の瞳には強調されてしまう。
ただ、それでも下手な行動は俺の死に直結することには変わりないという事実だけが、これまでと同じ行動を取らせてくれている。
「今日は使える時間が限られてるんだから、早めに確認の方は終わらせたいんだ」
これまでと同じように、聖杯大戦に向けての準備。
聖杯大戦を行うことになったのはいいのだが、ユグドミレニアがヴラド三世を呼んだために強力な魔術師に強力なサーヴァントを呼ばせるということを魔術協会側は行う予定らしい。
原作の通りならばカルナやアキレウスといった強力無比なサーヴァント。
当然のことながらダーニックは今回の聖杯大戦では誰が召喚されるのかまではわかっていないが、彼はロード・エルメロイⅡ世が参加した聖杯戦争を知っていたらしく、それに伴う形でイスカンダルという英霊についても知っていたらしい。
そのため、サーヴァントを呼び出すサーヴァントなんていうチートも彼の知識の中にはあったようで、それもあってか英霊召喚は触媒を手に入れ次第行う、ということに。
魔術協会からの離反が原作開始の三ヶ月前。
さらにそこから一ヶ月間かけて作られた『狩猟』特化の魔術師の部隊が壊滅。

そこから二ヶ月かけて魔術協会側のマスターが集められたわけだが、ユグドミレニアはダーニックとロシェ以外の全員がその最後のマスターである獅子劫界離とほとんど同時期にサーヴァントを召喚しているのだ。

つまりそれ以前に襲撃を仕掛けられていれば、いくらホムンクルスやゴーレムがいるとはいえユグドミレニアが滅んでいてもおかしくはなかったはず。

マスター同士のサーヴァント召喚の順番で序列をつけたりしないため、という名目もあったのかもしれないが、それでもそのことを考えれば、同時召喚にしないのもおかしなことではない。

そして今日は、アインツベルンの伝手で菩提樹の葉を手に入れたのだろうゴルド・ムジーク・ユグドミレニアがジークフリートを召喚する予定なのだ。

夜にはミレニア城塞に向かわなければならない。

ただ、それまでの時間は全て彼女のために使用することができる。

彼女が求める『理想の王子様』の像を探すことについては手伝いをする。

それはつまり、『彼女が求める理想の王子様を演じる』ための指標となるから。

自分が死にづらくなるのだ、と思えるから。

その日の夜、ミレニア城塞にて。

召喚儀式が行われる王の間に俺たちが到着した時点で、他の黒のマスターになる予定の魔術師たちは到着していた。

とは言ってもアサシン(相良豹馬)を召喚する男はこの場にいない。

そもそも、残りのメンバーに関しては令呪があるためにすぐにわかったことだが、彼の令呪がそのまま俺に渡ってきたのだ。

相良家の魔術の特性からして諜報要員としてしか活躍できないだろう彼が、この場にいないのはある意味当然とも言えることだった。

セイバーを召喚する予定のゴルド・ムジーク・ユグドミレニアの詠

唱を、霊体化できないらしいビーストと共に眺める。
カウレスなんかはビーストの美貌に見惚れていたりしたのだが、姉であるフィオレに諌められていたりした。
「汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」
そんなことを考えていればゴルドの詠唱が最後の一節まで終わる。
上座にある玉座に座りその光景を眺めるヴラド三世も、もしもサーヴァント召喚に失敗、それどころか召喚されたサーヴァントが状況を判断することなくこちらのマスターたちに襲いかかるようであれば即座に処理できるように眺めている。
「召喚の招きに従い参上した。サーヴァント、黒のセイバー。我が運命は千界樹（ユグドミレニア）と共にあり、我が剣は貴方の剣である」
だが、ランサーの処理が行われることはない。
魔法陣の中心に出現し、その銀灰色の髪を魔法陣から昇る風に揺らしながら、燦然と輝く全身鎧に身を包んだ大剣を背負った男性は、確かな理性と知性を宿した瞳でゴルドに向けてしっかりと言い放った。
そして、彼が〝黒の〟と言葉にしたことからわかる通り、聖杯から呼び出されたサーヴァントには〝陣営〟という概念がしっかりと根付いている。
ならば、それを行う必要などないのだ。
「ではゴルド。そのサーヴァントの真名は？」
「俺は――」
「……悪いが、私はこのサーヴァントの真名をこの場で開示するつもりはない」
本来の聖杯戦争は六騎のサーヴァントを倒した暁には、勝者は願いをなんでも叶えられるという謳い文句である。
赤の陣営を七騎倒せば問題など何もなく願いを叶えられるのだと信じているから、少しでも勝利の可能性を高くするために真名を聞いてしまう。
それは何も間違いではない。
だが同時に、少しでも漏れる口を少なくするために情報を与えない

ということも間違いではない。
「真名の開示は最初から申し合わせていたことでしょう。それを反故にするというのなら、私たちも真名を開示する必要性はないということかしら？」
セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアの冷ややかな声。
並大抵の精神力しかない相手ならば、きっとその目を向けられただけでも泡を吹いて気絶してしまうだろう。
しかしゴルドは気にすることはない。
「……私のサーヴァントは逸話における弱点が致命的でな。それが知られる可能性は少ない方がいい」
というかだ、とゴルドがこちらに、より正確にはビーストに対して視線を向けてくる。
しかめ面のおっさんに見られても嬉しくはない。どちらかといえばフィオレのような可愛い女の子に見られる方が……。
「私のサーヴァントの真名について尋ねるのであれば、それよりもまずはそちらの小僧のサーヴァントの真名について尋ねるべきではないのか」
ダーニックはすでにゴルドから彼のサーヴァント（ジーク フリート という名）の真名を聞き及んでいるはずで、そのこともあって彼の特例を認めるつもりだった、ということが外典の物語では確かに語られていた。
そして、今さっきセレニケが言葉にした通り、ユグドミレニアの魔術師たちはサーヴァントの真名については開示することが予め決められていたのだが、俺とビーストに関してはその取り決めに参加していなかった。
そのため、ダーニックがやってきた時に真名を語らずとも〝仕方ない〟といった雰囲気で許してくれたのだが――。
「あら、自分は弱点が致命的だから語らないというのに、他の人間には語れっていうのかしら？　私にも致命的な弱点があるから語りません、って言っても文句を言うつもりはないのよね」
正直、彼女の真名について語ると言うのは恐ろしい。
黒の陣営の領主（ロード）は、あのヴラド三世だ。

信仰心に篤い人格者であり、一旦敵と見なした者には苛烈に対処するが、味方の見解や意見を尊重し、付き従うものには非常に寛大な態度で接する優秀な王。
ただそれでも、ビーストの、彼の教義における敵対者に当たるであろうマザーハーロットという真名を受け入れることができるのか、と言われると、保証ができない。
それにもかかわらずビーストが勝手に話し始めるのだから、心臓はばくばくと鳴って止まらない。
だが、この状況だったら語るつもりはないというような結論にたどり着きそうで少しだけホッとしているところはある。
周囲からの視線は冷ややかになってきたが、どちらが前例であるか、ということは置いておくとして〝真名を明かさない〟という答えを自分以外にも出しているというのは、小市民な俺からすればありがたいことだ。
「まあ、別に明かしても問題はないのだけど」
なので、ビーストのその発言に対しては俺を含めた全員が驚いた。
どう考えても明かさない流れだっただろ、と悲鳴のような声をあげなかったのは自分のことを褒めたい。
多分俺以外も同じ気持ちだったと思う。
こんな形で同じ気持ちになるなんて、誰も望んでいなかったと思う。
「私はアサシンのサーヴァント、真名はネロ・クラウディウス」
ついでに、ビーストが真名を名乗らなかったというのが少し驚いた。
彼女は〝蒼銀〟の話では、願いを叶えるためならば意思を無視することが多々あった。
理想の王子様であるアーサーの言葉を無視したにもかかわらず、俺の〝真名を明かしたくない〟という思いを汲んでくれるとは思わなかったので、何か悪巧みをしているのではないだろうか、と思ってしまう。
ただ同時に、ビーストであるマザーハーロットはネロ・クラウディ

ウスであるという説が濃厚だったということを思い出したことで、悪くはない発言だったのではないかとも思う。
そして同時に、ネロ・クラウディウスは（史実の方は知らないがこの世界では）幾度となく母親を暗殺しようとして失敗したという事実があることも。
『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ』で初登場したアサシンのサーヴァントである荊軻は『始皇帝の暗殺に失敗した人物』だということを考えれば、暗殺についての逸話があれば成功の如何は問われないのだろう。
とりあえず、彼女がそう名乗ったという事実がここにある以上、ヴラド三世が消滅するまでは最低限隠さないといけないのだと覚悟を決める。
ヴラド三世も聖書で描かれるマザーハーロットという存在、それが七つの頭と十本の角を持つ緋色の獣に騎乗した女であり、その〝七つの頭〟とはローマ皇帝であり、獣に騎乗した女とは〝ローマ帝国〟の暗喩であることは知っているはずだ。
そのため目を細めながら、されど今は同じ陣営であるためにそれ以上は何も言わないらしい。
これが嘘で、マザーハーロットだなんて知られたら、何が起こるのかわからない。
隠し通さなければならない、と覚悟を決めたところで皆の視線がゴルドに向く。
こいつが語ったのだから、お前も語らないと道理が通らないという顔だ。
それらを向けられたゴルドはうっ、と呻きを漏らして――――。

第五話

結局、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアは彼のサーヴァントであるセイバーの、ジークフリートという真名を語らなかった。

それのせいで『坂月真幌には語らせたくせに自分は語らないのか』というような冷ややかな視線を全マスターから受けて肩身の狭い思いをしそうだったのだが、それは俺には関係のないこと。

むしろ、サーヴァントとしてはともかく、ヴラド三世個人としては敵側であるネロ（ロー）・クラウディウス（マ）（皇）（帝）という真名を隠していたことにまで理解を示されてしまったために、きっと普通に真名を明かさなかった場合に比べてさらに冷ややかだったのだろうが、そこはいい。

その考えにたどり着くまでの間に〝ネロ・クラウディウスが女だったなんて〟という驚きが皆に見られたので、『〝俺（転生者）〟から見れば型月世界では女なのが通常である存在がいたとしても、〝真幌（この世界の住人）〟から見れば普通ではないのだ』という可能性についても、今ようやく理解することができた。

そうした、ある意味では実りの多い訪問だったが、ゴルドがこちらに絡んでくる可能性が捨てきれないので、帰宅することにしたのだが、そのタイミングでダーニックがこちらに話しかけてきたのだ。

「そういえばだ、坂月真幌。君はどうしてサーヴァントの真名を隠していたんだい？　これから共に戦う予定だったのだから別に教えてくれても良かったのではないか？　例えば、私がランサーの真名を教えていたなら教えない選択肢もそこまでおかしなことではないが……」

「ええ、聞いてないですよ」

ダーニックの言葉を引き継ぐ。

その言葉に理解が及んだ魔術師から目を細めてこちらを見てくる。

この言葉はつまり、俺は一目見ただけでサーヴァント（黒のランサー）の真名に気がついたということなのだから。

どうして気がついたのかを確かめない限りは、自分たちのサーヴァントの真名を暴かれるかもしれないという不安もあって安心できな

いのだろう。
特にゴルドに関しては当人が真名を隠したがっているために、その視線に乗った鋭さと焦りが他の面々に比べて大きい。
「では、なぜ？」
「いや、だって……」
ルーマニアで聖杯戦争を行うのにヴラド三世を呼ばないはずがないのでは。
原作知識以外では、ダーニックが手にした触媒などの情報を一切持っていなかった、そんな俺にこの場で彼らに説明できる理由などこれぐらいしかありはしない。
ただ、今の俺が用意できる理由としては納得されるものだったのか、他の面々は〝地元で大英雄とされる人物を呼ぶ〟という行為の合理性を認めたのか、なるほどというような様子を見せてくれた。
「ヴラド三世を呼ぶ可能性は十分にあるのだから、もしもヴラド三世を呼んでいた場合にこちらが召喚したのがネロ・クラウディウスだなんて最初から聞いていたら、もしかしたら殺しにかかってきたかもしれないじゃないですか。……そうじゃなくても、大聖杯の存在すら定かではないあの状況下だったら『聖杯大戦』なんて信じられるようなものではないですし」
「ふむ、それもそうか……」
どこか面白そうにこちらを見ているダーニック。
「ならば、君はセイバーの真名はどう考える？　そこに至った考えも合わせて説明してくれるとありがたいな」
「ダーニック!?」
悲鳴のような声のゴルド。
真名がバレると思っているのか、それとも思ってはいないが万が一という可能性があるからか、その答えは俺にはわからない。
わかるのは、ゴルドの悲鳴のような声にもダーニックは頓着していないという事実だけ。
こちらに対してさあ、と促すような顔だ。
俺の魔術師（マスター）として以外の部分についての評価をしようとする顔な

のだ。
「……」
これは答えないと返してもらえないな、と理解してしまう。
そうなると、まずは俺が持っていておかしくはない情報をまとめないといけない。
その一、まず召喚したサーヴァントはセイバーとしての適正がある。
その二、このセイバーには致命的な弱点がある。
ここからどうにかしてセイバーの真名を組み立てるところまで行かないといけない。
ビーストが〝ネロ・クラウディウス〟と名乗ってしまったために、戦闘の逸話のない彼女を召喚したことできっと彼の中では俺の価値が下がっている。
役に立つ駒であるということを見せないと、無茶振りをされるかもしれない。
最大はジークフリートに真名を確定させること、最低でもジークフリートを候補の中でも上位に示すことが望まれる、といったところだろうか。
「……まず、セイバーのサーヴァントにゴルドさんは『致命的な弱点がある』って言った。ってことは、彼の逸話にはこのセイバーには明確な死因がある」
この場合の死因は戦場で死んだ、みたいな程度のものではなく、明確に神話の中で名前付きの存在によって殺された、ということ。
ヘラクレスがヒュドラの毒によって死んだように、アーサー王がモードレッドに殺されたように、そうした死因は英霊にとっては大きなものである。
その英霊を構成するのは、死ぬところまでを含めてのことなのだから当然と言えるのだが。
だが、同時にこれだけでは〝致命的な〟弱点とは言えない。
確かにアーサー王はモードレッドに殺されたが、それだけならモードレッドが召喚されない限りは弱点を突かれることはないからだ。

「それで、〝致命的〟とまでいうからには〝弱点を知っている人物であれば誰でもその弱点を狙える〟ってことだと思う。ヘラクレスを召喚していたとしても、ヒュドラの毒を用意できる魔術師なんて限られるから、そういう意味ではそこまで致命的じゃないですから」
ゴルドは戦々恐々としている。
真名に確かに近づいているからだろう。
「そういう弱点ってなると、俺の知る限りだと背中だけ不死身じゃないジークフリートとか、踵だけ不死身じゃないアキレウスとか、あとは神霊だから召喚できないけどヤドリギ以外だと殺せないバルドルとか、そのあたりかな」
「そして、その中で考えられるセイバーとしての逸話となるとジークフリート、か。……ということは君の考えではセイバーはジークフリートだと？」
「今ある情報で考えられる限りだと、って話にはなりますけどね。実はゴルドさんが考えている〝致命的な弱点〟っていうのがそこまで致命的ではないけれど彼の逸話の中には確かに存在する弱点だからってだけの可能性もありますから」
「……なるほど、そういう考え方か。参考になりそうだな、ありがとう」
この考え方については何も言われない。
俺の考え方について彼がどのような評価を下したのかはわからない。
ただ、これ以上の問いかけをするつもりはないらしい。
もう下がっていいという言葉もあって、俺とビーストは帰らせてもらうことにする。
ビーストが黙っていたという事実に多少の不安を覚えながら、さすがにこれで不安を抱くのはおかしいのではないかと彼女を信じようとしてしまっている部分を握り潰す。
昼間にビーストの人間味のある部分を見たせいで少し彼女に寄り添おうとしているのかもしれない。
このままだと彼女にズルズルと引きずられるかもしれないので、

ちゃんと彼女の見方を人間に対してから根源の姫に対してのものに変えないといけない。

「ダーニック、あの者のことをどう思う」
真幌がセイバーがジークフリートだという意見を出した後、彼はそこまで気にしていなかったが周囲の空気が確かに変わっていた。
例えばセイバーが彼という個人を捉え、驚愕を乗せた視線を向けていたり。
例えばゴルドは彼を見下していたのだが、わけのわからないものを見るかのような目を向けていたり。
他の面々はそれらの視線でセイバーの真名はあれであっていたんだな、と納得していたり。
そんな中で、黒のランサーことヴラド三世は自分のマスターであり、自分の臣下であるダーニック（ヴラド三世）に向けて問う。
求められているのは自分の意見、そのことを理解したダーニックは思った通りのことを口にする。
「理屈としてはそこまでおかしな考え方ではないのでしょうが……こうまで明確に当てられるとどこか薄ら寒いものを感じてしまいますね」
「ふむ……貴様もか」
まだたった二人でしかない。
十四騎いる中の二人だ。
しかも、ヴラド三世に関しては情報は行われる土地とクラスしかない。
彼にとっては確信を持てないレベルだったのかもしれないが、それでも候補としてあげられてしまったということがダーニックとヴラド三世からの彼らに対しての注目度を上げることになった。
「そもそも、坂月真幌とはどのような魔術師なのだ？」
すでにこの王の間に残っているのはダーニックと黒のランサーの主従のみ。

だからこそ、ある種この城における主人である二人にしかできない会話を行なっている。
彼が裏切るとは考えていない。
ユグドミレニアの魔術師として参加した以上、彼には魔術協会に戻ることなど許されるはずもないのだから。
だが、それはそれとして彼の実力を含めた諸々のことを疑っていることは事実だった。
「時計塔に侵入しているユグドミレニアの魔術師たちに調べさせた程度でよろしければ」
「ああ、それでいい」
でしたら、とダーニックが口にする。
彼自身は特別優秀なところを見せる魔術師ではなかったのだが、現代魔術科（ノーリッジ）の魔術師であるために結構な期待はあったらしい。
何せ〝あの〟在学生ですら『位階』持ちが複数いて、ＯＢともなれば全員が十年以内に『典位』以上を取得していると言うロード・エルメロイＩＩ世の教室なのだから。
とは言っても彼以上の魔術師など無数に存在していて、彼に対して期待をかけているのはその家系という考慮材料を知っている人たちぐらい。
そのため、知る人ぞ知ると言った類の期待ではあったが。
「彼の家系は坂月……昔は朔月と言ったそうです」
鏡は反射してその姿を映す。
そこに本心を反映させる、というのだろうか。
願いを映し出し、それを取り出す。
小規模な聖杯とも言える機能を昔は持っていたようだが、今ではそのレベルのことはできず、せいぜいが鏡による反射の魔術を行う程度が限度らしい。
あるいは、どこかの世界では今もまだ聖杯としての機能……家系内部では神稚児と呼ばれた力を持っていたのかもしれないが、この世界ではそんなものは残っていない。
「……いや、待て。もしかしてそういうことなのか？」

「どうした、ダーニック」
「いえ、あの男はもしや『鏡の魔術によって領王を映す』ことによって真名などを取得したのではないかと思いまして」
「ふむ……」
それが事実なのかどうかはわからないし、そもそも魔術師に己の成果(魔術)を教えろなどと言っても教えるわけがない。
その程度のことは黒のランサーも理解している。
役に立つのであればそれでいい、敵側に利するならばそれはそれで処理する名目になるだけのこと。
キリスト教……彼が信奉する神を弾劾したというローマ皇帝を相手にしながらも状況を理解して雇用することを決めた黒のランサーがそう告げればダーニックは平伏する。
「了解しました、領王(ロード)。……まずは、あの男に対する監視の目を強めることにします」
一日程度泊まっていったところで問題など何もないだろうにもかかわらず、なぜか真幌は早急に帰ろうとした。
もしかしたら時計塔とはまた別の、どこかの魔術協会とつながっている可能性だってある。
そういったところに情報を流すそぶりが見えたなら、あるいは誰かと連絡を取っているところが見受けられたならば、如何に速く、如何に情報を引き出してから殺すのかが重要となる。
情報の流出も防がねばならないために、これまでよりもホムンクルスや使い魔による監視の目を強めなければならないな、とダーニックは思考していた。
彼に与えた邸宅はすでに黒のランサーの手(スキル)によって彼の領地と化した状態の土地。
そのことは彼に教えていないために、もしも情報の流出が見られるようであれば彼らに対して黒のランサーの宝具たる『極刑王(カズィクル・ベイ)』による不意打ちができる。
黒のランサー自身もそのことは理解しているために、監視の目を強めるだけの行為で許していた。

第六話

ゴルドの召喚から時は過ぎ、他の面々も召喚を終えていた。
フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアはケイローン。
カウレス・フォルヴェッジ・ユグドミレニアはフランケンシュタイン。
セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアはアストルフォ。
そしてダーニックがすでに召喚をしていたヴラド三世と、そして本領を発揮させるのに時間がかかると踏んでこれまた先に召喚されていたロシェ・フレイン・ユグドミレニアのサーヴァントであるアヴィケブロン。
ここにゴルドの召喚したジークフリートと、俺の召喚したマザーハーロットが加わって黒の陣営は完成した。
この陣営が完成するまでにかけられた時間は、最初となるヴラド三世が召喚されてから三ヶ月。
そして、ヴラド三世が召喚されたのが本来よりも早いユグドミレニア離反前だということも考慮すれば、この陣営が揃ったのは俺の知る大筋と比べても同じ時期であり、それはつまり赤の陣営もおそらくは揃っているだろう、ということまでは予想がつく。
そして今朝、飛ばしていた使い魔がシギショアラにて獅子劫界離の姿を発見した。
これから一晩かけて彼はトゥリファスにまでやって来るはず。
そうなれば正しく聖杯大戦の幕が上がるのだが。
「やっぱり愛歌の作った飯はうまいなぁ……」
「ふふ、ありがとう。……でも、そういうならちゃんと味わって食べてちょうだい」
今ここから準備できるようなことなど特に何もないために、できる限りこれまで通りの生活をすることにした。
どことなく空虚な笑みを浮かべるビーストの作った朝食を食べながら使い魔で獅子劫が入った地下墓地を見張っていたら、スマホを食事の時まで手放せない学生に対してスマホを手放すようにいうよう

にして、ビーストに強制的に使い魔とのリンクを切られる。
サーヴァントとは違って、この使い魔は自力で用意した存在なので強制的にリンクを切られるとこちら側にもフィードバックはあるはずなのだが、愛歌の卓越した技巧によって一切の痛みなどはなかった。
無駄に洗練された無駄のない無駄な行為によって獅子劫の監視は邪魔されてしまうようなので、これ以上の監視は無駄と判断。
というか一回遮られたのだからこれ以上やっては『言うことを聞けないのか』ということでビーストを怒らせるかもしれない。
「ええ、それでいいのよ」
どこか慈しむような瞳を、けれど人間に対してのものではなく犬猫に向けるものと同色の、相手を対等と見做さない視線を向けてきている。
彼女がどう言う存在なのかを分かっているからその視線にも納得が先行するが、きっと他の人間だったなら耐えきれずに怒鳴り散らしたりしていたのではないだろうか。
かく言う俺もその視線に耐えられるわけではなく、テーブルで向かい合うように座るビーストから視線を逸らして彼女の作った日本食に視線を移す。
ただまあ、こっちの料理に関しても普通の魔術師がこの料理を作るためにされたことを聞けば泡を吹いて倒れるだろう。
何せ、醤油などの調味料はこのためだけに転移魔術を使って日本に買いに行っているのだから。
「……量はまだ現実的だな」
こっそりと呟く。
並べられている料理の量はビーストが食べる分も含めて二人分。
フラグメンツで恋をした相手（アーサー）に一人（王）で食べきれるような量ではない大量の料理を用意していたことを考えれば、おそらく俺が彼女の望む通りになった時に『理想の王子様ができたことの嬉しさ』で大量の料理を作るものと思われる。
そうなっていない（彼女の理想に染められていない）ことを喜べばいいのか、それとも悲しめばいいの

か。
……この考え方は危うい。
どう考えても喜ぶべきことだ。
見捨(殺)てられ(され)るかもしれないという恐怖はあるが、ならば彼女の理想に染まると言うのも今の自分の考え方が消えてしまい、〝俺〟と言う人格が消えてしまう可能性だってある。
〝真幌〟の人格を塗りつぶした俺が何を言っているのかと言われてしまうかもしれないが。
「ごちそうさま」
そんなことを考えながら食べ終えて、席を立てば、家の前に何者かがいることが結界が伝えてくれる。
多分、ビーストはもっと早く気がついていたのだと思う。
彼女には『千里眼』がスキルとして備わっている。
それはマザーハーロットではなく〝根源接続者〟沙条愛歌を大元にしたスキル。
なので通常の千里眼とは違って〝視力の良さ〟、〝遠方の標的の捕捉〟、〝動体視力の向上〟に対しての補正はほとんどない。
代わりに高位の千里眼の所持者が持つ『未来(時)、過去(間)、現在(軸)の観測』に関してはおそらく、冠位魔術師(グランドキャスター)の資格者が持つ千里眼と同等か、あるいはそれ以上。
〝ちょうど飯が終わるのと同時にやってくる〟なんて、どう考えても可能性は低い。
毎日監視されているのだが、ビーストがそれを――特にロード・エルメロイⅡ世との連絡については綿密に――誤魔化していることに加えて、朝食が終わるタイミングはまちまちなのだ。
ぴったりと合わせることができてすごい偶然ですね、なんて言えるはずがない。
「愛歌。外にいるのはホムンクルス、なのか？」
「ええ、多分ユグドミレニアのでしょうね。……こんな朝から来るなんて常識がないんじゃないかしら？」
俺にはこの工房に仕掛けられた防衛用の魔術の解除することはで

きない。
この工房には俺の手は一切加わっておらず、用意された魔術一つ取っても俺には決して手の届かない高みに属するものなのだから。
だから愛歌が入れようと思うか、俺自身がそれに気がついて愛歌に頼み彼女がそれを受け入れるかしない限りは家の前の魔術師は入れない。
ちょっと怒っているかのような彼女の言葉だが、ホムンクルスを相手に何を言っても仕方がないということは分かっているのかそのホムンクルスを招き入れる。
はずだったのだが。
「そうね、ちょっと問題よ」
私が使っていた魔術はなんでしょう。
ビーストの問題。
俺が使い魔を使用したことで今のホムンクルスが陥っている状況を確認してしまったために、本来ならそのまま入れるはずだったホムンクルスは入れない。
すまない……本当にすまない。
そんなどこかの世界のジークフリートのようなことを思いながら、敷地に入ってから玄関にたどり着くまでの間をうろちょろしているホムンクルスをじっと見る。
「……置換魔術（フラッシュ・エア）？」
「正解」
その言葉とともに魔術が解除される。
この使い方は『Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ』でエインズワース家が使っているのを見たことがあるから思いついたが、多分知っている〝俺〟じゃなかったら、〝真幌〟だったなら〝等価交換が成り立っていない〟と発狂していたかもしれない。
敷地に入ったと同時にそこと玄関を空間置換でつなぐことで永遠に中には入れないようにする。
愛歌がしたのはつまりそういうことで、こうして知識を持った状態で現実で見せられると俺も発狂したくなる。

発狂しないでいられるのはもう心の中の合言葉に〝沙条愛歌なら仕方ない〟を設定しているから。
そんなことを考えていると知っているのか知らないのか、その答えは俺にはわからないのだが、少なくともどちらであってもおかしくはないと思えるビーストはホムンクルスを迎えに行っている。
数分後彼女が連れてきたホムンクルスは、もともとが戦闘用なのかそこまでの疲れを見せずにダーニックからの伝言を告げた。
〝今晩、赤のセイバーのマスターとの戦闘を行うため、ミレニア城塞にまで来られよ〟

その日の夜、ミレニア城塞の王の間に七人のマスターと彼らに従うサーヴァントが揃っていた。
……いや、嘘だ。俺とビーストだけはその通常に当てはまらないし、そもそもビーストに至ってはこの場に来てすらいない。
ビーストはランサーからの命令ということで戦場の方に向かっているためにこの場にいないのだ。
というわけでここに集まることができる人員は全員揃った黒の陣営は、全員がとある映像に視線を向けている。
キャスターは用意した七枝の燭台（メノラー）に灯った炎の光を通じて、赤の陣営が誇る最優のサーヴァント、セイバーのクラスで召喚された英霊との戦いを見通している。
俺たちが見ているのは彼が覗いているものと全く同じ。
ただし、炎を通して見るのではなく映画館のスクリーンのように、ミレニア城塞の壁に投影されたものではあったのだが。
映像の中では小柄な騎士による黒のキャスター（アヴィケブロン）の作り出した無数のゴーレムに対する蹂躙劇が繰り広げられている。
黒のキャスターが生み出したゴーレムはまさしく一級品。
現代の魔術師では決してたどり着けない高みに存在する、まさしく超一流のゴーレムの造り手が生み出したあれらは、低ランクのサーヴァントであれば互角に戦えるだけの実力を宿している。

それを一合、最大でも三合で斬り伏せたセイバーはまさしく最優のクラスにふさわしい実力者だということがわかる。
「さすがセイバー、と言うべきかな」
映像越しでもわかる赤のセイバーの圧倒的な闘志に気圧されていた俺を含めたダーニック以外のマスターは黒の陣営の領王たるヴラド三世（ランサー）の言葉でようやく我を取り戻した。
最後のゴーレムが粉砕された頃に言葉にされたそれは、すでに戦場にユグドミレニアが送り込んだ兵士たち（ホムンクルス）も敵のマスターたる獅子劫界離によって殲滅された状況であるがゆえに、マスター運にも恵まれているとも取れるような言葉ではあったのだが、その事実はわからない。
「筋力Ｂ＋　耐久Ａ　敏捷Ｂ　魔力Ｂ　幸運Ｄ」
ダーニックが言葉にしたのは赤のセイバーのステータス。
それに加えて読み取れる限りでは対魔力と騎乗はＢランク。
ただでさえ高位のステータスに加えて、＋補正がついた筋力など珍しいと言う他ない。
瞬間的にそのステータスを倍にするのが＋補正、つまりあのセイバーは瞬間的にＡランクを超えた筋力を発揮できると言うこと。
と言うのが黒の陣営の総意だろうか。
ステータスだけでは勝負は決まらないことは原典（stay night）から明らかなので、俺の中ではそこまで大きなことではないのだが。
「幸運を除いてＣ（平均）以下が存在しないとは、まさに剣の英霊にふさわしいステータスでしょう」
臣下としての立ち位置を崩さないダーニック。
ステータスを読み取ることができるのはマスターだけなので、ヴラド三世は彼の報告を信じる他ない。
「ほう」
感心したように声を漏らしたランサーに、ダーニックからの報告はさらに続けられる。
「さらに注目すべきは、一部ステータスを隠蔽している節があることです」

理解できたのはクラス別スキルとステータスのみ。
固有スキルか、それとも宝具によるものかはともかくとしてマスターの透視能力を阻害する隠蔽スキルがあるということになる。
かくいう俺も阻害はされているのだが、最初から赤のセイバーはモードレッドと知っているためにそこまで驚きはない。
驚いたところは隠蔽スキルの効果はこういった形で現れるのか、という体験に対してのものだけだ。
セイバーの使っていた固有スキルと思わしき能力や、手にしていた剣の意匠を想起することが阻害されている。
『自分の素性を隠す』という伝説によるものだとあたりをつけたランサーは頷き、自陣のセイバーに対して視線を向ける。
「セイバーよ、君は彼に勝てるかね？」
無論だ、と視線を返したセイバーは力強く頷く。
召喚された彼は〝致命的な弱点（真名）〟が漏れることを恐れたゴルドによって会話をすることを禁じられている。
王の御前にあってもなお主人の言いつけを守る姿は、裏切りと欺瞞を嫌うランサーにとっては好ましいのだろう。
笑みすら浮かべてランサーはアーチャー（ケイローン）へと視線を向けた。
「大賢者よ、君はどう考える？」
「難敵であることには違いないでしょう。ですが、あとは宝具の性質さえ判明すればさほど問題はないかと思われます」
「ふむ……では、宝具の性質を暴くためにも一手加えてみるのもいいか」
敵に解析させないためにゴーレムは破壊されたあとは自動的に焼滅するように設定されている。
映像の中ではそのことを知らない敵マスターたる獅子劫界離がゴーレムに使われた素材に触れて、その熱に思わず手を離している姿が見えた。
今回は敵の中でも注意を払うべきセイバーの実力の一端が垣間見えた、というだけでも十分な戦果だったと言えるだろう。
だが、ランサーは何を思ったのか。

「アサシンをぶつけてみようか」
そんな言葉を口にするのだった。

第七話

『悪い、頼んだ愛歌』

『いいえ、問題なんてないわ』

真幌はその言葉を念話を通じてビーストに告げる。

結局、あの言葉が撤回されることはなく、ビーストがそれを良しとしたことで彼女は戦いに参戦することになった。

ビーストがあの場にいたのは、彼女がキャスター適性を持ったアサシンだと宣言していたため。

獅子劫界離を暗殺できるようであれば暗殺しろ、ということ。

暗殺者（アサシン）のクラスの本領を発揮できるようであれば発揮しろというそれは、セイバーがいるために不可能と思われる行動なのだが、ヴラド三世からすれば敵対者（ローマ皇帝）を合法的に処理できる可能性があったからなのではないか、という疑念も実は真幌からすればあったりする。

ただ、この戦いにおいてビーストの本領を発揮させられない、というわけではない。

あの空間を一時的にビーストの陣地にしたという形で誤魔化しているために、彼女の本領を発揮させることができる。

黄金劇場を作ったからキャスターの陣地作成に引っかかったというわけではなく、シモン・マグスという宮廷魔術師から魔術についても習っているという形で、彼女は根源接続者として、彼女の知る限りの魔術を使用することも許されてしまっている。

「まあ、まずは有用だということを示さないと面倒だものね」

彼女の思考は『理想の王子様を作る』という形で固定されている／本当に？

だが、まずは聖杯大戦に勝利しないことには最大でも十三騎のサーヴァントに狙われる。

それはいくら根源接続者といえど面倒なのだ／自分を裏切（殺す）る理想の王子様が欲しいの？

だから、聖杯大戦が終わるまでは本腰を入れての王子様作成はお預けなのだ。

王子様を作らないで済むことにホッとしたことなんて、ない。
「余計な考えね」
削除、削除と呟いたビーストはその考えを頭の中から消して、宝具たる黄金の杯を取り出した。
現在のビーストはセイバーたちがいた建物と彼らの本拠地たる地下墓地の中間地点とでもいうべきところにまで転移している。
無論、この光景が天草四郎時貞（ルーラー）に監視されている可能性も考えて隠蔽魔術はすでに行われている。
根源接続者が行なった隠蔽ゆえに、よほどのことがない限りはルーラーが相手であっても彼女のマザーハーロットという真名を知ることはできない。
「それにしても、こういうのって普通はキャスターと連携して行うものじゃないのかしら」
キャスターのゴーレムで撹乱している間に大規模な魔術の詠唱を終わらせてマスターを消し飛ばす。
さすがに大規模な魔術が使えるとは知らないだろうから仕方のないこととはいえ、セイバーがゴーレムを相手にしている間だったのだから、セイバーが自由に動ける今に比べれば格段に可能性が上がっただろう。
それこそ、ゴーレムがセイバーとそのマスターとの間に壁を作れば、一合で吹き飛ばされるとはいえその一合の時間だけで十分に暗殺できたはずだ。
暗殺のスペシャリストであるアサシンのクラス（ということにしている彼女）が不可能だと判断したのにもかかわらず、それでもなお暗殺を強行しようとするのは一体何故なのか。
「あの吸血鬼（ヴァンパイア）はよっぽど私に死んで欲しいのね」
失敗して死ねばそれはそれで良し。
それに、基礎スペックの低いアサシンとはいえサーヴァント。
決められた行動しかできないゴーレムと戦った時に比べて、こちらにも意思があるために相手の能力を引き出せるだろう。
そうなればこれからの戦いに有利になる、と踏んだ、というのが

ビーストの考え方。
成功すれば敵の中でも最も注力しないといけないセイバーが消滅するので良し。
どう転んでも黒の陣営には良き結果しかもたらさない。
ただ、ビーストにとってこの戦い、少々面倒なところがある。
赤のセイバーは未来で重要な立ち位置になる存在なのだ。
殺してしまうわけにはいかない。
なので、殺さずに済む程度の、けれど黒の陣営に彼女の力を見せつけられるような程度の力を出さなければならない。
そのため、彼女が選んだのは沙条愛歌（ビースト）がかつて行ったこと。
「さあ、踊ってちょうだい」
ビーストの持つ黄金の杯から溢れる無色の魔力が赤く、紅く、朱く、赫く染まっていく。
葡萄酒のような液体が粘性のある泥へと変貌し、形を成していく。
その禍々しさすら感じさせる泥は正当な存在であればきっと吐き気を催すだろう歪さと醜悪さを併せ持ち、とある人型をかたどった。
「いい？　あの赤のセイバーを殺すのよ」
作られた人型は一つだけ。
深紅の弓を持った、泥で象られた肉体ながらも元になった人物はきっと高名な存在だったのだろうと思わせる男性。
それがビーストの言葉に頷いて飛び出した。

赤のセイバー（モード・レッド）がそのことに気がつくことができたのは、彼女が持つスキル『直感』が働いたから以外にはなかった。
殺気はない、気配もない、その状況下で気がついた理由は彼女にも説明することができないもので、もうそれ以外に理由はないだろうというだけのこと。
「マスター！」
「ぐえっ」
セイバーが叫び、己のマスターである獅子劫にタックルしながら彼

を抱きかかえて、『魔力放出』すらも加えて一息に飛び退いた。
それに伴ってセイバーが踏み込んだ場所の石が砕け散ったのだが、次の瞬間にはそれすらも気にならなくなった。
「ゴホッ、ガハッ……お前なぁ、いきなりは……」
セイバーが疾走していた時間は数十秒。
通常ならば長いとまでは言うことができないような時間でありながらも英霊同士の戦いにおいては異常に長い。
あまりにも突然な、しかも『魔力放出』による加速まで加えてのタックルに息が詰まり咳き込みながらも苦言を呈そうとした獅子劫だが、路地裏に入ったことで疾走を停止したセイバーに抱えられた状態のまま、セイバーが駆けてきた道が視界に入ったために状況を理解して言葉をつぐむ。
おそらくは地下墓地（カタコンベ）の方から飛んできたであろう矢は石造りの地面を削り取り、まるで巨大な蛇がのたうち回ったかのような跡をその場に残している。
「アーチャーかっ!?」
「ああ、狙撃だろうよ」
その矢の威力など見ればわかる。
セイバーが気づかなければ、セイバーが全力疾走を行わなければ、獅子劫界離は間違いなく死んでいた。
思わず叫んだ獅子劫に、どこか冷静なままのセイバーが返す。
「コソコソとまあ、やってくれるじゃねえかアーチャーよぉっ！」
いいや違った。
冷静だなんて口が裂けても言えなかった。
己の主人（マスター）に対しての狙撃、その有用性は認めるが、彼のサーヴァントたる自分を出し抜いて主人を殺せると狙ったことに対しての怒りが大きすぎて、一周回って冷静に見えていただけのことだった。
実際、今の彼女の周囲にはパチパチと赤雷が渦巻いている。
漏れ出した魔力が形を成しているという事実が、今のセイバーの怒りを示していた。
「ちっ！」

だがそれでも、マスターを守らないといけないということだけは忘れていない。
今度は壁を貫いて迫ってきた鏃をセイバーの一刀が叩き落とす。
――重たい。
並の宝具程度の破壊力はあるのではないかと魔力で構成された矢を切り落としたセイバーは考える。
実際にどれほどの力が込められているのか明確にわかるわけではない。
それでも『直感』がこれはただの矢だと判断していて、そして同時に、あの破壊はこの矢に魔術的な効果が付与されていたわけではなく純粋な威力によってなされたものなのだと理解もした。
「ああ、くそっ！　透視の魔眼か何かか!?」
「それよか『千里眼』だろ！」
魔術師なためにどちらかと言えば魔術的なものに思考が及ぶ獅子劫と、サーヴァントとして呼び出されたために持った知識から、『固有スキル』の枠組みに入りながらも汎用スキルと呼んでも問題ない程度には幾人ものサーヴァントが持つスキルを上げるセイバー。
正解は後者。
ビーストの持つ聖杯から呼び出されたアーチャーは、知性は残らず、スペックも劣化しているが、それでも一級のサーヴァント。
その真名はアーラシュ・カマンガーと言い、彼は未来予知に等しい『千里眼』を備えている。
それも、ビーストの持つものとは違って本当の意味での『千里眼』をAランクで。
「面倒だなぁ、おいっ！」
この状況下に対応するための手段を獅子劫は持たない。
彼がしばらくの間耐えられるのであればセイバーが打って出ることも選択肢の中に入ったのだが、そうでない以上はどうにかして範囲外から逃げ切るしかない。
路地裏から路地裏に、できる限り相手に姿を見せないように走って走って走り続けて、それでようやく矢が飛んでこない路地裏にまでき

たのだが、獅子劫とセイバーの両名はどちらも未だに気を抜いていない。
「ってても、これだけ派手にやってんだからそろそろ誰かが外に出てきてもおかしくはないはずなんだが……」
そんな気配などない。
地面を削るようにして突き刺さる鏃の数々が爆音を生み出しているにもかかわらず、誰一人として起きているような気配を感じない。
何人も起きてくるようなことになれば、さすがに隠蔽することが難しくなってそこでこの戦闘を終了することができるのだが。
「誰も起きてこねえな」
「それだけしっかりとした隠蔽工作をしてるってことだろ」
市街地戦のために外に出てこないといけないことまで考慮して隠蔽用の魔術を使用している。
このトゥリファスそのものが黒の陣営のテリトリーなのだから当然と言えるのだが。
「ってことはだ」
「ああ、多分狙ってやがる。今の状態も、多分相手が見つけられない場所にいるからだ。オレたちがここから出たら一気に矢の雨が降ってくるぜ」
先ほどまでの連射を思い出せば、見つけているのであれば射撃をしない理由がない。
もしかしたら建物の陰にいることは把握していて、それでも二人が矢の雨で外に出てこない間に仲間を呼んでいるだけのことかもしれない。
タイムリミットはそう遠くはない。（アーチャーが見つけるまで）
「で、どうすんだよマスター。なんか策でもあるのか？」
彼らの作戦会議を待つ必要など黒の陣営にはない。
それどころか、彼らに打つ手を与えずに倒してしまうことが最良である。
よってアーチャーが狙いやすいようにゴーレムによってビーストに獅子劫とセイバーがどこにいるのかの情報が与えられ、その情報を

ビースト経由で受け取ったアーチャーがさらなる矢を連射する。
「ちっ！　少しは休ませろってんだ！」
アーチャーの再度の矢による雨をもう一度マスターを担いで走り出す。
もはや獅子劫では言葉を発することすら難しい状況ではあるが、魔術師としての基本技能、使い魔（サーヴァント）に対する念話によって彼女の質問の答えとした。
――おい、セイバー。この状況をなんとかする策はあるかって言ったな？
――ああ、言ったぞっ！　つうか少しは集中させろ！　こいつ、トリスタンクラスの弓の名手だ！
――おいおい、マジかよ。円卓一の弓の名手と同等だと？　まあいい。策ならある。
――マジか!?　だったらとっととやってくれ！
――よしよし。いいか、その作戦っていうのはだな。
聖杯戦争、及び聖杯大戦はサーヴァントの実力だけで勝ち抜けるものでは断じてない。
その実力差があまりにも大きければ話は別なのだろうが、基本的にはマスターの実力も重要なものだ。
とはいえ、額面通りの実力がどれだけ高かろうとそれはサーヴァントに比するレベルのものではなく。
ならば軍略かと言われればやはり一騎当千の英雄たちに比べて研究者気質の魔術師たちが及ぶはずもない。
必要なのは魔術師としての、ではなくマスターとしての実力。
マスターとは、サーヴァントを召喚した、聖杯によって選ばれた魔術師の呼称である。
ならばもちろん、彼らの実力とはたった三度だけ許された令呪と呼ばれる奇跡の運用法。
どのタイミングで、どのような命令で使用するのか。
その答えとして、確実に高得点を得られるのだろう使い方が今この場で行われていた。

「セイバー！　距離を詰めろ！」
赤く光った令呪が一画、消滅する。
使い方は、サーヴァントの動きをブーストするもの。
お互いの間で〝アーチャーを倒す〟という思考が一致していたために、それはセイバーの動きを補助した。
令呪の効果が発揮されるよりも先に獅子劫がセイバーによって投げられて、彼は少し離れたところに背中を打ち付ける形で矢の雨の範囲外から逃れた。
「っ！　……ごほっ……セイバー！」
凄まじい勢いで叩きつけられ、その衝撃から立ち直るのに数秒かかった獅子劫が先ほどまでいたところに視線を向ければ、すでにその場にはセイバーの姿は存在しない。
令呪という規格外の魔力の塊は、それこそサーヴァントに強制的に自害させることすらも可能である。
ただそれは、相手の意思に沿わない命令に強制的に従わせるためのものであり、使い方としては間違っていないが相手次第では一画では足りないことだってあり得る。
だが、サーヴァントの意に沿う形で使用した場合、それは行動を補助するブースターとして機能し、限定的な形の用法を行えばそれこそ奇跡のような御技を行使することすらも可能とする。
例えば、移動の命令を始点と終点を繋げての空間跳躍、魔法に近い大魔術たる転移として行うことも。
「!?」
令呪の力によって距離をつめたセイバーはその場に立っていた存在に対して目を見開く。
普通の、ただし高位のアーチャーだと思っていた相手がサーヴァントですらない痛ましい何かだと気がついたために。
それが元々は英霊（サーヴァント）だったことにもすぐに気がついて、こんな形に行使した黒の陣営に対しての怒りも湧いて出た。
「これで終わりだッ！」
叫びとともに力強く両手で握った剣を一閃。

怒りの咆哮が『魔力放出』スキルを奮い立たせ、ただの『魔力放出』から赤雷へと変貌して『頑健』なはずのその肉体を両断した。

「ふんっ！」

どろり、と通常のサーヴァントとはまるで違う形で溶け落ちていくようにしてその姿を消していくアーチャーのサーヴァントらしき何か。

それが溶け落ちるよりも先に、さらに『魔力放出』で赤雷を纏った剣を叩きつけるようにして蒸発させる。

その一撃は、セイバーの怒りを示すような、暴虐と呼んでもいいような一撃だった。

第八話

「あら、アーチャーじゃダメだったかしら？　……まあ、今日はこれぐらいで問題ないわよね」

まるで負け惜しみのようなビーストの言葉だが、これは別に負け惜しみというわけではない。

何せ、あの汚泥で構成されたアーチャーには最初に作り出して以降、一度たりとて魔力を送り込んでいなかったのだから。

それでも相手がアーサー王の息子ということで思っていたよりも強く作ってしまったのだが、それについては別にあれがフルスペックというわけでもないので問題はない。

先ほどのアーチャーが動きを止めたのも、実際にはどこにいるのかわからなくなったからではなく、今日のところはこれぐらいで問題ないかと判断したビーストが止めただけのこと。

ただそれでも、ゴーレムから情報を送り込まれてしまったのだから仕方がない。

最大でサーヴァント十五騎を同時に相手に回すのは面倒という他ないのだから。

正直なことを言うのであれば、ビーストならば聖杯大戦なんて料理と同じようなものだ。

手順がわかりきっているから、簡単に終わらせることができる。

ただ、それでも今はサーヴァントとしての体をなしていること、そして聖杯大戦を通じて己のマスターに理想の王子様ならばどういった行動をとるのかを教えて、彼を王子様にするためにそのようなことを一切していないだけのことなのだ。

とはいえ、今の彼も今の彼でペット（犬猫）程度の価値はある。

彼女がどう言う存在なのかを知って、彼女の言うことには従いながらもそれでも自分の意思は捨てていない。

それこそ、今すぐにでも矯正して『理想の王子様』にしたいと思うことはなく、そこに至るまでの彼の意思を見て楽しむことができる程度には。

「ん？　これで終わりだからそのまま戻ってもいいって？」
念話が飛んできた。
彼女のマスター（ペット）からだ。
その命令に従うのもいいのだが、今日はもう一つだけ、彼にも伝えていないことをしようと思っているのだ。
そのためにも、ミレニア城塞に一度寄り道をする必要がある。
ただ同時に、それをしようと思うのならば彼女の（坂月真幌）マスターを一時的にとはいえ一人で夜道を歩かせることになる。
実際、今もすでに真幌は一人で歩いているようだ。
何かあれば真幌を『理想の王子様』にしたいのだろう彼女が助けに来ると信じているのか。
それは彼女の性質を知るならばあまりにも呑気と言わざるを得ないのだが。
なぜなら、彼女にとってまだ彼は『素体』、そしてペット以上の価値はないわけで、それこそ掃いて捨てるほどとまでは言わずとも壊れたら別の存在を探せばいい、と言う程度の存在。
だから、『王子様（アーサー）』のように何に代えても優先すべき存在ではないのだ。
例えば。
「ふふ、初めまして」
「……て」
彼女が別の世界で「綺麗」と称した、孤高なりし優しき竜のかつての姿と出会えるようなタイミングであれば。
彼女は少しの間だけ、彼を優先順位としては下げることがあるかもしれなかった。
助けてと言う言葉。
何にも染まっていない、原初の生存本能。
無垢なはずの彼がいずれあの竜に至るのだと思うとその光景を眺めてみたいと思ってしまう。
それが、マスターを放置して彼に会いに来た理由だった。
「死にたくない？　……なんて、答えられないわよね」

ホムンクルスの生命維持用の魔力供給槽から出て来たばかりの彼は、そもそもが魔力供給のためだけに存在していた。
そのため、五体が発達していないのだ。
ここまで歩くこともできず這って来るしかなかったように。
それだけで体力の全てを使い果たしてしまったように。
見つかれば死んでしまうと理解しながら、もう逃げられないながら、それでも彼の心には彼女の問いに対する答えが、純粋な『生きたい』と言う願いがあった。

「そういうわけで連れ帰って来たわ」
「あ、そう……」
ビーストがやったことに対しての説明を求めてきたダーニックたちには、『皇帝として暗殺者を雇ったこと』と、サーヴァントとして召喚されるにあたり彼女と同一視される存在の力を持ってきたことで、『暗殺者を生み出す』と『サーヴァントを召喚する』が複合される形で使えるのだ、と自分に暗示をかけて堂々と語ったことで納得させた。
英霊たちからの視線も合わせて地獄のような詰問となっていたその状況、正直納得なんてしてもらえるわけがないと思っていたのだが、サーヴァントを増やせるという特性を喜んだのかダーニックのとりなしもあってどうにか終わらせて帰ってきてみれば、ビーストがホムンクルスを一名家に連れ帰ってきていた。
近い未来、彼女が連れて来たことで潰えたその可能性ではジークと呼ばれていたのだろうホムンクルスを見て、そういえば『Ｆａｔｅ／Ｌａｂｙｒｉｎｔｈ』で出会っていたな、と思い出す。
これが――現在では名も無きホムンクルスのために仮称ジークとしておくが――未だジークフリートの心臓を得ていないために他のホムンクルスたちと同じ見た目をしているにもかかわらずジークだということに気がついた理由は二つ。
一つ目は、何よりも非人間である沙条愛歌（ビースト）が連れ帰って来たということ。

彼女からすれば普通のホムンクルスなど興味を抱く対象ではなく、しからばこのホムンクルスには彼女が興味を抱く理由があるのだ、ということだ。

二つ目は、彼をビーストが発見した時の状況が、原作における黒のライダー（アストルフォ）が彼を発見した時の状況と酷似していたから。

つまり、生きたいという生存本能に従って自らのゆりかごから脱出し、そのまま這ってでも進んだという証拠。

それができるホムンクルスがポンポンと生まれるはずもないのだ。

彼の立場は魔力供給用のホムンクルス。

セイバーのマスターたるゴルドが、彼の家の魔術である錬金術によって鋳造した人工生命体。

通常の聖杯戦争における制限、マスターからの魔力供給によって行動を起こすサーヴァントという存在であるがゆえに宝具の使用なども含めた諸々をマスターの魔力と相談する必要があるというもの。

だがユグドミレニアは、現界を除いた魔力を全てホムンクルスから供給することでその制限を取っ払った。

資金があればいくらでも生み出せるホムンクルスは魔力電池としては都合のいい存在と言わざるを得ない。

そんな彼が逃げ出したのは、キャスターの宝具の炉心として選定されたから。

キャスターの宝具は生きた魔術師を炉心とする必要があって、彼はそれに足る存在だったのだ。

だから今もきっと、ジークはミレニア城塞で探されているはずで。

「で、そのホムンクルスはどうするんだ？」

「そうね……」

それをここで匿うのならば、使い道を知りたいと思って尋ねる。

頤に指を当てて小首を傾げる姿を見るに、珍しく何も考えることなく連れ帰って来たらしい。

彼女ならばそれを発見した時点で使い道など無数に思いつくだろうに。

けれど使い道などの一切を考えずに連れて来た、ということは純粋

にかつて見た彼の心象(形)が綺麗だったから連れて来たのだろうか。
そんなことを考えて、まだ理解できる価値観があるかもしれないという事実にホッとした。
彼女がやっていることはともかく心は純粋な少女なのだから。
心まで完全な怪物ではないのなら、もしかしたらそこに俺が生き残るための道があるかもしれない。
ただ、俺がそんなことを考えているとは露知らず、ビーストは彼をどうするのかについて考えている。
「……ダーニックへの連絡はどうする？」
「そうね……まだ使い道は決めてないから保留にしておいて」
「了解っと」
それならそれでいい。
彼女が眠っているジークを影の中にずぶずぶと沈めていく姿を横目に、ダーニックからもらった資料に対して目を通す。
というのも、先程のビーストの汚泥英霊の召喚があったせいで縁召喚で彼女を呼んだと知られている俺も彼女と同じような精神性なのだと思われて忌避されているのだ。
さすがに同じ戦場においては仲間として戦ってくれるだろうが、彼らは英霊とはいえ人間、ともなれば嫌いな相手に対しては助力が遅れてしまうかもしれない。
特に理性が蒸発しているアストルフォなんかは。
もらった資料は時計塔に忍んでいるというユグドミレニアの血族が用意した赤のセイバー(モードレッド)のマスターについて。
獅子劫界離という人物について知っているとはいえ、この世界でも変わらないのかどうかは俺には判断できない。
しかしざっと流し読みをした程度では目に見えてわかる変化はない。
「獅子劫界離、死霊魔術師(ネクロマンサー)、この辺りに変化はないか」
ユグドミレニアの血族ということで、時計塔に忍び込んでいる魔術師たちはどうしても二流、あるいは一流程度でしかなく、時計塔の重鎮にはなれはしない。

よって上の方だけで話が完結しているのだろう聖杯大戦におけるマスターについての情報は、その魔術師のことをこちらで確認しない限りは手に入れ難いのだ。
それでも、獅子劫界離に関しては比較的簡単に手に入った。
何せ、どこからどう見ても時計塔の魔術師らしからぬ人物が堂々と時計塔を闊歩して講師の部屋に入っていったのだ。
生徒たちに若い者が多いことを考えれば、それはある意味噂になりやすい人物だったと言えるだろう。
その結果、結構な時間をかけて作られた資料には彼の基本的な情報が全て書かれていた。
魔術協会が送り込んできた刺客、フリーランスの魔術師であり賞金稼ぎ。
賞金稼ぎという彼の立場に死霊魔術師という魔術の特性を考えるにかなりの実力者。
何せ彼らが魔術のために大量に消費する死体を一番効率よく集めることができるのは戦場なのだ。
それがフリーランスの賞金稼ぎともなれば、魔術師としてだけではなく戦闘者としても確かな実力者だと判断することができる。
「っても、これがわかるのは俺が魔術師じゃないからだけど」
苦笑しながら、その場合の可能性について考える。
俺が魔術師のまま……というか前世の記憶に目覚めていなかった場合は、きっとダーニックとセレニケ以外のマスターのように侮蔑の視線で見ていたのではないだろうか。
まあ、そんな可能性はどう描いたところで現実になることはない。
事実として今ここにいる俺は彼がどういう存在なのかを知っているために、彼のことを危険視している。
彼自身の性格は気持ちのいいものなのだが、今の彼は別に味方というわけではないのだから。
そんなことを考えながら資料の確認を終えてビーストの方を見てみれば自らの影、先ほどジークを収納した影の中の空間に聖杯の泥を注ぎ込んでいる。

ジークと名付けられるはずだったホムンクルスの使い道を発見したのだろう。
彼女の考えることは基本的には俺の予想をはるかに超えるので……いいや違う。
ビーストの考える結末そのものはそこまで逸脱したものではないのだが、そこに至るまでの過程として彼女にできる行為の全てが選択肢として存在するために、俺たちの思考ではまるで理解できない行動を行なっているのだ。
「もう、何をやっているのかしら？」
「え、あ……なんかしたか俺？」
ビーストが少し頬を膨らませて、こちらを見ている。
それを可愛らしいと感じて、数瞬遅れて彼女の機嫌が悪いという事実に対しての恐怖を覚える。
数瞬もその事実に気がつくことに遅れるなんて、英霊（サーヴァント）であれば十回は自分を殺せる……って違う、そもそも俺がサーヴァントと戦うことなんてないんだからそんなことを気にする必要はない。
どうにかビーストから不機嫌な理由を聞き出して、そこを修正しないといけない。
「私の王子様なら、彼を死なせかねないこんな行動をしたら止めるに決まってるでしょ」
「ああ……なるほど……」
確かにアーサー王ならば止めるだろう。
彼女にはその理由はわかっていないのだろうが、それでもかつての聖杯戦争でアーサーから止められたことで無駄な犠牲を嫌っているということだけは知っている。
まあ、彼女自身その時は諌められただけなので実行はしていたのだが。
「わかった……次からは止めるようにする」
「ええ、それでいいのよ」
ビーストが頷いているのでどうやら選択肢は間違えなかったようだ。

今の彼女が最終的にアーサー王に殺された理由として思い描けているものは、俺に考えられる限りではその一点のみなので、もしかしたらこれ以上は『理想の王子様』とやらは全て彼女の思い描く形にしかならないのではなかろうか。
そんな不安がないとは言わないが、それは今の俺が考えてもどうしようもないこと。
未来のことは未来の俺に丸投げするとして、今はジークに対して何をしたのかを尋ねてみるとしよう。
「で、そのホムンクルスに何をしたのさ？」
「なんだと思う？」
さて、なんだろうか。
彼女が死にかけのホムンクルスに対して取る行動。
正直、何も思いつかない。
彼女の思考回路なんて、俺の頭で理解しきれるはずがない。
それでもきっと彼女はちゃんと答えることを望んでいるのだろうし考えて。
考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて。
「あ……」
そこで一つ、彼女がフラグメンツで行ったことを思い出した。
それは伊勢三という少年に対しての所業。
大昔の聖者様のような彼に対して、「３０分誰も恨まなかったら助けてあげる」というようなことを言っていた。
そして、ジークのことを綺麗と称して手を出さずに終えた彼女が、その綺麗になる前の彼に対して出会ったのなら。
「もしかして、そのホムンクルス相手に聖杯の中身を埋め込んで何か条件付きで彼の願いを叶えるとか言ったのか？」
自分が手を加えてもそんな綺麗な存在のままでいられるか、なんてことを考えて手を出してもおかしなことではないのかもしれない。
だって、もうどれだけ頑張っても彼がジークになる可能性は低い。
彼女ならそんな未来を持ってくることも可能かもしれないが、それでもそこまでやるほどの価値を見出しているのか。

少なくとも王子様を作りたいと思う心よりは下なのだと思うが……。

「残念、不正解よ。……でも、間違ってるとまでは言えないわね。答えは――――」

その答えは、驚くべき内容だった。

第九話

黒のアサシン（ビースト）が呼び出したアーチャーが赤のセイバーと戦った日からすでに数日が経っている。

そんなある日の晩のこと、俺たちにもミレニア城塞への召集がかかった。

これまでの数日間は相手方に動きはなく、ユグドミレニアも大聖杯があるのだからわざわざ打って出る必要性を感じることはなく、結果として戦闘は小康状態と呼べる状態に陥っていたのだが、その状況に一つの要素が加わったことによって彼らはどちらも打って出る必要性に駆られたのだ。

その要素の名前は、ルーラー。

裁定者のサーヴァント。

『聖杯戦争』という概念そのものを守るために動く絶対的な管理者。

部外者を巻き込むなど規約に反する者に注意を促し、場合によってはペナルティを与え、聖杯戦争そのものが成立しなくなる事態を防ぐための存在。

そのため現界するのにマスターを必要とせず、「中立の審判」として基本的にどの陣営に組する事もない。

それを赤の陣営は抹殺しようとして、黒の陣営は懐柔しようとしている。

赤の陣営はランサー、カルナ。

黒の陣営はセイバーとそのマスター、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア。

赤の陣営による暗殺は黒の陣営の介入により失敗し、黒の陣営による懐柔はそもそもルーラーとしての立ち位置から失敗した。

どちらも目的を達することはできなかったために、当然の帰結として次に行われるのはサーヴァント同士の戦い。

赤のランサーはその目的たるルーラーの殺害のために。

黒のセイバーは己のマスターの命によりこの場で赤のランサーを撃破するために。

その戦いに否を唱える理由など、ない。
そんな光景を、俺たちはミレニア城塞ではなくユグドミレニアが与えた家で見ていた。
名目上はアサシンがこのあいだのセイバー戦で使ったあれは時間をかければかけるほど完璧に近づけることができるとかなんとか、そんな適当なことを言った気がする。
だが実際の理由はそんなものではない。
その気になればあの汚泥英霊に関してはポンポン生み出すことができる。
なので、今回こちらで見ることにしたのは、こちらでないとダメな理由が……ジークと呼ばれるはずだった存在がここにいるから。
「で、どうだ？」
「……俺もあの戦いに加わるのか」
横にいるジーク……いいや、もうこの名前は正しくない。
今の彼はジークフリートの心臓を受け継いだことで生きながらえたホムンクルスではないのだから。
心臓の代わりにビーストから与えられた泥によって生きながらえ、そして同時に生存本能以外は薄弱だった彼の中に人間の悪性という情報が埋め込まれ、竜殺しの力ながらもジークフリートのものではない力を持ってこれより先の生で彼の障害となる存在を打ち破ることを許された。
彼の心臓に聖杯の魔力とともに埋め込まれたのは、とある滅びに向かう世界でエインズワースという置換魔術の使い手たる家が用意した魔術礼装、正式名称をサーヴァントカード、通称クラスカードと呼ばれるものだった。
それによって彼はジークフリートの心臓を受け継ぐことなくサーヴァントとしての力を振るうことができるのだが、今はそれはいい。
重要なのは、彼の力の源がジークフリートではなくなったことによって名前もジークではなくなったということだけ。
「シド、そんなこと言ってるけど見えてるんだろ？」
「それは、まあ……」

ビーストが壁をスクリーンとして映し出している、赤のランサーと黒のセイバーの戦い。
俺のような常人には彼らが繰り広げる死闘の一端すらも視界に捉えることはできないが、英霊の力を取り込んでいるに等しい、シドという新しい名前を得たホムンクルスならばその全てを網膜の内側に焼き付けることも可能だろう。
生存させてくれたことに対して深い感謝を抱いた彼はどことなく崇拝すら感じさせる瞳で礼をしたいと語り、そんな彼にビーストが望んだのはサーヴァントとして戦うこと。
そのために与えられた力は、彼女が参加した聖杯戦争におけるランサー、ブリュンヒルデの伴侶たる英霊シグルドのもの。
俺やビーストでは決してたどり着けない、戦闘を生業とする英霊だ。
「聖杯大戦の第二戦……敵方も魔力供給用のホムンクルスでも持ってるのかね」
そんなことを思ってしまうのは、きっと赤のランサーの真名を知っているから。
彼は魔力の消費量で言えば、黒のセイバーどころかほとんどの英霊を、それこそ狂戦士として召喚された英霊であったとしてもそのほとんどを上回る消費を強いるはずだ。
そんな彼を、たとえ前哨戦、スキルや宝具を使用しない本気には程遠い戦いとは言え、始まってからすでに数時間も経っているというのに平然と戦わせ続けることができるのだから、そんなことを思っても仕方ないと思ってもらえるはずだ。
そう……すでに彼らの戦いが開始してから数時間。
夜更けに始まったその戦いは剣と槍をぶつけ合うだけの原始的なもの。
少なくとも赤のセイバーの『魔力放出』のような、特殊なものなど何もないただの二人の戦士の戦いだった。
常人では目で追うことすら不可能であるにもかかわらず、俺からしても彼らの戦いは『殺し合い』というよりも神々に捧げる『演舞』か

何かを見ているような気分になることができる。
激しい剣戟はお互いの武器と、そして肉体とぶつかり合って、傷つけた肉体から飛び散る血を剣気だけで蒸発させ、その光景を鋼同士がぶつかり合ったことで生まれた火花が彩っていく。
黒のセイバーはネーデルラントの勇者、世界的に有名な竜殺（ドラゴンスレイヤー）しであるジークフリート。
世界中に存在する不死の英雄の一角を担う者であり、竜の血を浴びたその肉体は触れた者であれば誰しもが鋼鉄を思い起こす。
そんな不死の英雄の代表格と言っても過言ではないだろう彼の霊格は、間違いなく最高位に他ならない。
竜の血を浴びて不死となった彼の肉体はその逸話によって宝具となった。
『悪竜の血鎧（アーマー・オブ・ファヴニール）』という名を持ったその肉体はBランク以下の攻撃の全てを無効化し、さらにはそれを上回る攻撃に対しても強制的にBランク相当のダメージを減衰させるという。
つまり、彼を傷つけるためには最低でもAランクの攻撃方法を持っていなければならず、さすがにAランクを十二種類持たなければならないヘラクレスに比べればまだまともではあるのだが、それでも宝具の解放でもなければ普通は傷つけられない英霊という立ち位置へと彼を押し上げる、まさしく最上位に属する防御系宝具である。
しかし、彼と打ち合う赤のランサー、彼の槍の一撃はその全てがセイバーの肉体に小さいながらも傷をつけている。
それは錬金術に特化した家系であるムジーク家出身のゴルドの使う、平均程度の治癒魔術ですぐに回復するような代物ではあるのだが、確かに傷である。
つまり彼は真名解放などしていない、その槍の通常攻撃だけでAランクに届くレベルの攻撃を放つことができるということだ。
さらには彼の纏う黄金の鎧はセイバーの持つもう一つの宝具、剣士（セイバー）のクラスに据えられるに至った理由である宝具の『幻想大剣（バルム）・天魔失墜（ンク）』による一撃、それもB＋ランクの筋力値から放たれたものを受け止めるほどに頑丈だった。

しかし、それもそのはず。彼の英雄はマハーバーラタの大英雄、施しの英雄カルナ。

その黄金の鎧『日輪よ、具足となれ(カヴァーチャ&クンダーラ)』は生まれた時から彼が持つ、父たる神スーリヤの威光そのものであり、それがある限り彼は不死身であった。

共に、相手の攻撃を受けながらもそれを致命傷とすることがないほどの防御力を有しながら、技の卓越性ではわずかに赤のランサーが上回り、軀の頑強さで言えばわずかにジークフリートが上。

しかして、この戦いはただの小手調べでしかないとは言え、そこから見る限りはその総合力は同等と言わざるを得ない。

結果として黒のセイバー(ジークフリート)と赤のランサー(カルナ)の戦いは均衡状態を保ちながら、勝敗がどちらかに傾くことはなく夜を徹して続いているのだった。

「それにしても……こんな形で見ていてもいいのだろうか?」

「いいのよ、別に。見方なんて誰かが決めたわけではないのだから」

ひょっこりとキッチンから顔を出したビーストが、その光景を眺めながら疑問を口にしたシドを諭す。

ここにいる俺たちは全員、ビーストが作ったポップコーンを片手に映画を見るかのようにして二人の戦いを眺めている。

ひどく現実味のない戦いを、現実味がないままに現実感のある行為に落とし込んでいるのだが、現実のことを未だよく知らないシドは疑問を抱いたらしい。

「それにしても、一人の女性を取り合って戦うのってこういうものなのかしらね?」

「いや、さすがにそれは違うだろ」

そう、違うはずだ。

こういう場合にビーストの言葉を否定しなかった場合、シドが間違った現代知識を覚えてしまうかもしれない。

こちらのことを慕ってくれる生まれたばかりの赤子のような彼に流石にそれは不憫だろうから、ちゃんと否定をしないといけない。

とは言っても、確かに一人の少女の身柄を取り合う名目で戦い始め

たのは事実だ。
「ルーラーに見惚れでもしたのか？」
「そう、だな。確かに俺はあの人を美しいと思った」
……こういうところ、ホムンクルスはずるいと思う。
思ったことをさらっと言える。
映像の端に映っている紫水晶のような瞳を持った、金糸のような髪を三つ編みにした少女。
幻想の中にのみ存在することを許されたかのような美しさを纏ったあの少女こそ、この戦いの原因たるルーラーのサーヴァント、救国の聖女ジャンヌ・ダルク。
その存在が召喚されることを知っていた俺たちからすればともかく、シドからすればとても珍しい存在なので、そういう意味で見ていたのかと思ったのだが、実際は見惚れていただけのようだ。
「それにしても、どうして赤の陣営はルーラーを殺しに行ったのだろうか？」
状況についてはシドも理解している。
赤の陣営がランサーを派遣してルーラーを殺害しようとしたこと。
その理由は、赤の陣営の内情を知らないシドからすればあまりにも謎だったのだろう。
何せ、聖杯戦争の進行役と言われるルーラーを狙った時点で、聖杯戦争の運行を妨げると判断されてペナルティを受けても仕方ないことなのだ。
黒の陣営との戦いが控えている中、それはあまりにも致命的に思われる。
「普通に考えるなら、狙わないといけない状況だってことだろうよ。例えば、ルーラーがその強権を発動するほどの反則を犯している、とか」
そんな風に答え、映像に視線を戻す。
俺と、おそらくはビーストも視界に捉えることができない速度の戦いではあるが、シグルドの力を置換することで――それも根源接続者（ビースト）が作ったクラスカードなので本家のそれに近い力を――手にするこ

とができるシドならばこの戦いを視認できるはず。
自分がこれから身を投じることになる戦いを、彼に知っておいてほしいということでこちらで見ることにしたのだ。
ここでちゃんと見てもらわないとダメだろう。
とは言っても、そろそろ戦いは終わりだ。
戦いの空間に朝の日差しが差し込んで、彼らの姿をつまびらかにしていくのだから。
未だ完全ではないが、それでもわかる。
これ以上の戦いは、聖杯戦争の大原則たる『夜にのみ行う』ということを逸脱する。
よって二騎のサーヴァントはランサーからの提案という形で戦いを終える。
ランサーはその場を去り、セイバーもまたマスターであるゴルドがルーラーに二、三語りかけてから、彼の提案が断られてから帰って行った光景を最後に、ビーストが映していた映像は途切れた。

サーヴァントがぶつかったのは二回。
黒のアサシンと赤のセイバー、黒のセイバーと赤のランサー。
その戦いを眺めていたのはもちろん黒の陣営だけではなく赤の陣営も。
ただし、それはシロウ・コトミネという神父だけだったのだが。
彼が召喚したアサシンなのだが、その真名をセミラミス。
アッシリアの女帝である彼女は生まれてすぐに捨てられて鳩に育てられたのだが、その逸話からか鳩を使い魔とし、その監視網をルーマニア全土にまで広げている。
二度の小競り合いもそれによって確認し、その情報をまとめた資料に神父は目を通している。
「さすがは、ジークフリートというべきですか」
黒のセイバーの真名をすでに知っている彼はそんな言葉を口にした。

その彼を玉座より見下ろすのは彼のサーヴァントであるアサシン。
女の色香を振りまきながら男を堕落させる黒の魔女。
「だが厄介なだけであろう？　少なくとも、こちらのライダーを打ち破れる相手ではない」
「ええ、向こうの上位二騎のサーヴァントは神性を持っていませんから」
赤のランサーは太陽神の息子たるカルナ。
魔力さえ足りていれば彼だけでも並大抵の聖杯戦争であれば勝利は確実だろうが、そんな彼と同格の大英雄がもう一人、彼らが口にしたライダーである。
「もう一人、真名がわかっているのは我と同じくアサシンか。それで、其奴の真名は？」
おかしな会話である。
そもそもジークフリートは名乗るどころか声を一度たりとも発していない。
そんな状況下で真名を知るには彼と生前からの知己である者がいる、ぐらいなのだろうが赤の陣営にはそんな存在はいない。
それでも、どちらも黒のセイバーがジークフリートであることは疑っていなかった。
「ネロ・クラウディウスだそうですよ」
「ほう……確かローマの皇帝だったか」
まさか女性だったとは思わなかったので多少の驚きを得たが、アサシンにとってはそれだけだ。
むしろ、どことなく顔色が平常とは違う神父の方にこそ興味を惹かれた。
「やはり、キリシタンとしてはかつてキリスト教を弾劾したあの皇帝は許せぬか？」
「確かに憎いか憎くないかで言えば、きっと憎い存在なのでしょうが……」
それとはまた違う、と神父は語る。
権謀術数の只中にいる女帝ゆえに必須と言える人の嘘偽りを見抜

く力は当然のごとくアサシンも身につけていて、そのセンスがシロウが嘘をついていないことを見抜いている。
　そのため、それがどういうことなのかを語るように促す。
「最初、あのアサシンの真名を読み取れませんでした。いいえそれどころかアサシンというクラスすらも。……ネロ・クラウディウスに隠蔽の逸話なんてありましたか？」
「キャスターが隠す……ああ、ゴーレム使いにそのようなことは不可能か」
「ええ。……ですので、本当にネロ・クラウディウスなのか、と」
　真名が明かされながらも、その真名が真実なのかわからない英霊。
　そこに、シロウは少しばかりの異質さを感じざるを得なかった。

第十話

「はぁっ！」

その日、真幌はケイローンからの呼び出しを受けてミレニア城塞へと向かっていた。

内容としてはビーストも知っている。

赤の陣営は当然のことながら彼女のことを危険視しているのは黒の陣営も同じこと。

それは能力もさることながら、彼女の精神性についての話だ。

だからこそ、マスターとしての立ち位置である彼に、もしもの場合には令呪を使用して、それでも無理ならば自分の手で葬ることが求められている。

そのための授業だ。

数多の英霊を導いた教師たるケイローンが、見た所まともな精神性を有していると判断した真幌にビーストを殺害するための諸々の手段を叩き込んでいるのだ。

それを知っていてなお、彼女が手を出さない理由は簡単。

今の彼は所詮はペット、彼女は飼い猫に引っ掻かれた程度でその猫を殺すような飼い主ではないし、そもそも殺そうとしてもケイローンの授業だけでは絶対的に実力が足りない。

そんな絶対的な安心があったので、今の彼女はそちらは放置してシドが使い物になるように聖杯の泥から作り出したシャドウサーヴァントと戦わせているのだった。

「これで、終わりだっ！」

シャドウアーチャーの頭上をとった夢幻召喚（インストール）済みのシドが、固く握った拳で短剣の柄を殴り飛ばす。

剣の投擲という、本来の使い方からは外れた攻撃方法ではあるがシグルドの力を受け継いだ彼からすれば最も順応した戦い方。

そこに原初のルーンも組み合わせることでキャスタークラスとしても通用する腕前なのだが、彼は己の魔力だけではクラスカードという形である彼の力を顕現させることができず、クラスカードとともに

埋め込まれた聖杯の魔力を使用する形でその力を行使しているために、魔力の残量を気にしているのかそちらは使用できていない。
「はぁ……はぁ……」
シャドウアーチャーが消滅する姿を見届けて、シドは息を荒くしながら夢幻召喚を解除する。
彼が戦いを行い、そのために思考を働かせながらクラスカードに魔力を注ぎ続けてその礼装を起動させていられる時間はわずか五分。
それも、シャドウサーヴァントに対しての戦闘であれば向こうはその大元のサーヴァントの動きに忠実に動くだけなために、実際のサーヴァントと相対した時にはもっと動ける時間は短くなるだろう。だいたい三分といったところか。
それを見届けてビーストは言葉を紡ぐ。
「その程度だと、明日の夜の戦いには参戦させられなさそうね」
「明日の夜……？　何かあるのか？」
この中ではシドだけが聖杯大戦がどのように進むのかについての一切の情報を持たない。
すでに外れてしまったとはいえ、彼が仕える形になった真幌は外典と呼ばれた物語における聖杯大戦についての知識を持っているために多少は想像ができる立場にいる。
ビーストに至っては根源に接続しているのだからその気になればここから先の繋がり方だって理解することができる。
彼女は『自分の未来についての未来視を封印している』というだけであり、『未来視そのものを封印している』というわけではないのだから。
「ほら、これよ」
パン、と黒のセイバーと赤のランサーが戦った時と同じように、映像をスクリーンに映し出す。
そこに映っていた男は――――筋肉（マッスル）だった。
「……」

そうとしか言えない様相に、シドは口をポカンと開いていた。
トゥリファス東部に存在するイデアル森林、ミレニア城塞に向かうにあたりおそらく東部の中では最も越えることに時間がかかりそうな空間に突入する男は、まさしく筋肉だった。
どう考えてもそう例えるしかない二メートルを超える大男であるが、彼を目にした人物が一番最初に目を奪われるのはきっと身長よりもまず、その超密度の、規格外という言葉すらも生ぬるいであろう筋肉。
青白い肌に刻まれた無数の傷跡は肉の内側にまで届いていないことは明白であり、それでもなおその筋肉に傷跡を残すには凄まじいまでの修練と戦場を乗り越えてこないことには不可能なものだと容易に想像がつく。
彼の肉体を覆うのは革製のベルトだけだが、肉体を守るということには適さないその装備だけでも問題ないほどの超筋肉。
そんな怪物が、夕暮れ時の森の中を駆けるという悪夢のような光景。
今彼がいる場所はシドにはわからなかったが、それでも明日の夜の戦いということでこの映像が映し出されたということは、きっともうミレニア城塞からはそう遠くない距離にいるのだろう。
さすがにあれと戦いたくはないな、と思いながらもそんな連中と戦わざるを得ないビーストのことを思い出す。
実際に駆り出されるかどうかは別として、彼女が戦うかもしれないという事実に心配の視線を向けようとして。
（いや、必要ないな）
シドはそれを斬って捨てる。
彼女が彼に対して施した救いだけでも、彼女が最上位の存在であることに疑う余地はない。
そんな彼女が敗北などするはずがないと、ある種の崇拝じみた思考に至っているシドは、あれを恐れた自分を『こんな形では彼女の役には立てないぞ』と奮い立たせる。
「なっ!?」

だが、さらにそこに二人のサーヴァントが追加されてしまえば話は別だ。
そのバーサーカーの後を追いかけるように二つの人影がある。
一人は野性味溢れる顔立ちの、翠緑の衣装を纏ったまさしく人型の獣と呼ぶにふさわしい少女。
もう一人は屈託のない笑みを浮かべた、力強いがっしりとした体躯の英傑と呼ぶにふさわしい風貌の青年。
サーヴァントだ、とシドは気がついた。それも超級の存在だと。
神性を持つ英霊をその身に置換したからか、男に関しては同じように神性を持つと理解した。
だが、彼は理解できたのはそこまで。
だから、隣にいるビーストが言葉にしたことは彼には一瞬理解できなかった。
「赤のアーチャー、アタランテに赤のライダーのアキレウスね」
「え……？」
どうして真名までわかるのだろうか。
彼女は黒の陣営であるはずなのに。
そんな思考がぐるぐると。
もしかして彼女は赤の陣営と通じているのだろうか、という思考にまで至ったのはかなり遅れてのこと。
それが顔に出るよりも先にビーストはシドの方を向く。
「あら、私がどうして知っているかなんてあなたが誰の味方をするのかに関係あるの？」
「……いや、ないな。俺は命を救ってくれた貴方達に仕えるだけだ」
にこりと微笑んだビースト。
世界を喰らう女神（ボトニアテローン）。
それを使役（に使われる）するマスター。
そして彼らを守ろうとする神代（ホム）の力を纏う騎士（ンクルス）。
黒の陣営であるにもかかわらず、黒の陣営どころか聖杯大戦とすらも関係のない勢力である。
「それで、貴女はどうするんだ。今日はバーサーカーがミレニア城塞

に攻め込むのなら、やはりそちらに向かうのか？」
「うーん、そうね……別に放置してもいいのだけれど――」

「理想の王子様ならホムンクルスを死なせない」
ポツリと、体を地面に投げ出しながら俺は呟いた。
ついさっき、ダーニックから期待できる駒というような目で見られながら、全員集合という連絡をアーチャーのついでに受け取った。
これから起こることに対して大体の予想はついているために、その予想の通りであればビーストからはきっとそれを望まれるということも理解できていた。
無論、俺があの戦いに参戦することなどは不可能であるが、それでもホムンクルスを救うことに限定するならば俺の魔術を使えば不可能ではない。
だからきっと（俺が不可能だった場合はわからないが）ビーストからはそれを言われるのだろう。
「何か言いましたか？」
「いや、別に」
さっきまで俺に対してパンクラチオンを仕込んでいたアーチャー、ケイローンが俺の呟きを捉えたのか去っていったダーニックの方から視線を移して尋ねてきた。
彼らがこちらに対して厚遇してくれるのは、きっと黒の陣営に本当の意味で取り込むためだろうと思う。
ビーストの能力がわかってしまった以上、彼女をうまいこと使えばこちらのサーヴァントの数で優位を取れるようになるから。
アーチャーに関しては彼女の行動を見て何かまずいと思ったのか、もしもの時にビーストを己の手で葬れるように、なんて理由でパンクラチオンを教えてくれたのだが。
とりあえず、ビーストが完全な状態でサーヴァントを召喚するためには三日間は必要になる、なんてことをこのあいだの戦いの時に言ってしまったのが関の山。

これまでは工房を仕上げていたから作っていなかったとも言ってしまったために、ビーストは戦力を整えることを求められている。
ただし、それはダーニックの話で、ランサーからすればあれは英霊の誇りを著しく損なうからと蛇蝎のごとく嫌われている。
そのため、この戦いでは決して投入することができない存在でもある。
少なくとも、ランサーが消滅しない限りは。
「アサシン」
「はいはい、何かしら？」
パンクラチオンを実戦形式も合わせて教え込まれたことで節々が痛むのだが、先にアーチャーを王の間に向かわせてからビーストのことを呼ぶ。
とはいえ城内なので誰が見ているのかわからないためにアサシン呼び。
転移魔術をしれっと使って入ってきているビーストのことを誰かに見られるわけにはいかないので、アーチャーも先に行かせたのだ。
彼女がそれこそ切断された部位すらも修復できそうな治癒魔術でこちらを癒している彼女はどことなく楽しそう。
治してもらってから向かった王の間にて、俺たちが見せられたのは赤のバーサーカーが進撃する様。
もちろん、ビーストに関しては姿を隠蔽している。
彼女はいま家にいることになっているのだから。
バレないだろうかという不安とバレるようなヘマを彼女がするはずがないという信頼。
心臓が激しい鼓動を鳴らしているのではないかと思うような状況だから、ダーニックの言葉のほとんどが耳に入ってこない。
「この〝赤〟のバーサーカー、上手くすれば我らの手駒にすることが可能かもしれぬ」
だから、耳に入ってきたのはそんな、周囲をざわつかせるに足る言葉だけ。
そのざわめきが治る頃に、ヴラド三世が穏やかな口調で彼がその考

えに至った理由、そしてそれを実行するための案をダーニックに求める。
「具体的なプランを聞かせてもらおうか。もちろん、こうしてアサシンを除いたサーヴァントたちを集めたということはそれに足る理由があるのだろうね？」
「もちろんです、領王（ロード）よ」
ダーニックの指示の下、残りのメンバーたちが捕獲作戦の内容が詰められていく。
おそらくアサシン（ビースト）のマスターである俺だけがこれを聞かされているのは、ビーストを待っている時間が勿体無いというのが表向き、そして実際には聞かせたくはないけれどバレて謀ろうとしていると判断されるのも厄介と思ったから、なのだろうか。
本当のところはわからないが、俺に思いつくのはその程度。
とりあえず仕事がない俺は、バーサーカーの対処をしている間に他のサーヴァント――一番あり得るのはセイバーだが――が攻め込んでこないようにしておいてほしい、ということになった。
ただ、それを守れるとは俺は思っていないし、ビーストもそれをさせるつもりはないのだろうが。
「俺は、ホムンクルスを助ければいいんだよな？」
もう帰っていいという言葉を受けてミレニア城塞の出口へと向かう中、こっそりと呟いたその言葉に気配遮断状態の彼女はどこか嬉しそうに頷く。
彼女にとって何の価値も持たないホムンクルス。
その命の価値など、きっと魔術師以上に認めていないどころか、まずその存在すらもしっかりと認識できているのかすら怪しいそれが、『理想の王子様』ならどうするのかをはかる指標となった時、命の価値が存在しないままに新たな価値が彼女の中に浮上するのだ。
「きっと王子様ならそうする――だから、あなたもそうしなさい？」
耳元で囁くように言われたその言葉。
目に見えることはないが、きっと今の彼女は笑みを浮かべているのだろうとわかる。

その言葉に対して、俺が拒否権を持つことはない。
たとえそれが、痛ましいぐらいに空虚な言葉だったとしても。
これまでの生活の中での微笑みの方が、よほど少女らしいものだったとしても。
彼女の願う『理想の王子様』に近づけば近づくほどに最後には裏切られることになるとわかっていても。
理想が結実すれば彼女の恋は破れることになるとわかっていても。
俺がそれを指摘することも、彼女の言葉に対して逆らうことも、決して許されていないのだ。

第十一話

赤のバーサーカー、トラキアの剣闘士スパルタクス。

彼の進撃は圧制者が世に一人でも有る限り止まることはなく、今もこうしてミレニア城塞にある黒のランサー（圧制者）を追い求めて走り続けていた。

その進撃を食いとめるべくミレニア城塞より千界樹（ユグドミレニア）の命令を受けて出陣したのはホムンクルスと、そしてバーサーカーの巨躯をはるかに超える巨体の石の巨人（ゴーレム）。

通常であればその二種類の兵士の数はたった一騎の敵兵を相手にするにはあまりにも過剰な物量と言わざるを得ない代物だったが、その一騎が英霊（サーヴァント）であるというのであれば、たとえそれらの数が千でも万でも、全くの意味をなさない塵の山にしかならないだろう。

バーサーカーの肩口にホムンクルスの斧槍（ハルバード）が食い込み、ゴーレムの拳が顔面に叩きつけられる。

ホムンクルスはともかくとして、ゴーレムは下級のサーヴァントであれば同等に戦えるだけの性能を有しているにもかかわらず、バーサーカーの足を一瞬でも止めるには及ばない。

拳によって隠れた顔には微笑みが絶えることはなく、あらゆる攻撃をその肉体で受け止めながらバーサーカーはひたすらに前進する。

此度、バーサーカーの迎撃に出たゴーレム達は彼の肉体と同質のものを思わせる青銅製のもの。

三メートル級のそれを苦もなく放り投げ、運悪く投げた場所にいたホムンクルス達を押しつぶす。

「哀れな圧制者の人形よ、せめて我が剣と拳で眠りなさい」

別に仲間が潰されたからとて怯むような情緒をホムンクルスは持たない。

だから、彼らが一瞬動きを止めてしまったのはそんなものではなく、きっと戸惑いと呼ばれる感情によるもの。

法悦を抱くがごとき笑みを決して絶やさない彼を理解することができず、そんな感情にとらわれて動きを止めてしまったのだ。

その瞬間に、なんとも珍しいことにバーサーカーが言葉を発する。
狂化ランクが低いわけではない。むしろ彼の狂化ランクは評価規格外（EXランク）。
彼は会話は不可能なわけではないが、〝最も困難な道を行く〟ことに思考が固定されている。
だからこそ、こうして黒の陣営が放った兵士たちの攻撃を全て受け止めているのだ。
たとえそれが超圧縮された筋肉が生み出す天然物の鎧によって内部にまで届かないとしても、それでも自ら攻撃に向かって行くようなその行動は当たり前の感性を持つ存在であれば思わず目眩を覚えてしまうほどに理解不能な存在だった。
彼は己の進路を塞ぐ全ての存在を打倒して、その先に存在する彼がいうところの『圧制者』の打倒をも目指して先に進んで行く。

「うわぁ……」
知ってはいたけれどこうして見てみると、確かに訳がわからないバーサーカーだあれ。
ぶっちゃけた話気持ち悪い。
そんなバーサーカーを映し出すスクリーンがあるのは俺たちに与えられている家であり、そこには俺たち以外にも戦場で潰されているホムンクルスがその光景を眺めている。
「私たちはここで見ていてもいいのだろうか……？」
「いいに決まってるだろ。……というか、今から戦場に向かってどうするんだ？　武器も何もないだろうに」
「それは……」
戦場で潰されているホムンクルス、というのは別に冗談でもなんでもない。
同型機のホムンクルスというわけではなく、彼らはあそこにいるホムンクルスそのもの。
沙条愛歌という根源接続者の力を借りることで自分の身の丈以上

の魔術の使用を可能にした結果、『ホムンクルス達の鏡像を現実に映し出す』という、魔術師の道理（等価交換）を知っていれば頭おかしいんじゃないかと言われるようなことを実行したのだ。

そのため、戦場にいるホムンクルス達は左右逆転した状態で武器を持っているのだが、そもそもホムンクルス達の利き腕など魔術師でしかない彼らが知るはずもなく、彼らが偽物だということがバレるような事態には陥っていない。

「で、肝心のビーストはどこに行ったのやら……」

彼ら彼女らを救出させたビーストは、こちらにホムンクルス達を転移させてからまたどこかに転移していった。

転移魔術をポンポン使用するその姿に魔術師の道理を知っているホムンクルス達は驚いていたのだが、そんな姿にビーストが頓着するはずもない。

俺が彼らを見捨てなかった、という事実だけが彼女にとっては必要なもので、それ以降彼らがどうなろうとビーストにとっては知ったことではないのだ。

まあ、彼女が何をしていようとも俺にそれを止めることはできない。

簡単にやられるような子ではないので、別に心配する必要もないだろう。

そう思って、視線を彼女が礼装を作ったことで彼女無しでも戦場の映像を映し出せるようになったこの部屋からバーサーカーの猛進を眺めることにした。

惨い有様だ、とバーサーカーのもたらした破壊の惨状を見た黒のアーチャーは呟いた。

そして、この惨状から読み取れるバーサーカーの性質についての所感も述べる。

サーヴァントならば有して当然の戦闘力とはいえ、これほどまでの惨状を生み出そうとするのはなかなかの例外だと思われたから。

「あのバーサーカーは技術ではなく傲岸な力で敵を屠る怪物ですね。一切の術理を不要とし、ただ戦うために生まれ落ちたような英霊。バーサーカーとして狂化されたからああなったのではなく、バーサーカー以外に適応するクラスはないのかもしれません」
「ボクやアーチャーのこともあの拳で殺っちまうかな？」
「あの馬鹿げた力なら十分ありえるでしょうね。直撃だけは避けなさい」
へーい、と気の抜けた返事をしたのは派手に着飾った中性的な少年、黒の陣営にてライダーのクラスで呼ばれたサーヴァント、アストルフォ。
その手に握られたのは、イングランドの王の息子にしてシャルルマーニュ十二勇士たる彼に相応しい装飾華美な黄金の馬上槍（ランス）。
近づいてきていた音と振動が不意にたち消え、わずかばかりの静寂が森の中に満ちる。
気配を断つ術を持たないバーサーカーはそこにいる、そのことはライダーにもわかる。
先の警告を残したアーチャーはすでに弓兵（アーチャー）としての本来の居場所たる城壁の上に。
この場にいるのは自分一人なのだ、と蒸発した理性で自らの危険を理解しながらも一歩踏み込んで。
「さあ、圧制者よ。その傲慢が潰え、強者の驕りが蹴散らされる時が来たぞ」
アストルフォは理性が蒸発している騎士ではあるが、相手の戦力を測れないという訳ではない。
自分ではこのバーサーカーの一撃を受ければ即死してもおかしくはないということも、逆にバーサーカーには彼の槍では致命傷を与えることはできない。
所詮はただの馬上槍、強化魔術がある訳でもなく、因果逆転の呪いがある訳でもなく、あらゆるものを貫く伝承がある訳でもない。
「遠からん者は音にも聞け！　近くば寄って目にも見よ！　我が名はシャルルマーニュが十二勇士の一人アストルフォ！　いざ、尋常に―

―勝負!!」
アストルフォが己を奮い立たせるようにして叫んだその言葉も、バーサーカーからすれば「己から真名を明かす」という傲慢にしか映らない。
スパルタクスは羆の大きさで猪の突進を行うような、巨体にはあまりにも似合わない俊敏な動きから大上段の振り下ろしを繰り出した。
「はははははははははははは!!」
「……いっ!?」
アストルフォは躱した。確かに躱した。
だが、それにもアストルフォの生死を分ける以外にはほとんど意味はなかった。
なぜならその一撃は大地に大きな爪痕を刻み、巻き起こした衝撃だけでアストルフォをスパルタクスの射程から弾き飛ばすだけの威力を誇っていたから。
「あいたたた……ひどい一撃だこと」
これは倒せないな、と確信する。
先ほどまでは予想でしかなかったが、今となってはそれは確信に至った。
アストルフォの火力ではきっと、バーサーカーのマスターからの支援も加われば一切のダメージを与えることは不可能だろう。
彼も英霊となった存在であるがゆえに技もあるが、小手先のそれらが通用するなんて都合のいい未来を思い描くことすらできないほどにバーサーカーは強靭である。
あるいは、ライダーのクラスのサーヴァントが誇る多彩な宝具であれば彼に通用するものがあるかもしれないが、それは大量に魔力を消費するためにそう簡単にポンポン使用するつもりはなかった。
それでもライダーが下がらないのは、これがバーサーカーを倒す作戦ではなく、捕獲するための作戦だからだ。
この作戦において彼以上の適任などいるはずもない。
「さあ、行くぞ……君の力を見せてやる！　アルガリア！」
先の振り下ろしで開いた距離を埋めるようにして、ライダーのクラ

スの本領たる騎乗を行わない状態ながらも電光石火の突進を行なってスパルタクスとの距離を詰める。
突き出される馬上槍（アルガリア）をバーサーカーは歓喜の表情とともに受け止める。
それこそがスパルタクスの在り方ゆえに、必ず敵の攻撃を受け止めてからそれに対しての反撃という形を行う。
そこに例外はなく、アストルフォの一撃に対しても同じようにして反撃の小剣（グラディウス）を振り上げる。
その、きっと誰もが思い描くであろう未来、バーサーカーにとっては何よりも歓喜すべき一瞬先の未来が訪れる。
そのはず、だったのに。
「触れれば転倒（トラップ・オブ・アルガリア）！」
アストルフォが己の宝具の真名を叫ぶ。
この戦場において致命的なまでの効果を持った、その宝具の真名を。
効果に一番最初に気がついたのは、己が落下する感覚を抱いたバーサーカーだった。
踏みしめていたはずの大地がなくなり、振り下ろすはずだった剣のことを一瞬忘却し、されどその表情から微笑みを絶やすことはなく。
けれどこの宝具の効果に対する反逆までは彼には許されていなかった。
この宝具は名の通り、触れた相手を転倒させる効果を抱いている。
サーヴァントに使用すれば、相手の肉体に対して触れる――たとえそれが魔力で編み上げられた鎧であっても――ことによって『膝から下を強制的に霊体化させる』という効果として発揮される。
相手の攻撃をとにかく体で受けるバーサーカーに対しては致命的なまでに相性のいい『触れただけで発動する宝具』が、このライダーの第一宝具だった。
「両足を失くした程度で、私は止められない」
「……いや全くその通り。だからこれから止めるのさ」
それでもなお両腕で這って進もうとするバーサーカー。

彼の思考に停止はない。
そんな彼に対して黒のキャスターの作った重さ一トンを超えるゴーレムたちがのしかかろうとする。
機動力を奪うまでがライダーの仕事であり、それ以降はゴーレム達の仕事。
残った二本の腕を振り回すバーサーカーに頭蓋を砕かれながら、それでもなお動きを封じることが彼らに与えられた任務である。
しかし、その任務も達成できそうにはない。
砕かれるゴーレム達ではバーサーカーの動きを止めることはできず――
「ふむ、見事なものだ。卑下する必要はないぞ、キャスター。お前のゴーレムはよくやっている。あのバーサーカーが異常なだけだ」
そんな彼の前に、黒のランサー（圧制者）が現れた。
赤のバーサーカーの歓喜と憎しみ、その全てを向けられるべき対象が。
その後のことは語るまでもない。
ここは黒のランサーの領地、そのため彼の宝具は何も問題なく解放できる状態であり、『杭』がバーサーカーの肉に突き刺さり動きを封じた。
キャスターがバーサーカーの暫定的なマスターとなるための儀式を行えば今日の目的となるバーサーカーの捕獲は終了だ。
「ここまでは普通に進んでるわね」
その光景を、少し離れたところからビーストは見ていた。
とあるビルの屋上で、異常なまでの強化が行われた視力を以て捉えた戦場では、バーサーカーがキャスターとの契約を結ばされた瞬間が見えている。
そして同時に、赤のライダーとアーチャーを相手にしている黒のセイバー、バーサーカーの二名。
さらにライダーが神性持ちでなくば攻撃が通らないという事実もあるために後方から援護するアーチャー。
「黒のサーヴァントとお見受けする」

それの観察を邪魔したのは、そんな声。
振り向いたビーストの瞳に映ったのは一人の青年。
無造作に伸ばされた白い髪、鋭さを纏った眼光、そして何よりも体と一体化したかのような黄金の鎧。
「赤のランサー、カルナね」
「ほう、真名まで知っていたか」
「なぜ、と問うのは無粋よね。これは聖杯大戦だもの」
言の葉を紡ぎながら、少女はすでに転移でランサーから離れている。
本気を出すつもりだからか、隠蔽魔術の一部を解除して胸元の令呪の紋様と同じ形状の翼と角を出現させている。
無論、真名については隠していて、されどカルナを相手にしては『貧者の見識』によって暴かれる。
よってこれは、天草四郎時貞に真名を掴ませないためだけの使用だった。
そしてそれと同時に彼女が持つ聖杯からこんこんと泥が溢れ出る。
「始めようか、獣の冠を抱く者よ」
赤のランサーも、日輪を背負ったがごとき威容にて周囲を覆い出す泥を焼き尽くす。
この女はここで打ち果たさねばならぬと決意してのことだった。

第十二話

「え……？」

その時、俺に流れ込んできたのは一体何だったのか。

少し経って、それはビーストの感情だとわかったが、ならば今度は一体何があったのかと思考が至るのは当然だったと言えるだろう。

何せこれまで彼女の思考がこちらに流れ込んでくることなんて一度たりとてなかった。

彼女自身がそれをしないようにしていたのか、それとも普通に流れ込んでくるような出来事がなかっただけなのか。

どちらにせよ、今流れ込んできたということは『流れ込むような何かが発生した』ということで。

沙条愛歌の心を（おそらく苛立ちで）揺り動かすようなことなんて一体どこの馬鹿がやらかしたのか。

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない。気にしないでくれていい」

シドの言葉にもどこか上の空で返した気がする。

思うのは令呪を使うべきか否かという一点のみ。

この場で令呪を使えば俺たちに被害がやってくる可能性があるし、逆に令呪を使わずにビーストがやられるのをただこの場で待つのか。

いや、もしかしたらビーストが勝利する可能性だってあるのかもしれないが、それでも相手は英雄英傑。

今、赤の陣営で動くことができる中で最も高いだろう可能性を挙げるならセイバーかランサー。

どちらであったにせよ、感情を乱している状態で勝てるほど甘い相手には思えない。

ここは逃げの一手を打つべきだろうか。

「ビースト……」

彼女の『理想（王子様）』だったらどのような行動をとるのだろうか。

その通りに動いたならば、あるいは俺のとる行動を彼女が許してくれるのだろうか。

彼女の生存を願っても自分の感情の通りに動くことができない、ということに多少の苛立ちを感じてしまう。
けれど、よくよく考えてみれば彼女の生存を願う理由なんて……いいや、あるか。
彼女が生き残っていないと、俺はヴラド三世に殺されるかもしれない。
俺と彼女は精神が似通っていると判断されているのだ。
ケイローンからは問題ないと思われているようだが、それがランサーにまで通用するなんて楽観視することができるはずもない。
「……問題、ないな」
そうだ、よくよく考えてみれば彼女の聖杯ではない、もう一つの宝具は使用すればほとんど勝ちが確定するような代物だ。
未だ収まっていない彼女からの苛立ちの感情の流入を考えれば、命的な意味ではそこまで危険な状態ではないのだろう。
ムカムカとした彼女の手でトゥリファスが滅びないとは限らないが。
「っていうか令呪も通用しないんだから悩む必要なんてないか……」
一応は念話を使用して支援、あるいは撤退のサポートをするかと尋ねてみたが無視された。
きっと気がついていないのだろう。
ビーストが……本来なら存在しないはずのサーヴァントが存在するために相手が何をしてくるのかわからない。
バーサーカーの補助を行うだけだったのだからそこまで変化はないと思いたいが、ランサーも追加されてしまったという事実が変化をどうしても意識せざるを得ないのだ。
大体の敵ならばシドでもどうにかできる程度なのだが、どうしてもサーヴァントが侵入するとなると難しい。
だから、できることなら早く戻ってきてほしいのだが。
「俺には何もできないんだよなぁ……」
彼女に早く戻ってきてほしいと思いつつも使える魔術では、サーヴァント同士の戦闘の助けになどなるはずもない。

だから、俺にできるのは祈ることだけ。
窓の外に見える、真夜中であるにもかかわらず太陽が出ているがごとき威容。
赤のランサーなのだ、と理解できた。
あれをできるサーヴァントなど、赤のランサー以外に存在するはずもない。
そして、その日輪を穢すかのような汚泥もまた流れ落ちている。
ランサーとビーストの本気の戦いだ。
持っていかれる魔力は彼女の持つ聖杯のおかげというべきか、それともせいというべきか、ほとんど存在していない。
彼女は常に、俺に縛られることなく全力を出すことができる。
それが頼もしくもあったし、同時に恐ろしくも、そしていかなる理由によるものなのか悔しいという感情すらもどこからか湧いてきていた。

その頃、ビーストはビーストでカルナという英霊を全力で殺しにかかっていた。
それはとても珍しいことである。
何故ならば、彼女にとって価値のある存在はアーサー王だけ。
にもかかわらず、彼女が彼女の目的のために邪魔だから殺しにかかるのではなく、カルナという個人を〝生かしてはおけぬ〟と全力で殺しにかかるという状況それ自体が異常なのだ。
「貴方なら、真幌が理想の王子様にどれだけ近づいたのかを測る指標になると思ったのだけれどね」
カルナはその人物の本質を見抜く。
虚飾など通用しない彼を前にすれば、今の真幌がどれだけ変化したのか、その性根の部分から把握することが可能だろうと思って、彼のことを道具にしようという魂胆だった。
ただしそんな理由ももう彼女の中から一切合切消え失せている。
ただ冷徹に死になさい、と言葉にした彼女が持つ聖杯からこぼれ落

ちた泥が、触手と化してカルナの肉体を侵食しにかかる。
それがなされずとも、その触手は大英雄クラスのサーヴァントが放つ一撃と同じ程度の速度、同じ程度の威力を保っている。
生半可なサーヴァントでは対抗することは許されず、大英雄クラスであったとしてもその泥を武器にて吹き飛ばせば散らした泥に侵食を受ける。
これを避けるにはまず近距離の攻撃手段だけではなく魔術のような遠距離攻撃手段を持つか、あるいは泥そのものを消しとばす必要がある。
カルナは、後者だった。
「お前の基準を俺が知るはずがないだろう、獣の女王よ。お前の語る理想、それをお前自身が疑い今ある現実の状態と軋轢を得ている現状で、どうして俺にならば理解できると踏んだのか。それがまるで理解できん」
巨大な剛槍に纏った炎が泥の全てを焼き払う。
一撃でも受けるわけにはいかない彼は、入念に焼き払う必要がある。
マスターの魔力量に懸念があるために今のカルナは全力を出すことは難しいのだが、それを押してなおこの場で倒さねばならないと決意している。
太陽神の息子たる彼の『魔力放出（炎）』によって生み出される紅蓮の煉獄が汚泥の地獄を焼き尽くす。
「なら、理解できるようにしてあげるだけのことよ」
苛立ちを込めたビーストの言葉。
カルナの言葉はあらゆる虚飾を剥がして、彼女の本心をつく。
誰もが知りたがらない己の最も醜い部分を彼はつくのだ。
それが沙条愛歌にとって〝最も醜い部分〟であるかどうかはともかくとして、彼の言葉は彼女が認識しないようにしていたどこかを突いたらしい。
彼に対して襲いかかる泥の勢いは上昇する。
炎槍によるなぎ払い。

それでランサーの一手が潰された時に、ビーストは転移によって距離を開けている。
そのタイミングで真幌から念話が来たのだが、先のランサーの発言もあって心をかき乱されるような予感があったためにビーストは無視をする。
ランサーの言葉には虚飾などなく、その人物の本質をついてしまうから。
ビーストを守るように広がった汚泥の中から、一つの人影が立ち上がる。
「さあ、行きなさい」
それは、以前のアーチャーと似ているようで違う。
汚泥で構成されたアーチャーとは違い、汚泥の中にいながらもその白い肌も魔銀（ミスリル）の鎧も、そして巨大な槍すらも、汚泥ではなくそこに存在していて、汚泥を纏った人間のような姿。
北欧の戦乙女（ワルキューレ）が長女、ブリュンヒルデ。
彼女の半神としての機能が完全に解放された状態で召喚され、およそ万能と呼べるだけの力を誇っていた。
ビーストがすぐに召喚できる英霊の中でも三本指に入る英霊の一人は、太陽の英霊たるカルナには及ばないながらも魔力放出による炎を顕現させながら、カルナに向けて突進した。
勇士の姿をそこに見たために。
「お前たちを倒すには、今のままでは厳しいようだな」
片手で己の持つ槍を軽々と振り回し、不可視の手が存在するかのような、その指先で切り裂くがごとき五連撃を放ったブリュンヒルデを、ただの一振りで迎撃するカルナ。
いいや、カルナの一撃を、〝軽い〟五連撃で迎撃したブリュンヒルデが規格外なのか。
少なくとも過剰なまでの魔力を注がれているブリュンヒルデの方が有利なのは間違いがない。
宝具の使用を縛ったままでは、間違いなくカルナが敗北する。
それを悟り、カルナは己の持つ神槍に今持てる魔力を全力で注ぎ込

んで行く。
最大火力には程遠い、とまでは言わないが、それでも達していない。
炎が渦巻き、その神槍に収束する。
外装が外れ、膨大な炎を巻き上げるそれはまさしく彼の父親たる太陽を思わせる。
輝ける太陽の光を見て、ビーストは一瞬で防御を諦めた。
神代の魔術防壁がいくらあろうとも、一秒たりとてその進撃を止めることができない。
相手が〝英雄〟であるがゆえに殺したくなってしまうブリュンヒルデの性質を加えてもなお、宝具の正面激突となれば分が悪い。
「行け――――『梵天よ、我を呪え（ブラフマーストラ・クンダーラ）』！」
赤のランサーがビルの屋上を踏み砕きながら放った不滅（ブラフマーストラ）の刃は、確かにビーストの元へと突き進む。
赤のランサーはマスターの魔力量を過信することはなく、だからこそこの一撃が今の彼が放てる最後の一撃。
これ以上の戦闘行動は、マスターの命を危険に晒すことになる。
それは本意ではないために、これがラストと決めた。
正面から宝具を以て激突した汚泥のランサーはその一撃に十秒程度拮抗してから消滅し、ビーストの持つ聖杯の中に帰還する。
その間にビーストは転移魔術を行なっている。
膨大な破壊をもたらすレーザーに近しい炎の投槍を終えた赤のランサーの上に。
もうこれ以上は戦えない赤のランサーの汚染を行うために、聖杯の泥を垂らす。
「さあ、ランサー。貴方も私の兵士になりなさい？」
「悪いが断る」
カルナはマスターからの魔力供給によるものではなく、自分の肉体を構成する魔力を使用して瞬間的にコンマ以下の時間、魔力放出を展開する。
自らに向けられるはずだった泥を焼き尽くし、わずかながらにビーストのドレスの裾を焦がす。

それだけで済んだのは、彼女の肉体に届くよりも先に転移魔術が行われたから。
『千里眼』によって未来を見ることができる彼女は最初からこうなると理解していたから、最初から常に転移魔術だけはいつでも使えるようにしていたから。
「あら、逃げられちゃった」
言葉は軽く、されど表情は忌々しそうに。
炎で隠れたと同時に霊体化を行なったのかすでにそこにはカルナの姿はない。
もうすでにここに彼女が留まる理由もない。
なぜなら、ミレニア城塞の方の戦闘もすでに終結しているのだから。
転移によって彼女はマスターたちがいる家へと戻る。
神王（ライダー）も召喚して確実に倒すべきだったかしら、なんてことを思いながら。
「ビースト……！」
リビングに転移すれば彼女のマスターたる真幌が少しホッとした表情になる。
〝沙条愛歌（ビースト）が無事であることに安堵する表情〟がわずかにかつての王子（セイバー）様に重なる部分が見えて、先ほどのカルナの言もあってか彼女の心をかき乱す。
「私、今日はもう寝るわ」
「え……あ、ああ」
どことなく様子の違うビーストに真幌は少し戸惑っているようだが、それにビーストが構うことはない。
擬似サーヴァントゆえか、依り代が存在するゆえか、彼女は霊体化することはできず、普通の人間のように飯を食べ、そして眠る。
実際にはしなくとも問題はない行為ではあるのだろうが、それでも実体が存在するためにやはりしておいた方が効率はいい。
そのため、彼女がそれを行うことには何もおかしなことはないのだが、それでも真幌の中からは違和感が消えることはない。

「次はどう動こうかしら?」
部屋に戻ったビーストは呟く。
理想の王子様を幻視した行為ではあったがそれは別に彼女の無事を心の底から安堵したからではない。
結局のところ、彼女がいないと自らの無事が保証されないと理解しているからだ。
理想の王子様の素体である彼は、理想の王子様に至るまでの間、あるいは確実に至れなくなってしまうまではビーストによる保護が保証されているのだから。
彼女が求める『理想の王子様』には程遠い、利己的と言わざるを得ない無事の喜び方。
誰に対しても向けるであろう理想(セイ)の王子様(バー)の安堵と、真幌が向けた個人の無事に対する安堵。
セイバーの向ける安堵の方が確かに彼女の求めるそれであり、後者に関してはどこにでもありふれた代物だ。
それでも、それらを比べることができてしまったのはなぜなのだろうか。
ビーストには、それはわからなかった。

第十三話

視界いっぱいに広がるのは洞窟の中。
その中心で妖精をおもわせる一人の少女がくるくると踊っていた。
これは過去の映像だ、と気がついた。
「早く会いたい、早く会いたい、早く会いたい！　私のセイバー！　私の、私だけの王子様！」
無邪気に踊る少女に恐ろしさを感じざるを得ないのに、その恐怖から漏れ出るはずの声も出ることはなく、ただ眺めているだけ。
その事実が、これは夢なのだと気が付かせてくれた。
幻想的な洞窟も、中心で踊っている見知(見知)ったはずの(らぬ)少女も、全てが過去の出来事なのだと。
気がついた時には放り出されていた現実味のないこの楽園(地獄)を楽しもうとは、真幌の心が砕けでもしない限りは決してあり得ないだろう。
なぜなら、その幻想を砕いてもあまりあるほどの呪詛がそこにはある。
彼女が踊る洞窟の中心、そこに存在する聖杯から流れ落ちる汚泥とその下に存在するビースト……第六の獣の存在がこの幻想を地獄へと変貌させていた。
見たことのない場所が汚れ、世界の滅びの中心となるはずのその光景。
されど真幌の瞳が捉えているのはそんな存在ではなく、この中では最も小さき存在だけ。
実際の戦闘能力や危険性はどれが一番上なのか、そんなことは真幌も知らない。
だが、彼の人生の中で唯一その危険性を理解することができたのはその小さき少女だけ。
故に、彼が捉えたのはその少女だけだった。
――まあ、当然だろうな。
真幌が契約したビーストの過去は、彼だって知っている。

知っているからこそ、これまであれほど恐れていたのだから。
だが、この光景に納得を得たことで、先の言を翻すように〝これは彼女の過去ではない〟と判断した。
より正確には、これは彼女が体験した過去ではない、と。
なぜならば、依り代となった沙条愛歌には〝セイバーとともに聖杯戦争に参戦した経験〟などないのだから。
それは、彼女の胸元に刺し貫かれた傷がないことと令呪が発現していないことから簡単にわかる。
ならばこれは何かと言われれば、きっと彼女が『千里眼』で見た光景。
彼女がいずれ出会うはずだった理想の王子様との未来を夢見て、そしてその果てに裏切りを得てなお何も変わることがなかった世界。
恋に一直線で、いずれセイバーと結ばれることを無邪気に信じていた世界の彼女は彼にとっては恐ろしい存在と言わざるを得なかった。

「運が良かったって言わざるを得ないのかな……」
この世界の、セイバーと結ばれることを諦めてセイバー（理想の王子様）を作ることを決めたビーストと、セイバーと結ばれると信じて早く会いたいと叫んでいた彼女、どちらをサーヴァントとして召喚するのがマシかと言われれば間違いなく俺が召喚した方だろう。
どう考えてもそうでなければセイバーを呼ぶための生贄か、あるいは彼女自身がマスターになるために令呪を奪われて瞬殺される終幕だった。
「ちょっと、真幌。あなた私の過去を夢で見たでしょ」
だから、普段ならば回収したホムンクルスが起こしに来るというのに今日に限ってはビーストがやってきた時も、普段に比べて恐怖よりも安堵の方が大きかった。
「お前がサーヴァントで良かったわ……」
本気で、心の底から安堵する。
沙条愛歌ではなくビーストが己のサーヴァントであったことに。

だが、どういうことだろうか。
なぜかビーストが頬をわずかに赤らめているではないか。
「もう！　そういうところはセイバーに似なくてもいいのよ」
「……!?」
しかも、あり得ないことにセイバーに似なくてもいいとのこと。
これは本当に俺の知るビーストなのだろうか。
いや、普通に経路（パス）は目の前の少女につながっている。
俺の中で〝未だ彼女に見限られていない〟と信じられる唯一確かなその契約は未だ途切れることはなく、されど少しだけ彼女の心拍数は上がっていることが伝わって来る。
どちらかといえばドキドキとした、といった様子だろうか。
ただ、ドキドキする要素はあるのか謎だ。
なぜならば彼女ならば俺が言葉にしたことの意味を間違うことなどないだろうし、そんな彼女がドキドキするような言葉を口にしたような覚えはない。
例えば、先ほどの言葉が純粋に彼女がサーヴァントであることを喜んでいるのならばまだしも、俺の場合はまだマシだったな、というような感情だ。
彼女があんなことを言うような理由は決して存在しない。
そこまで考えて、もしかしてと思い至る。
昨日のカルナとの戦いで起きた何かが未だに尾を引いているのだろうか。
何があったのか全く教えてもらえないので、俺には想像することしかできない。
それでも、今の彼女は見かけ上はこれまで通りのために、きっと問題はないのだろう。
彼女は根源接続者、ありとあらゆることを知ってしまっている彼女はきっと、こういう場合の立ち直り方だってきっと知っている。
だから、これ以上心配することはしない。
「そういえば、カルナにはまだ真名はバレてないのか？」
「多分大丈夫だと思うわ。さすがに、ネロ・クラウディウスが真名でな

いことぐらいはバレてると思った方がいいでしょうけど」
ああ、そういえば彼には虚飾が通用しないのだったか。
ならば確かに、真名の偽装に関してはバレていてもおかしくはない。
最悪の場合、彼女がマザーハーロットであることもバレているかもしれない。
そうなれば詰みだ。おそらく黒赤のどちらの陣営もこちらを滅ぼすために全力を投じるだろう。
彼女の持つ黄金の杯は大聖杯を穢すがために。
「でも」
「ええ、そんなことを気にしても仕方がないわ」
言いたいことは理解されてしまっている。
もうすでに起きた出来事、彼女の持つ力ならば改竄は可能なのだろうが、セイバーに殺された時ですらそれを行わなかった彼女がサーヴァントになったからといって急に行うとは思わない。
ならば必要となるのはこれからのことについてであり、だが今日はそういうことを行う予定ではない。
そろそろ、赤の陣営が空中庭園で攻め込んでくることはわかりきっている。
そうなれば必ずしも彼女の真名がバレないとは限らないことも、それに伴って今の時間が最後の休息となるかもしれないということも。
だから、今日の時間はデートに使われることになる、らしい。

「そういえば、今日みたいに何をするのか全く決めることなく真幌と出かけるのは初めてかしら？」
「ああ、そうだな。そもそも一緒に出かけること自体がそこまでなかったから。こうしてだらだらとするなんて初めてなんじゃないか？」
無論、一日を一切の予定もなく時間を潰すなんてことはそう許されたことではない。

今日に関しても、一応は〝ピクニック〟という名目である。
いつものフリルドレスに身を包んだ、いつも通りのビーストのはずなのだが、どことなくいつもよりも人間味があるように感じるためか、これまでの幻想的なそれとは違う、ただの美しい少女然とした姿に声をかける命知らずも結構いたりする。
そういう連中に対しては彼女が何かをしでかすよりも先に暗示を使用することでどこか別のところに向かわせる。
これが例えば彼女の理想の王子様であれば、ただ共に歩くだけで敵わないと思わせることができるのだろうが、俺にそこまで求められても困る。
それでも一応の満足はしてくれるようなので、この調子で進んでいけばいいのだろうが、それも叶わないようだ。
サーヴァントの気配を感じた。
もしかしたらライダーあたりが街中に出ているのかもしれない。
だが、赤のサーヴァントがそこにいるかもしれない。
そしてその可能性の中でも決して低くはないだろうサーヴァントが一騎存在することを俺は知っている。
その相手に邂逅(遇見)しに行くかどうかと尋ねれば、それはそれで面白いんじゃないかとビーストは言葉にする。
……確かに、相手が赤のセイバーだった場合、獅子劫さんがいれば魔術協会の中で俺はどういう立ち位置になっているのかを聞いてみたくはある。
負けるつもりは毛頭ないが、それでも全部が終わった後に戻る場所があるのかどうかということを魔術協会側から聞くことができるチャンスというのは手が出るほど欲しい。
終わった後に帰ったら、自分も普通に敵だと思われて攻撃される可能性だってあるのだから。
ビーストの許可も得られたことなのでそちらに向かってみれば、思った通りの姿があった。
思わず獅子を幻視するほどの気品ある黄金の髪を後ろでまとめた、赤いジャケットを纏った少女。

そしてそれに手を焼いているのだろう、まるで親が子供に向けるような視線を向けている、どこからどう見てもヤのつく自営業にしか見えない男のコンビ。
「あ？　……おい、マスター気をつけろ。こいつ、サーヴァントだ」
「マジか……ん？　おい、お前もしかして坂月真幌じゃないのか？　エルメロイ教室の」
「ええ、そうですよ獅子劫さん」
その言葉に獅子劫界離が朗らかに笑う。
どう考えても似合っていない。
この強面で一体何人の人間を心停止に追い込んだのだろうか。
魔術も複合すればそれぐらいは簡単にできそうな顔だと思った。
「とりあえず、お話ならどこか別のお店でするとしましょう？」
そんな、どこか睨み合いのような状況に終止符を打ったのはビースト。
こういう場合彼女の存在はありがたい。
喧嘩っ早いセイバー、強面の死霊魔術師（ネクロマンサー）、ついでに俺。
まともに話が進むとは思えないので、こういう普通の少女然とした彼女の存在は。

入ったのはどこかのお店。
オープンテラス形式のカフェだ。
このトゥリファスを探せば結構な頻度で見つけることができるタイプのところであり、だからこそこの四人が一堂に会するこの珍事は周囲の注目を集めていると言わざるを得なかった。
「それで、何を聞きたいんですか？」
「いや、エルメロイⅡ世からはお前を連れ帰ってこいっていう依頼を受けてるんだわ。っていうわけで聖杯戦争から脱落してくんねーか？」
「あー、俺もやめられるならそれ以上のことはないんですけど……」
とりあえず、今の俺は予想通り『ユグドミレニアに潜入していた魔

術師』という立場にあるらしい。
きっとエルメロイⅡ世はユグドミレニアの離反に先立って行動を起こした優秀な講師なのだという見られ方を上位の面々からはされているのだろう。
無論、ユグドミレニアの諜報員が時計塔にいることを考えれば、一定以上の立場にある人物以外は知らないことだろうが。
「なんだ、戻れない理由でもあるのか？」
「ええ、まあ……」
まず、時計塔の中にいるであろうユグドミレニアの諜報員が消えるかユグドミレニアが敗北しないことにはユグドミレニアの諜報員たちに命を狙われる生活がスタートすることになる。
そのことを説明すればなるほどと納得してもらえる。
そちらで受け入れる用意をしているとはいえ、彼らの手が未だ及んでいない範囲でこちらの命の危険があるのならそう簡単に向かうことはできない。
「それともう一つ……」
横に座るビーストに視線を向ける。
彼女を令呪で自害させることはほとんど不可能に近い。
今の、俺が獅子劫（赤のマスター）と仲良くお喋りをしているという状況を彼女が隠蔽し、その上でなおモードレッドの剣が届くよりも先に彼女は転移をすることができる。
俺の記憶が正しければ、彼女はサーヴァント反応に近づくと決めた時点で影の中に汚泥のサーヴァントを一騎用意している。
「やりたいこともあるんで」
彼女が非人間から〝妥協〟を覚えたことで人間に近づいた。
今この召喚をされている時だけが、沙条愛歌という人物を人間にしてあげられるのではないか、とそんな傲慢な考えも抱いてしまったのだ。
死にたくない、という気持ちだけだったのに、彼女の過去を見て恐怖を覚えるのと同時に〝あんなに思っていたのに振られることすらもなく刺し殺された〟という憐憫も覚えてしまった。

別に俺が理想の王子様になる必要はない。
ただ、彼女が妥協を覚えて〝理想の王子様を必ずしも追い求める必要はない〟と思うようになってくれたら、それ以上に望むことは何もない。
そこまでいけば、俺からもきっと目を離してくれるだろうから、その頃にはきっと俺も逃げられるようになっている。
やりたいことというのは、大きな目的で言ってしまえば〝沙条愛歌という少女から坂月真幌への興味を失わせる〟こと。
それに成功してしまえばきっと、俺は獅子劫に保護される形で時計塔に戻ることができるようになる。
問題は、興味を失ったタイミングで殺されないかということだけで。
その辺り、慎重にならざるを得ないのだが。

第十四話

ユグドミレニアは魔術協会の陣営、すなわち赤の陣営と呼ばれるそれが一体どこから攻め込んでくるのか、戦術を組み立てる上でそれをどうしても考えざるを得なかった。

トゥリファスを抜けて攻め込んでくる、以前のバーサーカーのようにイデアル森林を越えてくる。

現代の魔術師では不可能に近いが相手にサーヴァントがいることから飛行魔術を使用してくる可能性もそう低くはない。

そして、獅子劫界離というフリーランスの魔術師は銃器を使用していたために機械についても詳しいのだろう。

そのことを考えれば魔術協会という後ろ盾がある赤の陣営が魔術的な加工を施した戦闘機や飛行機を用意して攻め込むという、空からの襲撃も予想しないわけにはいかなかった。

だがそれでも、領土ごと攻め込んでくるとはさすがに予想外のルートだった。

ビーストの転移魔術によって連れてこられた真幌、そして連れてきたビーストだけはそれに対して驚きを見せてはいなかったがそのことに気がつく余裕などない。

「我が領土に醜悪な要塞で乗り込んできた挙句、あのような汚らわしい骸骨兵を撒き散らすとはな」

外に出ている命知らずなマスターはすでにいない。

いるのはサーヴァントだけ。

そして、神代のサーヴァントであったとしても感嘆の息を漏らすほどの殺意を、全て不愉快さという形に変えて表現するヴラド三世。

ここルーマニアは彼の領土であり、そこに侵入したという時点で赤の陣営は敵であり、侵略者であり、彼にとってはオスマントルコにも匹敵する蛮族。

英霊としてのそれではない、ヴラド三世としての『鏖殺せねばならない』という義務感が満ちてくる。

彼が周囲を見渡す。

その場に、この陣営のサーヴァントが集結する。
魔力で編まれた肉体が城壁の上に顕現する。
黒のバーサーカー（フランケンシュタイン）、黒のキャスター（アヴィケブロン）、黒のセイバー（ジークフリート）、黒のアーチャー（ローン）、黒のライダー（アストルフォ）、そして彼らを束ねる黒のランサー（ヴラド三世）。
それを、少し離れたところから黒のビースト（マザーハーロット）が眺めていた。
黒のランサーが各々に指示を出していく。
「アーチャー、お前はライダーとともにホムンクルスたちの指揮をとれ」
「ラジャー！」
「了解しました、ただし赤のライダーが出てきた場合には私でなくば抑えはできませんが……」
「構わぬ。指揮は最初の方だけでいい。どうせ混戦になるのだ。使い潰されるだけになるが、さすがにあの骸骨兵どもを城塞に近づけさせるわけにはいかんからな」
ライダーの屈託のない笑顔は別に何も考えていないというわけではない。
彼とてシャルルマーニュ十二勇士の一人、その程度の指揮は問題ないだろうとアーチャーは頷く。
どうせ、途中からはサーヴァント同士の戦場にしかならないのだ。
「それからキャスター、お前はここで待機だ。赤のバーサーカーの枷を解くタイミングはお前に任せる」
キャスターはゴーレムの制御以上に気をつけないといけないのがバーサーカーの制御だ。
いいや、制御なんてできるような相手ではない。
バーサーカーの代理マスターであるアヴィケブロンだが、このバーサーカーは自らの上位者に対しての反逆に思考を固定されているが故のバーサーカー。
今のアヴィケブロンとの繋がりはギブアンドテイクによるもので、実際には制御するようなものではないがために今はどうにかなっているが、彼がもしも命令を下すようなことがあればそれこそこちらに反逆を行なってアヴィケブロンが消滅、それに伴う形でバーサーカー

の消滅とてあり得るのだ。
「了解した。ああ、それとランサー。王たる君がまさか徒歩(かち)で行くわけにもいくまい。馬を用意させた」
「ほう」
その言葉に興味深げな視線を向けたランサー。
王の視線を一身に受けたキャスターは平時の通り。
「無論、造り物(ゴーレム)だが」
「大いに結構。ただの馬ではこの戦いについてくることなどできはしないからな」
キャスターが連れてきたのは宣言通り、彼の作った巨大な銅鉄馬(ゴーレム)。
ゴーレム作りによって名を残した彼に相応しい、この戦場でもついて行くことだけであれば不可能ではないと思える代物。
鉄と青銅が組み合わされ斑模様となったその馬は紅玉(ルビー)と蒼玉(サファイア)の瞳を持ち、怪しい輝きを湛えながらランサーを見つめている。
「大いに結構」
馬の良し悪しがわかるのか、彼はそのゴーレムの馬に対しても満足そうに頷くとランサーは馬に飛び乗る。
次に彼が視線を向けたのは黒の陣営の中でも双翼を担うと言って過言ではない、黒のセイバー。
「セイバー。赤のランサーは君に任せよう。あれほどの英霊を止めるとなると他の英霊では厳しいだろうからな」
頷くセイバーの相手たる赤のランサーは、マスターの命を破ってまで言葉を交わした相手である。
彼を他の誰かに譲るつもりはなく、されど無断で戦うのと王の許可を得られた状態で戦うのではまるで違う。
生前、そして死後、これまでのジークフリートが認識する限りでは『悪竜の血鎧(アーマー・オブ・ファブニール)』に通常攻撃で傷をつけたのはあの相手だけだ。
彼との再戦は、セイバーにとって望むべくもない。
「バーサーカー、お前は自由だ。本能の赴くままに果てるまで戦い、狂い踊るがいい」
「ウ……ウウウウイ……」

バーサーカーは一度だけ軽く頷く。
城壁の縁に両手を置き、今にも飛び出していきそうだ。
「あら、私はどうすればいいのかしら王様？」
「アサシンか……貴様は……」
ランサーが不快げな顔。
アサシンの戦い方が英霊の誇りを著しく損なうものであるために、彼は未だに彼女のことを認めてはいない。
だがこの状況でマスターの暗殺など不可能であることはわかりきっている。
どう考えてもあの中にいるだろうマスターを暗殺するのは、彼女一人でできるようなことではない。
何せ、相手の宝具なのだから、それぐらいの仕掛けがあるとは思っておいたほうがいいに決まっている。
「貴様は、あの英霊兵を生み出せ。それぐらいしかできることはないだろう」
「魔術の支援はいらないのかしら？」
「貴様よりも貴様の生み出した意思なき英霊たちの方が信頼できる」
酷い物言いではあるが、ビーストはまるで堪えていないかのように微笑みを絶やさない。
そんな彼女から視線を逸らして、ランサーはこの場に集ったサーヴァントたちをぐるりと見渡した。
「さて、諸君。敵は六騎のサーヴァント。こちらには七騎のサーヴァントと赤のバーサーカーが手に入ったが、あれはただの使い捨てる兵器でしかない。よって数に数えることなど不可能。兵数は一騎だけこちらが上回っているとはいえ難敵であることに変わりはない。赤のランサーはセイバーと互角に戦い、赤のライダーはそのセイバーの攻撃に傷一つつかなかった。未だ姿を見せぬアサシンやキャスターも、相手が魔術協会（強大な権力）であることを考えれば恐るべき存在がその座についていることは間違い無いだろう」
この状況だけ語れば互角に近いと言えるだろう。
ビーストが英霊を呼べることを考えれば、もしかしたらこちらの方

が有利と言えるかもしれない。
だが、だからと言って油断することなどあり得るはずがない。
なぜなら、彼らは知っているから。
「さて、ここまで聞いたとしても油断や慢心などをする愚か者はいるはずはないだろう」
そう、いるわけがない。
全員がその言葉を疑っていない。
「この程度の絶望、この程度の戦力差、喰らい尽くしてきたからこその英雄よ！　我らが一騎当千であろうと奴らもまた一騎当千！　所詮は蛮族と侮ることは許されぬ！　我らに許されるのは勝利の栄光のみよ！」
ランサーはヴラド三世。
幾度も幾度も迫り来るオスマントルコの兵から国土を守りきった英雄。
そんな彼が、圧倒的有利、もはや敗北の目など見えないと言っても過言ではない状況だからと言って油断するなどあり得ない。
なぜなら彼はその状況をひっくり返して勝利をもぎ取ったからの英霊であり、そして相手の戦力も全てが英霊。
油断などあり得るはずもない。
「あれは蛮族だ。我が領土を穢し、傲岸不遜に下劣に高笑いする死ぬしかない愚者どもだ。恐怖という知識が欠けている彼奴らは、徹底的に躾け直してやらねばならぬ」
ランサーの言葉は過激だが、言いたいことは実にわかりやすい。
生かして帰すな。
彼の言いたいことは徹頭徹尾それだけであり、そしてそれはこの聖杯大戦に勝ち抜くことが目的である彼らにとっても望むところである。
「では、先陣を切らせてもらおう」
ランサーは騎乗スキルを持たないが故に、生前に培った馬術だけで馬を操り、城塞から草原へと馬とともに飛び降りた。
城壁と切り立った崖で高度は百メートル以上あるのだが、アヴィケ

ブロンの作り出した銅鉄馬はその程度の高さでは破損などするはずもない。
馬を操りゆっくりと草原を進む彼は、この状況に生前とのことを照らし合わせる。
此度の敵はたったの六騎、されど生前のオスマントルコ軍十五万をはるかに超える戦力。
されどこちらも負けてはいない。
黒の陣営も己を除いて六騎、されどこの六騎はその全てが一騎当千の将、一人いるだけでも敗色濃厚の戦場を勝利に導くことができる存在だ。
ライダーとアーチャーが指揮するゴーレムとホムンクルスが集結し、生前から様々な将を率いてきたランサーをして見事と賛辞するほかないほど速やかに、そして整然と列を形成する。
その軍勢の脇には封じられた赤のバーサーカーとそれを引き連れたキャスターが。
敵味方の区別がつく程度のギリギリの理性のみを有しているバーサーカーは、ランサーが様子を見る限りでは解き放てば一直線に敵の陣営に向かっていくだろう。
セイバーは、そんな彼らの前を歩いている。
背後のホムンクルスが蹴散らされる間に彼が振り向くことによってジークフリート最大の弱点である背中を奇襲によって狙われるという事態を避けるためだ。
前面からの真っ向勝負に関しては前を歩くランサーが全て弾くだろう。
そしてそれらから離れているのが黒の陣営のバーサーカー。
彼女は理性ある狂戦士のため、おそらく味方を巻き込むことはないだろうが、それでも彼女の宝具のことを考えれば周囲に展開した陣は間違いなく壊滅する。
そのため陣を敷いて先に進む他の面々から一人だけ離れていた。
「ふふふ……ここでランサーのおじさまが死んでくれるなら楽でいいのだけれど」

そして、そもそも城壁の上から一切動いていない唯一の人物。
黄金の杯から泥を零してはシャドウサーヴァントを生み出すビーストは、すでに後方支援のためのサーヴァント（アーチャー）を呼び出している。
さすがにそちらにまで視線を向けるつもりはないランサーだが、背後に増えたであろうサーヴァントらしき気配を感じて、仕事をしていることだけは理解していた。
「ふむ、どうするつもりだ？」
軍を前面に進めたランサーは、相手の軍を眺めて訝しげに呟く。
そこに見えた軍には、一切サーヴァントの姿が見えなかったからだ。
竜牙兵だけで構成された軍は、どうあがいてもサーヴァントに対しての勝ち目などない。
彼が向けた視線の先、空中に浮かぶ逆しまの城、赤のアサシンであるセミラミスの宝具『虚栄の空中庭園（ハンギング・ガーデンズ・オブ・バビロン）』は滞空してこれ以上の進行を見せる気配はない。
その声に応えるわけではないだろうが戦端は開かれる。
赤のアーチャーが、最初の一矢（ファーストコンタクト）となる矢を空に向けて射ち放ったことによって。

第十五話

赤のアーチャー、アタランテは眼下に広がる敵軍の威容にも焦ることはなく、そもそもそちらを見てすらいなかった。
愛用の天穹の弓（タウロポロス）に番えられた矢は二つ。
狙うのは朧な月光に照らされる夜の空。
晩秋独特の冷え切って乾いた風が、彼女の持つ獅子の耳をふわりと撫でたことで彼女は悟った。
頃合いだ。
「我が弓と矢を以て太陽神（アポロン）と月女神（アルテミス）の加護を願い奉る」
矢が妖しく輝き出す。
通常の弓兵（アーチャー）は弓、あるいは矢が宝具であることが多い。
だが、彼女にはそれは当てはまらない。
その二つはあくまでこの宝具を放つ上では触媒に過ぎない。
彼女の宝具とは、弓を引いて矢を放つという術理そのもの。
「この災厄を捧がん――『訴状の矢文（ポイボス・カタストロフェ）』！」
空へと放たれた二本の矢は輝く軌跡を残しながら空の彼方へと消えていく。
彼女が加護を願った太陽神アポロンと月女神アルテミスは、そのどちらもが狩りに縁深い神である。
アポロンは弓矢、アルテミスは狩猟に縁が深く、そのどちらもがアタランテという英霊を語る上で外すことができない概念である。
無論、神々がただ人間を救うはずがない。
ただ加護を望んだだけで与えるはずがない。
代償が必要なのだ。
求めた加護に見合う代償を。
それはつまり、彼女が宝具の前口上として語った『災厄』であり、それは同時に彼女にとっては加護でもある。
求められた災厄とは――敵の命。
夜空に満ちた淡い光、それと同時に雨のように細やかな風を切る音が聴覚に優れたサーヴァントたちの耳に届く。

ただしこれは、恵みの雨のような生易しいものでは断じてない。
神々が求める災厄であるがゆえに、今から降り注ぐのは生贄を求める神々の荒ぶり。
災厄（カタストロフ）という名前の豪雨が、戦場にある命を奪いにいく。
数え切れないほどの光の矢が、戦場に降り注ぐ。
ホムンクルスたちは次々と矢に刺されて倒れていき、頑丈なはずのゴーレムたちであっても無数の矢の前には針鼠となり砕け散る未来しか残っていない。
攻撃の範囲が戦場全域に広がったために矢の密度は下がり、それではさすがにサーヴァントたちは傷つけられない。
サーヴァントたちはそれぞれ躱し、受け止め、あるいは弾き返していくために耐え切ることはなかなかに容易なことであり、もともとホムンクルスやゴーレムにはそこまで期待されていないことも合わせて、そこまでの痛手とは決して言えなかった。
戦場に咲いた紅蓮の花、己が生み出したその陰惨たる光景を冷徹極まる表情で見つめながら、アーチャーは振り返って告げる。
「これで露払いは終わったぞ。交代だ、ライダー」
「応！」
喜色満面の笑みを浮かべた赤のライダーがその言葉に応答して、走り出した彼はそのまま空中庭園から飛び出した。
戦闘の開始よりも先に先制攻撃はアーチャーが、先陣を切るのはライダーが、そう決まっていたために交代も速やかに。
彼が口笛を吹けば、空を引き裂いて強壮な軍馬三頭が引く戦車（チャリオット）が舞い降りて、落下を続けるライダーのことを掬い上げる。
御者台にて手綱を握り鞭を一つ、筋骨隆々たる馬たちの嘶きが戦場全域に響き渡った。
「さあ、開戦だ！〝赤〟のライダー、いざ先陣を切らせて戴こう！」
言うなり、ライダーは空を舞う戦車を地上に向けて急降下。
ホムンクルスとゴーレムがそんな彼の前に立ちはだかる。
戦闘に特化したホムンクルス、重さ一トンを超える史上最高のゴーレム使いが生み出した珠玉の逸品、そのどちらもが海神（ポセイドン）から

赤のライダー（アキレウス）が賜った不死の神馬が前には一切の価値を持つことなく、あっさりと轢殺されていく。
「さあ、〝黒〟のサーヴァント！　我らにその力を見せてみろ！　このライダーの戦車を止められるものならば、止めてみせるがいい！」
ライダーの挑発。
それは彼の戦車に対しての彼の強い信頼から来る。
海神（ポセイドン）から賜った神馬と、それに比肩する名馬。
それはつまり、一頭でも殺すことに成功すれば英雄だと間違いなく言われるような馬である。
さらにそれを操るのは世界中で知らぬ者がいないであろう大英雄アキレウス。
そんな彼を止めるのは、正攻法では間違いなく不可能だ。
故に、黒の陣営は搦め手に出る。
「退け、雑魚が！」
彼の挑発に応じるように戦車の前に出たのは三体のゴーレム。
特別強いと言うわけでもないゴーレムであることはライダーの目から見ても明らかだったために、舌打ちしつつも当たり前のように粉砕という道を選択する。
「さて。それはどうかな、〝赤〟のライダー」
遥か後方から戦場を俯瞰していたゴーレム使いは呟き、ゴーレムの指揮をとる指を滑らかに動かす。
赤のライダーの失策はたった一つ。
敵のゴーレムがただの硬くて強いだけのものだと勘違いしたこと。
激突する瞬間に三体のゴーレムが弾ける。
驚くライダーをよそに、三体のゴーレムはそれぞれ戦車を引く馬の足に絡まって即座に硬質化した。
黒のキャスター（〝黒〟のキャスター）が作るゴーレムによる拘束具は赤のバーサーカーの動きをも縫いとめることが可能。
いくらライダーの馬が名馬といえど、その拘束をなかったものであるかのように進撃することは不可能だった。
「ぐっ……」

赤のライダーの戦車がようやく停止した。
その隙を逃してなるものか、とライダーに向けて殺到するのはホムンクルスたち。
手に持った斧槍（ハルバード）を振り上げ一斉に跳躍したその姿は、まさしく連携のとれた軍隊のようで。
ライダーというクラスが宝具の多彩さを売りにしていて、サーヴァント本体の能力値というのはそこまで高くないのが基本である。
そのことを考えれば乗騎を潰された状態であるライダーも絶体絶命かと思われたのだが。
「しゃらくせぇ！」
吠えたライダーは腰の剣を引き抜き、片手に剣を、片手に槍を持って跳躍。
一瞬の交錯で彼に襲いかかったホムンクルスの全てが、例外などなく死を迎えていた。
彼は大英雄、それは戦車によるものだけではなく、彼自身がランサーのクラスで呼ばれたとしてもおかしくはないほどの武技を誇るが故に。
この程度、苦境と呼ぶことすらもおこがましい。
そして、彼に襲いかかったホムンクルスたちの血が雨となって戦場に降り注ぐ中、死体が崩れ落ちるよりも先にその隙間をくぐり抜けるように彼の首筋目掛けて矢が襲いかかった。
「……ッ!!」
反応が遅れたとはいえ、ライダーは生来の俊敏さで剣を以て矢を弾く。
とはいえ完全ではなかったようで、打ち落すまでにはいたらず軌道を変えるにとどまった矢は彼の首筋を掠めてその身体から血を表出させる。
今の弓術、黒の側に彼を傷つけられるサーヴァントは彼の知る限りではアーチャーしか存在しない。
己と戦える猛者がいることにライダーの胸には歓喜が湧き上がり、威風堂々と御者台に立って叫ぶ。

「〝黒〟のアーチャーは何処や！　預けた勝負、取り戻しに来たぞ！
今宵は心ゆくまで殺し合おう！」
返礼の代わりと放たれた矢は、されど視界を塞ぐものがない故にライダーにとって打ち落とすことは造作もない。
むしろそれはアーチャーの位置を教えることにしかならない。
森の中より放たれる矢は、ライダーの強みたる機動力を打ち消すための領域。
彼はそれに応えるように、戦車を霊体化させてから彼の領域に向けて走り出す。
無論、彼にはゴーレムの拘束を砕き、戦場をその戦車にて踏破し、敵の戦列を蹂躙するという選択肢も残されている。
いいや、むしろ〝先陣を切る〟、〝一番槍〟、そういった彼の役割を考えれば後続の道を生み出すことになるそちらを選ぶことこそが基本と呼べる。
だが、それはあくまでも『基本』であって『絶対』ではない。
この案を採用するということは弓兵に対して背を向けるということであり、眼前にて自らを誘う敵手から逃げ出すのと同意義であり、そしてそれを赤のライダーは決して許すことはできない。
何故ならば彼は『英雄らしく振る舞うこと』を己に対して課しているから。
偉大な英雄たる父と女神たる母、そして永遠の友の名誉のためにも彼は逃げ出すことなど己に対して絶対に許さない。
英雄らしく振る舞い、鮮烈に生きて、そして死ぬ。
それこそがライダーの本懐、ライダーの人生、彼の全てであるが故にその疾走は曇りなく。
その先に、己の師が待っていることなど知らないままに。

黒のランサー（ヴラド三世）は無手であった。
その手には彼が据えられたクラスの象徴である槍など持っていない。

そもそも、彼には剣も弓も槍も乗騎にも縁がない。暗殺は領主という立場を考えればされる側であっただろうし、魔術に至ってはキリスト教を信じる彼にとって忌避すべきものだろう。
狂ったという逸話も特にあるわけではない彼は、オスマントルコを撃退したという実績によるものだけで『座』に招かれた英霊である。
そんな彼が槍兵（ランサー）として召喚された理由、それは彼が行なった歴史的事実を鑑みればこれ以外にふさわしいクラスはないからである。
その理由が、今まさに顕現しようとしていた。
無手のまま銅鉄馬（ゴーレム）を走らせ続けるランサーに総勢五百以上の竜牙兵が群がろうとしている。
無論、サーヴァントである彼にとってこの程度の敵は一山いくらの雑兵など全く問題ではないのだが、それでも真っ只中に真っ向から飛び込むのはただの無謀でしかない。
そんなことができる者がいるのなら、ただの狂った戦士か、あるいは何かの策があるのか。
黒のランサーは、後者だった。
「さあ」
彼が両手を広げる。
ランサーの指示を受けて大地を蹴った銅鉄馬は高々と空を舞い、地上にある雑兵を妖しい輝きを讃えたその瞳で睨め付けていた。
「我が国土を踏み荒らす蛮族たちよ！　懲罰の時だ！　慈悲と憤怒は灼熱の杭となって、貴様たちを刺し貫く！　そしてこの杭の群れに限度はなく、真実無限であると絶望し己の血で喉を潤すがいい！」
彼の肉体から、魔術師が一生をかけても届くかどうかというほどの魔力が吹き上がる。
「『極刑王（カズィクル・ベイ）』！」
微かに大地が揺れる。
竜牙兵たちが反射的に下を向けば、周囲一帯に細長い杭が召喚される。
それらは天を衝くように伸びて彼らを次々と貫いていく。
草原が樹林へと変貌する。

細長い杭が幹であり、竜牙兵を構成していた骨こそが枝と葉だ。
宝具発動より三秒、五百いた竜牙兵はその全てが命を散らしていた。
だが、ランサーはそれらを無視して己が領土に踏み入った空中庭園に向けて銅鉄馬を走らせ続ける。
「……来たか」
無論、その進軍を黙って許すような愚鈍がいるはずもなく、空中庭園から迎撃のために出陣した者もいる。
猛烈なスピードでランサーに向けて迫る一つの影、それはすなわちサーヴァント。
戦の開始を告げた〝赤〟のアーチャーがこちらに向けて迫ってくることを目視したランサーは、彼女に狙いを定めて杭を一斉召喚。
かつての史実の再現にはまるで及ばない程度の数の死骸の中に、見目麗しき狩人をも含めようと杭の樹林が樹立する。
どこから出現するのかまるで見当がつかない杭に、馬よりもなお速く風のように疾走を続けていたアーチャーの速度が鈍る。
それでも、〝赤〟のアーチャーは杭同士の隙間をするりと抜けては確かに前進し、彼女は愛用の弓より矢を放つ。
放たれた矢は、ランサーを貫くよりも先に彼のことを守るように出現した杭によって防がれる。
どれほどの力ならばこのランサーの杭を破壊できるのかもわからず、そしてこの戦場において全力で弦を引き絞る時間など与えられるはずもなく、結果として次々と放つ矢は多少の威力の変動はあれどランサーの杭を突き破るには至らない。
「ちと、面倒だな……」
アーチャーの呟きも宜なるかな。
この杭が宝具であることは間違いがない。
赤の陣営で唯一姿を見せているマスター、シロウ・コトミネの言葉の通りにこのランサーはヴラド三世なのだろう。
彼の宝具として杭が選ばれるのも、聖杯より知識を与えられている彼女からすれば納得である。

だが、あまりにもその数は異常だった。
五百を超える竜牙兵を貫きながらなお出現する無数の杭。
破壊力も速度もそこまでのものではないが、彼が展開できる数だけは神代のサーヴァントをして脅威と言わざるを得ない。
その数、最大同時展開数は二万。
彼が行なった二万のオスマントルコ兵の串刺し刑、その伝説上の出来事の再現であるがために。
ストックが二万ではない、同時に展開できるのが二万であるだけ。
故に、アーチャーの攻撃を防いだ杭は消え、アーチャーの肉体を貫くための杭が出現するということを繰り返す。
もはやこの戦いはどちらが強いかではなく、どちらが先にミスをするのかということになって来ている。
アーチャーが杭を破壊するだけの威力の矢を放つ時間はなく、ランサーの杭はアーチャーの肉体を捉えることは能わない。
この場にアーチャーを守る前衛がいれば話は別だったのだろうが、現実は変わらない。
その現実の中でいかにして勝利をもぎ取るか、道理を蹴っ飛ばして不可能を可能にするのが英霊であるがために、彼らの中に諦めという感情が生まれることはない。

第十六話

〝赤〟のランサーは一人、とある場所に向けてその歩を進めていた。

少し離れたところでは同陣営のアーチャーが〝黒〟のランサーを相手にして攻めあぐねている光景が見えるのだが、ランサーも助けに行くわけにはいかなかった。

その理由は至極単純、二重の意味で彼が戦わねばならない相手がいるから。

一つ目は戦略的な観点。

赤の陣営はバーサーカーとセイバーを欠いている。

〝黒〟のランサーはアーチャーが、〝黒〟のアーチャーはライダーが、それぞれ戦っている。

〝黒〟のライダーは赤の陣営のアサシンが相手をするようで、彼女が神代の魔術師と同等の存在であることを考えれば心配する必要など全くなく、〝黒〟のバーサーカーは心赴くままに暴れているらしく今すぐにどこかのサーヴァント同士の戦いに介入するという気配は見えない。

アサシンを騙る獣のサーヴァントに関しては転移を繰り返して戦場を駆けることが可能ゆえにそう簡単に捉えられるものではない。

こちら側のキャスターは戦闘能力など持たないことを考えれば、〝彼〟のことを抑えるのは赤のランサーでなくては務まらない。

そして、これは二つ目の理由にも被るのだが、アーチャーでもダメージを通すことは可能ということはすでにわかっている。

その上でランサーがこちらに来たのは、〝彼〟との再戦をランサー自身が望んでいたから。

故に――

「やはり、貴公が来ると思っていた」

彼は、〝黒〟のセイバーの前に立つ。

「どうやら、此度は誰の邪魔もなくお前と殺し合うことができるようだ」

ランサーの声に微かに混じるのは確かな歓喜。
それに対する返答はない。
代わりに出現したのは、〝黒〟のセイバーが彼に向ける、彼の宝具たる聖剣『幻想大剣(バルムンク)』。
赤のランサーも、その手に神槍を出現させて構えた。
二人の中に奇妙な共感が生まれる。
どちらも、あの晩の初めての戦いのことを思い出している。
〝赤〟のランサーが持つのは己の聖剣(神槍)をその身に受けてなお、軽傷で済ませるほどの頑強な悪竜(黄金)の鎧。
〝黒〟のセイバーは己の信念に基づいて戦う不屈の精神の持ち主。
いかなる苦境にあったとしても屈することを知らず、
前回の戦いは時間切れという形で不完全燃焼に終わったが、此度はそのような無残な結末には至らない。
よほどのことがない限りは、彼らの戦いは終わることはない。
今このセイバー(ランサー)はお互いの首を取りに来ている。
そのことだけわかれば十分。
心ゆくまで戦えることに感謝して、彼らは全ての戦場の様子を過去に置き去りにする勢いで己の武勇をぶつけ合うことを選択した。

攻め込まれた側である〝黒〟のマスターたちはそれぞれ、己が最も信頼する〝安全な場所〟にてその戦いの趨勢を見守っていた。
地下室に潜る者もいれば、己の工房に潜る者もいて、工房でゴーレムを作っていたら思いもよらない傑作ができたので外にいる自らの師にそのことを伝えに行った馬鹿者もいたりした。
それでも、外に出た者も含めて全てのマスターが悟っていることはある。
〝サーヴァントを助けに行こう〟という考えは愚かなことでしかない、ということだ。
この戦場に生身で出るということはそれはつまり死んでいるのと同義であるということを、戦端が開かれた瞬間から誰もが理解してい

た。
だから、最初の戦いの時にはサーヴァントを引き連れて戦いに出ていたゴルド・ムジーク・ユグドミレニアも恥辱に身を震わせる――――などということはなく、彼は自室で様々な感情が入り混じった表情で己のサーヴァントの戦いを眺めていた。
彼の手の甲にはマスターであることを示す、元々は三画あったことがわかる、けれど今はすでに一画しか残っていない赤い紋様、令呪。
彼の失策によって一画を失い、それを取り戻すために一画を使用するという最悪の使い方であった。
だが、それを己のサーヴァントは責めることはない。
その事実が、己が喋るなと命じたことすらも忘れて彼の心をざわつかせていたのだった。
他のマスターたちと違って、彼は己のサーヴァントを信じきれていない。
それはこの陣営において唯一彼のみが明確な弱点を持っているからであり、そんな彼に対する不信はセイバーに対する〝喋るな〟という命令からも読み取ることができる。
無論、それは真名を悟らせないという一点からすれば有効的な戦略とは言えるのだが、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアがセイバーに対する不信を失くす機会を失った、とも言えた。
なぜなら、彼らはそれによってコミュニケーションを取ることがなかったから。
だからゴルドは彼のことをただの使い魔としか見ることができず、人格を持たない兵器と同等の扱いしかすることができなかった。
令呪がある、という安心感もあったのかもしれない。
例えば、セイバーがゴルドの命令に逆らうような何かがあったのならば話はまた変わったのかもしれないが、今の所そのようなことは赤のランサーとの初戦においてしか発生していない。
そう、彼が今日、赤のランサーとの戦いの前に喋ったことはゴルドの命令に反したことではない。
令呪を二度使った彼は、そして赤のランサーとの会話を行ったとこ

ろを目撃してしまったこともあって、『彼の心境がわからない』ということが恐ろしくなってしまったのだ。
なぜなら彼は逆らえないわけではないから、彼がどうして自分の命令に従うのか、マスターの変更だって不可能ではない彼が敵意を隠して自分に近づいてきて令呪を奪えばそれで全て済むから、彼が何を望んでいるのかを知る必要があった。
だから、会話を許可した。
しかし、ゴルドを相手にどれだけ弁舌したところで信じるはずがない。
この男はあまりにも肥大したプライドがあって、自らの考えこそが絶対なのだと考えてもおかしくはないような類の人間だから。
あまりにも大きすぎる失態でもない限りは決して殊勝な姿は見せないだろう。
セイバーにもそれぐらいのことは理解できたので、彼は行動で示すことにした。
彼はゴルドに請い願われたからこそ召喚に応じ、彼が求める勝利をもたらすのだということを。
「ええい、負ければ承知はせんぞ……！」
ここでジークフリートが敗北するということは、つまり彼に目をつけたゴルドが愚かであったということになる。
そのようなことを断じて認めるわけにはいかないゴルドは、セイバーに対して契約の経路（パス）を通じて治療魔術を行っている。
私にここまでさせたのだ、という思いと、これだけしかできんとは、という思い。
彼の中に湧き出る二つの思いが、余計に彼の身を締め付けていた。

そして、そんな彼とはまた別種の心配をする者もいた。
「……愛歌のやつ、ここでビーストだってバレたりしないだろうな」
真幌が呟いたのはピラミッドの中。
ビーストが召喚したオジマンディアスのピラミッドの中に収納されたのだ。

彼を殺すことは黒化状態のオジマンディアスには許されておらず、排出に関しても『赤のバーサーカーが消滅した後』と言う条件をつけられているために、彼はある意味一番安全な場所にいるとも言える。
そのことは彼も伝えられていたので、心配するのはビーストがビーストだとバレないのか、と言うこと。
ルーラーもこの場に向かっていることを考えれば、最大で十五騎のサーヴァントを同時に相手取ることになり、ついでに彼もユグドミレニアの本拠地で彼らと争わないといけなくなる。
「というかここで待っててもやることないんだよなぁ……」
彼女が敗北する可能性なんてものは一切考えていない。
カルナを相手にして生き残った彼女だから、そう簡単には死なないだろうという信頼もある。
ただ同時に、できることならこの戦いで死んでいてほしい、とも思っている。
そもそも彼女はこの戦場で何をするつもりなのだろうか、なんてことにまで考えが及ぶ。
他のサーヴァント達は指標があるためなんとなくやっていることはわかりやすいのだが、彼女のそれは『理想の王子様を作る』という漠然としたもののために、戦いに関しての動きがまるで予想できないのだ。

では、その彼女が今何をしているのかといえば。
「初めまして、〝赤〟のキャスター」
戦場にて、ビーストはバーサーカーと接触したシロウ・コトミネ神父とともにいた赤の陣営のキャスターを転移魔術によって奪い去り、二人きりの密会とでもいうべき、固有結界に近い大魔術を使用して外の戦場からは隔離していた。
戦場の方には数時間で消え去る程度のシャドウアーチャーを残してあるので、サボっているとは思われないだろう、という考えのもとだった。
「おお！　もしやあなたがこちらのランサーが言っていた獣の冠を抱

く者ですかな？」
「ええ、サーヴァント、ビースト。ちょっと厄介だからあなたにはサクッと死んでもらうわ」
この空間は外界からは隔離されている。
彼のマスターであるシロウ・コトミネに対して彼女がビーストのクラスであることを伝えようにも伝えることなど不可能。
今、外では黒のライダーが空中庭園に撃ち落とされ、赤のバーサーカーが出撃を開始している。
さらには赤のセイバーがマスターを引き連れてこの戦場にド派手に割り込んできた、というまさしく混戦模様なのだがそんなことはここにいる二人には関係ない。
「ううむ……吾輩、殺されてしまうのですか。それはそれで仕方ないことだとは思いますが……」
「あら、一つぐらいならお願いを聞いてあげてもいいわよ？」
彼が劇作家であることはビーストも知っている。
彼の描く自分の恋物語というものに興味がないわけではない。
だからお願いとやらを聞くことを選んだが、それでも彼はこの場で殺す。
興味よりもカルナの一言、『理想と現実で軋轢を覚えている』というあの言葉が頭から離れないために、彼女は彼を殺すことを選んだ。
「あなたが一体どのような願いを抱いて聖杯大戦に参加したのか！人類愛から転じて人類を滅ぼすあなたが、一体どのような愛を以てこの戦いに参加したのか！　吾輩、ランサーからあなたのことを聞いてからどうしようもなくそれが聞きたかったのですよ！」
なんだ、そんなことか、とビーストは嘆息した。
結局のところ彼は知的好奇心が旺盛なだけなのだろう、と彼女は判断した。
だから語ることにはためらいもなかった。
「私は、私の理想の王子様を作るためにこの戦争に参加したのよ」
だから、彼女が語った瞬間に好奇心旺盛なシェイクスピアの瞳が一瞬で好奇心を失ったことは、あまりにも理解不能だった。

期待外れだった、というような彼の表情。
彼女が自分から聞いておいたくせに、と影から溢れ出た触手（愛歌ちゃん虐殺ウイップ）にて殺しにかかったところで、シェイクスピアの口からなるほど、と言葉が漏れて一度その影の動きを止めた。
「何がわかったのかしら？」
「あなたは別に、理想の王子様などとやらを求めてはいないこと程度は」
苛立ちを隠しきれないビースト。
その言葉は彼女のことを全否定している。
それでも、その答えに至った理由ぐらいは聞いてやろう、と促す。
「あなたは理想の王子様を作りたい。『作る』というのなら、別に今のマスターをそれに仕立て上げる形でも問題ないのでは？」
「ええ、というか彼が理想の王子様になれるから、私はマスターとして選んだわけだし」
「ではなぜ、あなたは自らの持つ能力を使ってとっとと改造してしまわないのです？」
彼女の能力を完全に知っているわけがない。
それでも、ランサーの言葉がある。
彼女が獣であることも見抜いた彼には、彼女が全能であることもなんとなくではあるが察していた。
そして同時に、ただの恋に焦がれる少女であることも。
後者に関しては『人類悪なのだからそれはないだろう』とシェイクスピアは思ったから尋ねただけのことであり、全能であるということに関してはそこまで疑っていない。
「あなたが彼に対してどのような感情を抱いているのかは知りませんとも。ですがその感情は『理想の王子様』が欲しいという感情よりも上なのですか？」
「そんなはずがないでしょう」
「ええ！　ええ！　その通り！　あなたが人類悪と言うのなら！　人類全てを滅ぼしかねない愛ならば！　その愛がマスター個人に向ける感情よりも小さいはずがない！」

では、あなたは一体なぜ彼を暗示などを始めとした諸々の手段を使わずに、彼が理想の王子様になる瞬間を待ち望んでいるのか。
キャスターはそう語り、宝具を開帳する。
この現界において、最初で最後の宝具の開帳である。
キャスターの宝具、『開演(ファー)の刻は来(ス)たれり(ト・)、万雷(フォ)の喝采(リ)を(オ)』は対象のトラウマをつく場面を顕現して相手の心をへし折る対心宝具。
では、ビーストのトラウマとなる場所はどこかと言われれば。
「……」
不快気に顔を歪めたビーストの視界に映るのは、自分を突き刺す彼女の王子様セイバーの姿。
つまるところ彼女はただの少女であり、理想の王子様に裏切られることが嫌なのだと。
その一点がマスターを未だ改造させられていないと言う現実に繋がっている。
「ええ！　ええ！　ですがあなたはいずれ王子様に殺される！　なぜなら、王子様はあなたの存在を決して許すことができないのだから！」
では、現実にあるマスターで妥協できるのか、と問われれば、それができるのならばそもそもビーストになってなどいない。
最後には必ず殺される(裏切られる)とわかって王子様を求めるか、それとも王子様(理想)を諦めるか。
普通ならば後者を選ぶのだろうが、あまりにも完璧な存在を見てしまった彼女はそう簡単には割り切れない。
それが、カルナの口にした軋轢の正体である。
（ふむ……人類悪と言うからどのような存在なのかと気になったのですが……結局はただの小娘だったわけですか）
もはやシェイクスピアに彼女への興味はない。
そもそもが人類愛から転じたことによって生み出される存在が人類悪だ。
その彼女が誰かに対して愛を抱くことに関しては何もおかしなことではない。

ちょっとスケールが大きいだけで、面白みのクソもないただの恋愛話。
あまりにも大きな期待を抱きすぎていたために肩透かしを食らったような気がして、己のマスターの方がよほど面白いと帰ろうとしたところで。
「は……？」
その一言を残して、半身を消し飛ばされたシェイクスピアは、自らが消滅したと言う認識すらなく消滅した。
彼が最後に見たものは、先ほどまでの笑顔とはまたどこか違う質の笑顔を浮かべたビーストの姿だった。
――あ、吾輩何かやっちゃいましたか？
その思考を言葉にすることはなく、シェイクスピアは聖杯大戦から脱落した。

第十七話

赤のキャスターとビーストが戦い(話し合い)を行なっている間に、当然のことながら戦場は変遷していた。

その変遷はあまりにも大きい。

例えば、ルーラーもこの戦場に参戦したということ。

例えば、赤のセイバーを相手にしていた黒のライダーを助けに入った黒のバーサーカーが宝具の使用と共に消滅したこと。

例えば、赤のバーサーカーが己の魔力を限界まで込めた宝具を使用して消滅したということ。

例えば、それによって半壊したミレニア城塞から大聖杯が奪われたということ。

例えば、戦場がセミラミスの宝具『虚栄の空中庭園(ハンギング・ガーデンズ・オブ・バビロン)』に移行したということ。

例えば、それに伴って黒のランサーが宝具『鮮血の伝承(レジェンド・オブ・ドラキュリア)』を使用させられ、さらにそこにダーニックの行った禁呪も加わったことで、その討伐に黒赤両陣営が力を合わせたこと。

「何が目的なのです。天草四郎時貞」

そして、その最果てにて、赤のマスターだったはずのシロウ・コトミネの正体がかつての第三次聖杯戦争において召喚されたルーラーのサーヴァント、天草四郎時貞であると発覚したこと。

「知れたこと」

彼の目的を彼女たちは知ることになる。

「全人類の救さ……っ!?」

それが、本来の道筋だったならば。

彼の言葉は最後まで口にされることはない。

体内から心臓を抉りだしたのは小さな手。

赤い血によってフリルドレスの袖を穢しながら、少女は謳う。

「お前は……!」

血反吐を吐きそうになりながら、天草四郎は背後を振り向こうとする。

もうすでにその手の持ち主はわかりきっていて、けれど心臓を抜き取られてしまっては如何なサーヴァントと言えど蘇生宝具を持たない限りは死あるのみ。

ゆえに、ジャンヌ・ダルクの叫びを最後に彼のあまりにも長い、六十年にも及ぶ大聖杯を求める旅路は終了するのだった。

「ビースト（人類悪）……マザーハーロット！」

すでに彼女は真名を隠すつもりはない。

あらゆる隠蔽魔術の効果はすでに途切れ、獣の冠をはじめとした彼女が人間でないことを示す全てが現出している。

その言葉にも人間味を失った、彼女のマスターとなった人間が恐れた、東京の聖杯戦争の時の彼女の笑みを浮かべるだけ。

ビーストのサーヴァント、マザーハーロットはただそこにある。

「ええ、そうよ聖女様」

少女が言葉を発したことによって、その場のサーヴァントの全てが理解した。

A■V■■■　B■A■T

人■悪　■■

これはもう、サーヴァントの枠組みを超えている、と。

おそらくはマスターを殺害しようとも、彼女が消滅することはない。

そして、同時に空中庭園が崩れ始める。

天草四郎時貞が死んだことによって、彼と契約していたサーヴァントである赤のアサシン、セミラミスが消滅を開始したのだ。

それによって彼女の宝具である空中庭園もその形を保つことができなくなり、同時に赤のサーヴァントたちは魔力供給を受けられないことにようやく気がついた。

ビーストの存在によって忘れていたその事実を、宝具を使用していたために急激に魔力が消費され消滅したセミラミス、それに伴う現象によって思い出したという方が正しいのだろう。

「なぜ、今なのですか」

けれど、それは彼らのこと。

言ってしまえばマスター殺しとは聖杯戦争における常道でしかない。
それを咎めることなど決してルーラーのサーヴァントがしていいことではないと断じて、ジャンヌ・ダルクは崩れ行く空中庭園にて微笑んだままのビーストに問いかける。
他にもチャンスはあったはずなのになぜ、今になって黒の陣営を裏切るような真似をしたのか、と。
「劇作家様が気づかせてくれたの」
小首を傾げる様は愛らしい。
だが、その身に充溢する力はサーヴァントの規格にすら収まらない。
今この場での戦闘は無意味だと悟り、全員が空中庭園からの脱出を図る。
この場での戦闘では勝ち目がない、そもそもが霊基の規格が『冠位（グランド）』ではない英霊、それが今この場にいる赤の三騎、黒の四騎程度で勝てる程度であればそれが人類悪なんて呼ばれるはずがない。
「ライダー。俺たちを召喚したマスターを頼む」
「ちっ……しようがねえか」
その最中、赤のランサーが同陣営のライダーに頼んだのは己のマスターのこと。
『単独行動』を持たないライダーでは魔力が厳しいのは事実だが、だからと言ってここで彼らを死なせてしまえば、それこそ契約相手がおらず消滅してしまう他ない。
そして合計六人のマスター、その全員を運ぶには黒のライダーのヒポグリフではあまりにも足りない。
「ならば、僕が暫定的にマスターになろう。それならば君の宝具の使用にも耐えられるはずだ」
そして同時に、黒のキャスターもそんな言葉を口にする。
あの人類悪をどうにかしないことには己の悲願も叶わぬと悟り、そしてそのためには赤の陣営の力が必要なのだと悟ったゆえの即決。
人類悪顕現という事態に至って、未だに聖杯大戦を第一としよう英

霊がいるはずもない。
空中庭園からの脱出のために疾走をしながら、ルーラーは黒の陣営と赤の陣営、その両方に対して告げる。
「黒のアーチャー、赤のランサー、現時点で〝黒〟と〝赤〟の対立構造は完全に崩壊したと考えていいでしょう。人類悪の誕生ともなれば、協力態勢を敷いていただくことに否応ないとは思われますが……」
「俺は問題はない……ライダー、アーチャーは？」
「仕方ねえか」
「うむ……」
カルナの即答。
それにライダーとアーチャーも同意をしたことで赤の陣営はその協力態勢を受け入れる。
アーチャーもそれに同意する。
もはやこの状況はどちらが聖杯を取るかではなく、世界の崩壊を如何にして防ぐかという事態にまで陥っている。
「こちらも問題ありません。ダーニックがああいう形で滅んだ以上、次のユグドミレニアの代表は私のマスターになるでしょうし、彼女も現状を知ればその共闘に否を告げることはないと思われます」
拠点とできる場所はすでにミレニア城塞しかない。
それぞれのマスターに対して念話で〝赤の陣営と共闘しないといけないような事態が発生した〟ということだけを告げて、全員がミレニア城塞へと急いだ。
その道中、赤のセイバーとも合流したために彼女にも事情を説明しながら走ることになり、その速度自体は落ちたのだが。

「それで……これは一体……？」
バーサーカーが消滅した後、ミレニア城塞の中に戻ってきた俺はなぜか拘束されていた。
彼の消滅によってオジマンディアスがビーストにかけられた縛りから抜け出てミレニア城塞に戻って来た。

それによってこれからのことを思えば自覚せざるを得ない感情があって、それにちょっと気持ちを馳せているときのことだった。
サーヴァントたちから頼まれたらしく、理由は彼らもわからないとのことだが、あまりにも切羽詰まっていたためにそれに従ったらしい。
黒のアーチャーから習ったパンクラチオンによって抗ったがそこは数の差があって最終的には拘束されてしまった。
「で、貴方は一体何をしたのですか？」
尋ねてくるのは車椅子に座った少女、フィオレ。
とはいえ、いきなり聞かれたところで思いつくようなものなどない。
わからない、と首を横に振ってサーヴァントたちの帰りを待つ。
「黒のアサシンを名乗っていたサーヴァントは実際はビーストで、それが裏切り大聖杯を持ち逃げした挙句に世界を滅ぼそうとしている」
帰ってきた彼ら、なぜか赤の陣営のサーヴァントも連れてきた黒のサーヴァントたちが告げたところによると、つまりそういうこと。
ああなるほど、と納得するほかない。
その言葉が赤のサーヴァントだったならともかく、黒のアーチャーから告げられたのだから信じるしかない。
「おいおい……なんだよそれは……」
ビースト、という言葉に唖然とする獅子劫。
ビーストという存在については誰もが理解している。
魔術的な代物なのだから、時計塔に通うような魔術師であれば尚更に知っている。
だから、ゴーレム作りにしか興味がないようなロシェだけはそれが何かを知らずにキョロキョロと見回している。
しかしそちらに構っている暇はないのか、アーチャーは無視する。
「ですので、貴方に聞きたいのです。ビーストのマスターだった貴方に。彼女がどういう存在なのか」

「そういうことか……」
今にも殺されそうだというのに恐ろしさを感じないのはなぜなのか。
喋らなければ殺されるし、喋っても殺される。
〝ビーストが助けに来ない〟というのは、つまり彼女が俺を見捨てたということだろうし……うん、まあしょうがない。
「あいつは、根源接続者を依り代にして召喚された擬似サーヴァントだ」
別に語ったところで彼女が不利になるような情報があるわけでもない。
なら別に、語っても問題はないだろう。
擬似サーヴァントという存在についてよくわかっていないマスターたちに対してのそれの説明は面倒なので今は省く。
「ダーニックがサーヴァントを引き連れてうちにやってきた時に、触媒も何もないから縁召喚を行ったらあいつが出てきた。……って言っても、それが本当に縁なのか、あいつが割り込んできたのかは謎だけどな」
もうすでに令呪との間に繋がりは感じない。
ルーラーも、俺が彼女のマスターだったとみて確認してくれたが、聖杯戦争の裁定者たる彼女からみても令呪はもうどこにもつながっていないらしい。
「あいつの目的は、あいつが惚れた『理想の王子様』を作ることらしい。根源に接続してるから、別の世界の恋をしている自分も発見できて、とかなんとか言ってた」
皆が赤のランサーを見ている。
彼に虚飾が通用しないということを理解している面々は特に。
俺の言葉に嘘がないかを確認するためだろう。
彼女についての説明……マザーハーロットとしての、ではなく表出している依り代としての意識についての説明が主にはなるのだが、俺が知っているのはそちらだけなのでサーヴァントとしての能力ならばともかく、性格面でそれ以上の説明を求められても困る。

「あいつの宝具は二つある」
「片方は、サーヴァントを召喚していたあの黄金の杯だな」
カルナの言葉に頷く。
「ああ。あいつが使っていた黄金の杯。あれは、マザーハーロットの持つ姦淫に満ちてるとかいう伝説から魅了の力を持った魔力を生み出すことも、依り代になった少女が参加した聖杯戦争におけるサーヴァントたちを召喚することもできる」
更に言えば魔力炉心としての仕事もあの杯はできるから、実質召喚は無制限だ。
そして、もう一つの宝具に関してはそれこそ反則と言わざるを得ない。
「もう一つは使った瞬間に聖杯戦争の勝者になれるレベルの代物だ」
使用と同時に一度世界を滅ぼし、その上で自らの持つ魔力で自らにとって都合のいい形に世界を作り変える宝具。
黙示録の獣と縁深いマザーハーロットと、黙示録の獣を召喚して人理定礎を破壊しようとした沙条愛歌。
二人が複合されたことによる超絶チート級の宝具。
しかも、魔術ではなく彼女の持つ黄金の杯からこぼれ落ちる純粋な魔力によって世界全体を犯すものなので対魔力でどうにかするなんてことも不可能。
その真名を『百獣母胎（ボトニアテローン）・万蝕融界（メガセリオン）』。
聖杯の『万能の願望機』としての機能を最大限に利用した『世界の内側を自由に変革する』宝具である。
「お前……なんていうものを召喚してるんだよ」
その説明にカウレスが思わずため息。
使った瞬間に勝利が確定する宝具。
そんなものを持っているサーヴァントは、聖杯戦争を破壊するサーヴァントと言っても過言ではない。
問題は、それが敵対関係になったことだけ。
とりあえず語るだけのことはした。
あとのことは他の連中に任せるとしよう。

どうせこの場で殺される俺には関係のないことなのだから。
どんな風に殺されるのだろうか、やはりキャスターの宝具の炉心だろうか、なんていう諦めの境地。
どう頑張っても英霊がいる以上殺される未来からは避けられないと理解して、できれば生きたまま分解されるという最悪の未来だけは避けたいな、なんてことを思う。
そんなことを考えていれば、カルナがこちらに話しかけてきた。
「人類悪のマスターよ、俺と契約をしてはもらえないか」
はあ？
思わず声が漏れた。
「……あんた、自分を召喚したマスターに聖杯を与えることを第一にしてるんじゃなかったっけ？」
「ああ、それで間違いはない」
「なら、なんで？」
「まずはあのビーストをどうにかしないといけない、と判断したからだ。そしてそれを成すにはお前と契約をするのが一番だと判断した」
意味がわからない。
だが、彼がこのような冗談を口にするとは思えない。
全員から視線を向けられる中、俺は――。

第十八話

結局、カルナと契約をした。
俺は、彼の語る可能性に希望を見出してしまった。
彼にとっては己を召喚したマスターに仕えることが第一であり、その命有る限り主人を守ることに変わりはない。
けれど、だからこそ彼はビーストをどうにかせねばならず、そのために俺との契約を行うという。
彼は一言足りなかったり語らないことはあっても嘘はつかないために、その言葉は信頼に足る。
そして、俺とカルナの契約は存外わかりやすいものだった。
――契約だ。お前は俺に魔力を供給する。代わりに、俺は必ずお前をビーストの元にまで送り届けよう。
根源に接続したことで全能な彼女なのだから俺の意思など無視して彼女の望む『理想の王子様』に〝改造〟してしまえばいい。
それをしないという一点がもしかしたら彼女に付け入る隙になるのかもしれない。
そう言ったカルナによって、俺は生存を確約された。
これは俺以外にはできないことなのだから、と。
「それでカルナ、どういうことなのか聞いてもいいか？」
彼女の居場所がわからないことにはどうしようもないため、わずかではあるが休むことができる期間。
赤のマスターたちは未だ毒で頭がおかしくなっている状況から治っていないために、治ったと同時に襲いかかってくるということがないように捕縛されているのだが、生存が確約されているのならばそれでマシだろうというのが赤のサーヴァントたちの考え。
そのため誰かに文句を言われるということもなく、監視のために与えられた自室にてカルナに問いかける。
「……何がだ？」
「いや、だからなんで『理想の王子様に改造しない』っていうことがビーストの付け入る隙になるのかってことだよ」

「ふむ……どこから語るべきか」
「……お前がそう考えるに至った理由を、一から、全部言葉で、説明してもらえるとありがたい。説明を省かれたらわからなくなる可能性もあるから」
「……わかった」
カルナが語るのは、まず彼女と最初に出会った時のこと。
赤のバーサーカーを獲得しに行った時のことだ。
「あの時、俺の目にはビーストは理想の王子様とやらを取るかどうかを悩んでいるように見えた」
まあ、悩んでもおかしくはないだろうな、というのがその言葉を聞いての俺の感想。
何せ裏切られたのだ。
誰がなんと言おうと、この世界では出会うことはないからともかく彼女は理想の王子様（アーサー王）に背後から刺されたという事実を知っているのだ。
そして、本来ならばそれ以上のことはないはずなのに彼女は別の世界で〝他の誰かと結ばれて幸せな自分〟とやらを目撃してしまったから、そこに瑕疵が生まれた。
それはそれとして、カルナの口から大真面目に『王子様』という単語が出るとどうしても笑いそうになるのだが。
「そして先ほどの第二宝具の内容だ」
「あれが……？」
「ああ。世界全体を再編する宝具。その気になれば俺たちが消滅したという結果だけを残すことも可能なはずのその宝具を使用しない事実。そこに、勝機が見えた」
「それって……」
どういう、と聞こうとしたところで思わずあくび。
今日は本当に色々とありすぎたせいで疲れている。
どうやら俺たちがダーニックに与えられた家にいたホムンクルスたちも全員が連れ去られたらしい。
そのため本当に居場所がわからず、居場所がわかるまでは黒のアー

チャーによる突貫コースでの授業が始まるとのこと。
俺を連れて行けばどうにかなるとのことだが、俺が流れ弾で死ぬ可能性が高いことには変わりないので死にづらくなるようにしっかりと鍛えてあげましょう、なんて言われた。
それが始まるまでにどうにか体力が回復していないと間違いなく死ぬ。
それに、カルナとの契約によってかなりガツンと魔力を持って行かれた。
もう、眠気が……

赤の陣営で残っているサーヴァントは四騎。
赤のランサー、赤のアーチャー、赤のライダー、赤のセイバー。
この内、セイバーだけは未だに彼女を召喚したマスターとの契約が生きているが残りの面々はその契約は全て潰えている。
よって、ユグドミレニアが妥協して捕縛したマスターたちと契約を再開させるか、赤の陣営が妥協して黒の陣営の誰かと契約するかのどちらかだったのだが、カルナが黒の陣営のマスターと契約をした、ということによって黒の陣営の誰かと契約する方向性に進んだ。
ランサーは真幌と契約を行なったし、アーチャーはバーサーカーを失ったカウレスと契約し、そしてライダーはキャスターとの契約をそのまま続行している。
彼らにとってこの地が敵地であることには変わりないが、それでも今は同盟相手の拠点でもある。
よってある程度は自由に動き回ることはできていて、彼らは彼らなりに自由に過ごしていた。
「む、黒のセイバーか」
「赤のランサー」
なので、こうしてばったりと出会うこともある。
黒のセイバーも、今の所は敵がいないということでゴルドから外を出歩くことは許されている。

彼の実力は確かにゴルドにも届いたようで、赤のランサーの真名を知ったことも合わせてそんな大英雄と戦える私のセイバーが弱いはずがない、という考えに至ったようだ。
彼が己の失策を認めるに至ったのかどうか、それについては彼とジークフリートしか知らないことだが、今はそのことは関係ない。
どちらにせよ、黒のセイバーを相手にして背中を取れるような相手などそういるはずもなければ、背中を取れそうなミレニア城塞にいる面々は正面からの激突を良しとする英雄英傑ばかり。
そして彼らは、特にその筆頭とも呼べる人選だった。
どちらからともなく無言で外を目指す。
本気の殺し合いは許されないが、軽い修練程度ならば許される。
むしろ、相手が無限にサーヴァントを呼び出せることを考えれば、誰かと組むことだってあるだろう。
その時のために修練をしておくことはまるで間違いではない。
後のことを考えないのはただの阿呆だが、だからと言って後のことを考えすぎて目の前のことを忘れてしまっていてはその〝後〟がやってくることがないのだ。
特に、ビーストが確実に呼び出せるサーヴァントのことを考えれば、コンビを組まないでどうにかなるなんて楽観視はできない。
ライダー、オジマンディアス。
ランサー、ブリュンヒルデ。
アーチャー、アーラシュ・カマンガー。
この三名は特に、倒すという気概を失ったわけではなくとも全員が複数のサーヴァントが相手取らなければならないほどの猛者。
どれほどまでに再現することができるのかは謎なのだが、最悪の場合は自分に忠実な状態でサーヴァントとしての力の一切を失わないままに召喚することも可能だと考えるべき。
そのため、少しでも連携の粗を消すためにミレニア城塞前にあった草原地帯、赤のバーサーカーの宝具『疵獣の咆吼（クライング・ウォーモンガー）』によって荒廃した土地になってしまった場所に二人は向かっていた。
そしてそこで、黒のアーチャーによって投げ飛ばされている真幌の

姿を発見した。
「赤のキャスターがいれば、あるいは彼にも戦場に出るにふさわしい武器ができたのかもしれないが……」
赤のキャスターには『エンチャント』というスキルがある。
大元が良ければCランクの宝具と同程度の能力を持たせるに至るほどの強力なスキルだ。
真幌が戦場に出ないといけないことを考えれば、彼に何かを用意してもらうのがいいのかもしれないが赤のキャスターに関してはすでに消滅している。
あのサーヴァントのことをそこまで好ましいとは考えていないいからか辛辣なランサーではあるが、『物語に仕える』という一点だけは決して違えないその在り方そのものは彼も認めてはいる。
そのため、こういう場合に最初に出てきたのは彼のことだった。
「今の貴方に必要なのは逃げの一手だけです。そもそもサーヴァント相手に戦おうということ自体が間違い。貴方には頼りになる槍があるのですから、戦いそのものはそちらに任せて攻撃を避けることに専念してください」
「おおぅ……マジの突貫コースだ……死なせずに済む最低限の保証しか存在しない本気の超突貫コースだ……」
暇なのか、それを眺めていた赤のライダーは赤のライダーでトラウマを発現したらしく、どこか青い顔をしている。
今回の現界に際して黒のアーチャー以上に『他者を鍛える』ことに特化している英霊はいない。
そのため、彼が真幌の生存の確率をあげるために授業を組んでいるのだが、発見次第すぐにでも向かわなければならない現状、悠長に教える時間などない。
すでに技に関してはパンクラチオンを叩き込んであるため、あとは経験さえあれば現代で言う所の代行者クラスの実力は発揮させられるはず。
それ以上の実力になれるかどうかに関してはもはや個人の才覚という話になるし、そもそもビーストのことを彼が倒せるなんて考えて

いる輩は誰一人としていない。
彼にどれだけ実力を持たせようと、根源接続者が相手では勝ち目などないのだ。
「確か、お前は北欧の戦乙女を相手にするのだったか」
「ああ。赤のライダーに関してはアーチャーを相手にするらしい。貴公は……」
「俺は、あの男をビーストの元にまで送り届ける必要がある」
ジークフリートはブリュンヒルデを相手取る。
というよりもシグルドに似ているからきっと勝手に襲いかかってくるとのこと。
アキレウスはアーラシュ・カマンガーを。
山をも削り取る威力の矢を東京全域を射程として超連射するような輩を相手にするには、あらゆる時代、あらゆる英霊の中で最も速いという逸話からなる、視界全てが間合いとなるほどの速度を手にする宝具『彗星走法（ドロメウス・コメーテース）』を持つアキレウスが適任。
神性を持っていない英霊ではあるのだが、それでも彼の踵を撃ち抜けるかもしれない英霊ということで彼のやる気も出ている。
それ以外に関しては適宜その場のノリと勢いで決めるらしい。
ただ、相手方に一部のホムンクルスがいてそのホムンクルスたちに英霊の力だけを置換する技術がある以上、絶対に相手のサーヴァント一騎に対して二騎以上で戦うことは不可能とみてもいいだろう。
キャスターのゴーレムは低級のサーヴァントであれば戦えるだけの実力は持っている。
英霊に置換するという大魔術を置換魔術（フラッシュ・エア）という基礎の魔術によって実行している以上、そうして生み出された戦力もその魔術の原則によって劣化するとはいえ、元が大英雄であれば低級のサーヴァント程度では済まない実力にはなるはずだ。
そんなものを相手にゴーレムだけを向かわせても、勝てるはずがない。
「お？　お前らここにいたのか」
セイバーとランサーがここにやってきてから真幌がアーチャーの

手で地面に転がること約百、気絶した回数も五十を超えそうな時。
　そのカウントに新たな一が加算されたタイミングで、カウレスがやってきた。
『神授の智慧』による『生存のための術』を叩き込まれ気絶しながらも、ケイローンの圧を感じる笑顔によって水を入れたバケツを取りに行かされたアキレウスに、その水をかけられて叩き起こされた時のことだった。
　そちらにはカウレスは目もくれず、ただ重要な言葉だけを告げる。
「ビーストの居場所がわかったらしい」

第十九話

カウレスのもたらした情報はあまりにも大きく、強制的に叩き起こされた真幌も加えて全員が黒の陣営が集まって会話をする王の間にやって来ていた。
「キャスターの作ったゴーレムが発見してくれたのですが、このピラミッドは確か貴方が先日の戦いの時に放り込まれていたもので間違い無いですよね？」
「ああ、うん……多分、あってる。さすがに外から見たわけじゃ無いから外観だけじゃわからないけど、お前らが見たのとは同じなんだろ？
それなら、あのピラミッドの持ち主は自分の愛する人の遺品以外だと召喚されるつもりがなくて、それを使って召喚したら許さねえってサーヴァントだったはずだから、あいつ以外に呼び出せるとは思えないし」
キャスターのゴーレムがその目に捉えた映像を七枝（メノ）の燭台（ラー）の炎に映し、彼ら全員が視界に捉えたそのピラミッドの在処は超高度。
以前の空中庭園のように、けれどあれよりもさらに高い場所に存在しているとかなんとか。
「だが、どうする。あそこまで行く手段はあるのか」
「さらに言えば、あの高度にまでたどり着くことができたとしてもビーストの呼び出したアーラシュに迎撃されるのでは無いだろうか」
アーラシュの一射が宝具級の代物であることも、それを連射することができるということも、東京全域が範囲であることもすでに伝えているので誰もそれには突っ込まない。
「赤のアーチャーの宝具ではダメでしょうか？」
「無理だな。一射一射の狙いをつけることはできん」
アタランテの宝具であれば同数の矢を放つことは不可能では無いだろうが、彼女の宝具の形からしてそれによる迎撃は難しい。
あの宝具は、二つの手順を踏んでいる。
矢を天空に向けて放ち、天空から災厄として無数の矢によって構成された雨が降り注ぐ。

つまり、空から降ってくる攻撃に対する迎撃を行うときにアタランテの宝具はそこまでの力を発揮しない。
さらに言えば、あれはアタランテが一射一射全部狙っているわけではなく範囲をある程度選ぶことができる程度。
宝具によってアーラシュの矢を撃ち落とすことは難しい、逆ならばアタランテの範囲の絞り方次第では確実にできるだろうが。
「それなら、赤のライダーに突っ込んでもらえばいいんじゃない？彼なら神性のない相手の攻撃は通用しないから、それで攻撃が止んでる隙に僕らが乗り込む形でさ」
「それ、可能なの？」
同時に召喚できるサーヴァントの数、そして同一のサーヴァントは同時に呼べないのか、それらについてはまるで謎だ。
最悪の場合、つまり彼女のサーヴァント召喚が無限にできるという可能性を考えないわけにはいかないだろう。
「確か、オジマンディアスのピラミッドは『神由来の肉体を持つ者、あるいは神由来の武具以外の宝具封印』『呪詛による猛毒』『自分と配下に仮初の不死を与える』っていう能力持ちなのよね」
「ああ、俺が知る限りでもそれだけの能力はあるぞ」
セレニケの言葉に頷く。
ついでに言えば中にはスフィンクスの群れである。
一体一体が並大抵のサーヴァントを相手にすることができるだけの戦力。
「これ……本当にどうするんだ？」
ライダーを消滅させれば彼のピラミッドもサーヴァントはともかくとして一緒に入り込むマスターは危険である。
ビーストがその程度で消滅させられるとは到底思えないために、それではただの無駄死にとなる。
つまり、こちらは神から賜った弓を持つアタランテ、ギリシャ由来の神性を持つケイローン及びアキレウス、太陽神の息子であるカルナ。
この四名しか宝具を使用することができない状況でビーストを止

めないと行けないのだ。
……無理ゲーでは？
「無理だろう。とにかく、こちらと向こうのサーヴァントの数に差がありすぎる。〝赤〟のランサーの言葉を信じるなら、その上でこいつを連れていく必要がある」
ゴルドの言葉。
それと同時に皆の視線が向いたのは俺。
戦力になる存在に差がありすぎる以上、このままではどうしようもないというのはわかっている。
だが、それでも手をこまねいていたり、〝とりあえず聖杯大戦終わらせちゃいますね〟なんてことをやっていられる時間もあるわけがない。
赤の陣営のサーヴァントと黒の陣営のマスターが契約しているという今の状況が、それが許されてしまうことがあまりにも異例であることを忘れてはいけないのだ。
「っていうか、あいつを放置するのはダメなのか？　少なくとも今のところは何かをしでかす様子はないんだろ？」
「ダメに決まっているでしょう」
ルーラーがぴしゃりと言い放つ。
今動いていないことがこれから先も動かない、という保証にはならない。
だからこその共闘関係であり、それを無視するというのならばこの場で殺し合いが始まるだけのこと。
「……まずは、あのピラミッドに向かう方法を出すことから始めましょう」
結局、そこに帰結するのだこの話し合いは。
何せ、サーヴァントに対しての対抗策があっても戦場に出ることができないのであれば意味がないのだから。
そして、その話し合いは今日も今日とて平行線を辿る。
向かうための手段が決まったとしても何日かけて向かうのかと言う話。

俺の安全性を取るか、世界全体の安全性を取るか。
俺の安全性を取ればほぼ確実にどうにかなると言うのがカルナの発言であり、だが当たり前に考えれば世界全体の安全性を取る。
しかし、その場合はここにある（大英雄もいると言うのに！）ちっぽけな戦力で挑まざるを得ないと言うことで、俺が万が一にも死んでしまったらその時点で失敗すると言うのもカルナの発言。
結局、どちらを取るのかは決まることはなく、今日も今日とて会議は終わる。

「それで、結局あなたの目的はなんなんだ？」
「あら、そんなことを知りたいの？」
その頃、ピラミッドの中でシドは純粋な疑問を口にする。
ビーストの瞳が彼のことを捉えるが、もうすでに彼女はシドのことなど一片の価値も認めていない。
せいぜいが真幌のことを測るための試金石程度だろう。
「前にも教えたような気がするけど、私は王子様が欲しいの」
「そういうことではなくて……いや、今のは俺の聞き方が悪かったのか。あなたは、このピラミッドを用意して、どうやって王子様を手に入れるつもりなんだ？」
その言葉に、よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに手を顔の横で合わせて、楽しそうにビーストは告げる。
彼女の思い描く最良の結末を。
「こうやって大聖杯を私が獲得したら、どうしても彼が来るしかないじゃない？　そうなったら、どうなっても私にとっては成功でしかないのよ」
彼が殺しにくるのであれば、それはつまり『沙条愛歌を殺した理想の王子様』と同じになると言うことで、彼女にとっての王子様の素体である以上はそれはつまり『理想の王子様』としての完成。
逆に、殺さないと言う選択肢を取るのであれば、それは『理想の王子様』ではなく、されど『沙条愛歌をとった王子様』にはなれる。

どちらであっても彼女にとってはいいことでしかないのだ。
「……もしも、あの人が来なかったら？」
「その場合は残念だけど世界をやり直すしかないわね」
彼女の宝具ならばそれができる。
途中で死んでも、やり直す。
いつか、坂月真幌がこの場にたどり着くその時まで。
「それは……」
本当に人類悪なのか、とシドは口にすることはなかった。
人類を愛するがゆえに滅ぼすのが人類悪。
そして、彼女にとっての人類とはすなわち、己の王子様だけなのだろう。
だが、彼女は王子様だけは確実に死なせないように思えてしょうがない。
だから、これは本当に人類悪なのかと、シドはそう思った。

第二十話

「で、結局こうなったわけか……」

三日ほどかけて取り寄せられたのは飛行機。

ピラミッドのある場所はルーマニアの国境付近をうろついている。

つまり、ビーストが見せているのは『追いかけてこないのならすぐにでもルーマニアの外に出るぞ』というユグドミレニアへの脅し。

ユグドミレニアは少しでも早く彼女を追いかける必要性に駆られていて、赤の陣営からすればそんなことは知ったことではない。

むしろ作戦の成功率を上げるという一点からすれば、いつ外に持っていかれるかわからないという状況から、どうあがいてもユグドミレニアの手では取り戻せないという状況に陥ったほうが都合がいいのかもしれなかったのだが。

ピラミッドに乗り込む面々の中にマスターは真幌だけ。

マスターが魔力をどの程度の距離まででであれば送りこめるのかは謎なのだが、その危険を押してまでピラミッド突入組になるというのは、殺してくださいと自分から宣誓しているようなものである。

必須となる、そうカルナから宣言された真幌以外は全員つい先日ユグドミレニアが買い取った、ピラミッドからそう距離が離れていない場所にある邸宅に一時的に移ることになる。

「俺まで入れていいのかい？」

「ええ、もちろん」

獅子劫の言葉にフィオレは快諾……しているようには見えるが実際には違う。

獅子劫の本心を言葉にするのなら、『ビーストの撃破が終わったらそのままお前らの邸宅に爆弾ぶち込むから別行動させてくれ』であり。

フィオレの本心を言葉にするのなら、『ビーストの撃破が終わり次第血族全員であなたをぶっ殺して差し上げます』というものである。

なにせ、この同盟は対ビーストのためのものであり、ビーストとの戦いが終わってしまえば次の瞬間黒と赤は敵対関係に逆戻り。

そしてその状況下で一番に倒さなければならないのは、考えるまでもなく獅子劫と赤のセイバー。
それ以外の赤のサーヴァントであれば、今の状況なら黒がマスター権を握っているということで令呪による自害をさせることが可能だから。
だから獅子劫は、どうにかしてこの邸宅から抜け出そうとしていて。
だからフィオレは、どうにかして獅子劫を引きとめようとしていた。
「サーヴァントを従えるマスターが一網打尽にされちゃ、坂月真幌が困るだろ？」
「サーヴァントが一騎でも脱落すればまずたどり着けないことを考えれば、複数箇所にゴーレムを割いて防衛するよりも一丸となって行動したほうがいいと思うのですが」
笑わない笑顔を向けながら『どうにかして相手を出し抜いてやろう』と考える二人から視線を逸らしてロシェは黒のキャスターと、カウレスは赤のアーチャーと会話をする。
前者はこれが最後になるかもしれない師弟としての会話なのだと思ってしまって、後者は数日間ではあったが確かに主従の関係を築いたものとして。
「先生！　あの、その……」
「ロシェ。君は、とてもいい弟子（マスター）だった」
「そ、そんな……！」
「謙遜する必要はない。人嫌いであるはずの僕が、こうしてそばに置くことを心地いいと思えたのは君が初めてだった」
叶うことならば君にも宝具を見せたかったが、とキャスター……アヴィケブロンは口にする。
この戦いでは、原初の人間（アダム）が必要となることを悟りきっているからか、彼はその材料を用意された飛行機に積み込んでいた。
そのことはロシェも知っていて、ダーニックが死んでしまったことも合わせれば、この聖杯大戦では決してアヴィケブロンの宝具を見る

ことはできないだろうとわかっていた。
「アーチャー、この数日間助かったよ」
「感謝されるいわれはない」
彼ら二人は誰にも語っていないが、即席コンビであるカウレスとアーチャーの間にも何かがあったようだ。
だが、それも宜なるかな。
カウレスはいくら相手が高度な知能を有するからといってバーサーカー相手でも互いの思想を知ろうとすることをやめなかった。
そういう人種であることを考えれば、むしろ受け答えもはっきりとしているアーチャーが相手であるならばお互いの信頼関係を築くことができない、と言われるほうが驚きだろう。
そして、そこから少し離れたところでは昨晩のうちに己のマスターとはそういう話を済ませたケイローンがパンクラチオンを含め真幌に諸々教え込んだ術の最終確認を行い、アキレウスはそれにトラウマを発症し、カルナとジークフリートは戦いの前に体を温めるために軽い打ち合いを。
さらにそこから離れたところではルーラーが少し悩んだ後に令呪を切って『ビースト及びその配下との戦いにおいての身体能力強化（ステータスアップ）』を行なっている。
アストルフォに関しては、宝具の真名を忘れているということを今になってようやくマスターに打ち明けて、令呪によって宝具を使用しないと防げないような攻撃が来た場合に強制的に宝具を解放するように命令されていた。
基本的にマスターとの別れを済ませた、あるいは行う必要のない面子は取り寄せた飛行機の改造の方に取り掛かっている。
いいや、むしろピラミッドにまで飛行機を保たせる作業を行う面子こそが、すでに別れを済ませていた。
特にその筆頭はモードレッドだった。
「本当にこんなこと出来んのかよ!?」
「できるできる」
「なんだよ、その軽すぎる断言は。理由があんのか理由が！」

「アーサー王ならできたぞ？」
簡潔に、その一言がモードレッドのやる気に火をつける。
彼が思い描いているのは別の世界で発生した、この世界ではもう二度と発生することのない第四次聖杯戦争（Fate/Zero）のこと。
それを思い描いて、彼はモードレッドのやる気を引き出しにかかる。
「あの王は、俺が今お前に頼んでることを、誰に言われることもなく自分の才覚だけで完璧にやったぞ。
あの王は、征服王イスカンダルの宝具にすら追いついたぞ。
そうだ、アーサー王ならそのくらいはできたぞ？
だったら、アーサー王を超えたいっていうお前ができないはずはないよな？」
もはや煽りである。
これだけ煽る元気があるならもっと激しくしても問題ないですね、とケイローンの授業が激しさを増したのだが、それをモードレッドは気にしない。
別の世界であればアーサー王に対するコンプレックスもどうにかなっていたのかもしれないが、この世界ではそうなっていない。
だから、今の彼女はアーサー王ができたくせにお前はできないの？と言われると是が非でも成功させにかかる。
「……ふん」
中に入る。
皆が最後の送別を終えて、飛行機に乗り込む。
モードレッドが飛行機の操縦桿を握る。
アキレウスはアーラシュが防衛をしている場合に抑える必要があるために、操縦することはできない。
必然、騎乗スキルを持つアストルフォかモードレッドということになるのだが。
彼が魔術を無効化する宝具を持つことが発覚したために、もしも魔術攻撃が来た場合に備えてアストルフォもやはり防御のために操縦桿を握っているのは厳しかった。

宝具が多彩なライダーと、あらゆるステータスが高水準というセイバーというクラスの特徴の基本に忠実だったからこそ、二人の役割は決まったと言えた。

「よし、成功だ！　行くぞ！」

モードレッドの言葉。

内側に入り込んだ彼らでは決してわからないが、今のこの飛行機はモードレッドの体の一部とみなされ、彼女の鎧を纏い、通常よりも強度が増している。

モードレッドの荒い運転でも問題なく飛べるように、この飛行機は最後の改造をされていた。

そして、その機体はモードレッドの掛け声とともに、彼女の気性を示すような荒い出発をしたのだった。

第二十一話

「我が弓と矢を以て太陽神と月女神の加護を願い奉る」
出発した飛行機の視界にピラミッドが入った頃、モードレッドからの言葉によってそのことを知った面々は、それぞれの役割を果たすために準備をしていた。
アタランテもその一人。
飛行機の中では何をすることもできないためにアキレウスからの愛の告白じみた何かをスルーしながら、ただその時を待っていた。
霊体化することで壁をないものとして飛行機から外に出た彼女は、今宝具を解放しようとしていた。
「この災厄を捧がん――『訴状（ポイボス・カタストロフェ）の矢文』！」
放たれた矢の雨は、飛行機が下から向かうということを考えればあまりにも無謀。
今からこの飛行機は矢の雨の中を突き進んでピラミッドに上陸しないといけないということなのだから。
だが、今回はそれでも問題はないのだ。
範囲を限界まで絞り、ピラミッドの周囲以外には降り注がないようにして密度を高めた。
降り注ぐ矢の量そのものは一切変わっていないが、密度だけは高まっている。
その一点だけで、近づくまでの時間稼ぎにはなるのだから。
「何ともはや……」
話には聞いていた。
アタランテも、もしかしたらどうにかされるかもしれないとは考えていた。
だが――。
「まさか、全弾撃ち落とされるとはな……」
「そりゃ仕方ねえだろ。アーラシュ・カマンガーは一人じゃなくて二人、召喚されてるみたいだしな」
超一流の弓兵である彼でも一人ではもしかしたら無理だったかも

しれない。
だが、二人揃えば不可能ではなかった、というたったそれだけ。
「おい、ライダー。汝は何をしている。汝の役割は私が宝具を使って奴らの迎撃を誘っている間にアーラシュ・カマンガーを滅ぼすことではないのか」
「いえ、彼はアーラシュ・カマンガーを普通に倒していましたよ」
そこにケイローンもやってきた。
そして、彼の瞳が捉えた絶望的な情報を一つ。
「ですが、元々がビーストの持つ聖杯から召喚されているせいか、それともピラミッドの効果で不死を得ているからか、倒しても意味がないようなのです」
「つまり、どこかで誰かが抑えなくちゃいけないってわけだ」
安牌としてはアキレウスだろう。
相手は神性を持たないアーラシュの群れ。
他のサーヴァント達であれば脅威となる相手ではあるのだが、アキレウスに限ってはただの群れでしかない。
だが同時に神性を持たない相手と戦うということは、彼からすれば同格ではない相手と戦うということ。
宝具である矢の雨をいくら一人ではなかったからと言っても、ただの技量だけで全弾撃ち落とすという偉業。
それを成すだけの実力を持つという事実があるからこそ、アキレウスは彼が神性を持っていないことを悔やんでいるだろう、とケイローンは思っていた。
「ま、仕方ねえか」
彼は己の持つ英傑殺しの槍をくるりと一回転。
そして、後ろにいるアタランテに告げる。
「姐さん、もう一回宝具の使用はできるか？」
「……？　ああ、できるが」
「なら、頼むわ」
「……わかった」
「先生は片方抑えててくんねーか。今から俺がやるのは、どうしても

一対一になるからな」
「それは、どういう……」
答えが返ってくるよりも先に、アタランテの宝具が解放される。
そして、それと同時にアキレウスが己の槍を投げた。
「行けッ！　我が槍、我が信念――『宙駆ける星の穂先（ディアトレコーン・アステール・ロンケーイ）』！」
その槍が作り上げた一対一の空間にケイローンは驚き、されど己の役割を見失うことはなく。
もう一体のシャドウアーラシュに向けてアタランテとともに向かった。
アキレウスがそれを展開したのは、『たとえこの距離であったとしても、この男であれば自らを殺しうる一手を放つことができたとしてもおかしくない』と考えたから。
つまり、アーラシュがアキレウスを殺すのが先か、それともアキレウスがアーラシュを絞め殺すのが先か。
その戦いをしてもいいほどの相手だと、彼はそう思ったのだ。
そしてその間に飛行機は超大型複合神殿体、『光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンティリス）』の内側へと突入していた。

「……来たか」
ピラミッドの中を走っている最中、言葉にしたのはジークフリート。
目の前から魔力放出によって炎を纏った槍を持って迫ってくるのは、シャドウサーヴァント状態のブリュンヒルデ。
ただし、宝具の使用ができないとは考えないほうがいいだろう。
相手は根源接続者。
そんな彼女が、シャドウサーヴァントの召喚に際して霊基の改造を行えないと思うほうが間違いであり、そして何よりもライダーのサーヴァントであるオジマンディアスの宝具が彼女の拠点となっているという事実が、その考えを補強する。
ジークフリートとブリュンヒルデのステータスは敏捷がワンラン

クだけジークフリートが劣っているだけ。
つまり、どのような決着を迎えてもおかしくはない。
そのはずなのだが。
「ふんっ……！」
一気に、ジークフリートが押し飛ばす。
ジャンヌ・ダルクから令呪によるブーストを受けている今の彼であれば、ブリュンヒルデをステータスではわずかに上回る。
斬撃を行ったところで何も意味などないと判断したジークフリートは剣の腹でブリュンヒルデの鎧を叩き、彼女のことを吹き飛ばして道を作った。
「先に行け……！　あとで追いつく！」
「はっ！　背中を取られるんじゃねーぞ！」
モードレッドの言葉。
人間である真幌が走るとなると、サーヴァントとの間に走る速度の差が生まれ、最終的には置いていかれてしまう。
では、真幌を置いていけばいいのかというわけではなく、彼を置いていけば確実に殺される。
故に、この状況下で取られる手段はたった一つ。
「鏡像（よ）、鏡（ょ）、醜（い）現実（を）隠（し）て奥（おく）れ。反転。偶像、完成。鏡面、展開」
魔術回路が駆動を開始し、坂月家十一代に渡って築き上げられてきて、さらにはビーストの手によっていじられた魔術刻印も独特の魔術を構築し始める。
耐熱の魔術なんて、彼らの炎の前では何も意味など持たない。
故に、彼が選んだのは鏡面の世界……心象世界によく似た空間に彼が受けるはずだったダメージを逃がすこと。
逃がせる総量そのものには限度はあり、一度の展開でゼロから積み上げたそのダメージ総量が限度を超えた瞬間に全てのダメージがそっくりそのまま返ってくるのだが、ビーストによっていじられた魔術刻印が紡いだ魔術はこれまでに比べて遥かに多量のダメージを、それこそ英霊の宝具クラスの一撃であったとしても問題なく逃がせるようになっている。

「よし、カルナ。やってくれ！」
「了解した……！」
真幌のことを担いだカルナの脚力に一気に魔力放出（炎）によるブーストがかかる。
太陽神の息子たる彼の魔力放出は尋常ではない炎を吹き出し、それは担いだ己のマスターすらも焼き尽くしかねない威力となる。
その威力の全てを逃しているために、加速度的に溜まっていく鏡面世界のダメージ総量。
ビーストの調整がなければ一瞬で許容量を超えて死んでいただろう体も、現実にはいじられたという結果だけがあるために死んでいない。
それが、過去の改竄が行われたことによって生まれたものなのか、それとも真幌が寝ている間に勝手にされたものなのか、あるいは真幌も起きていた中で行われたことなのか。
その答えは誰も知らないのだが、『使えるものは使う』の精神で真幌は一切の躊躇なく使用していた。
それを見ることなく、ジークフリートはただその場で構える。
「……来い！」
「ああ……あなた……シグルド……ごめんなさい」
ブリュンヒルデはジークフリートを視界に捉えながら、ジークフリートを見てはいない。
彼女が見ているのはシグルドただ一人。
そのため、シドは少し危険だったりするのだが、そんなことは誰も知らない。
「殺し、ますね……」
巨大化した槍を『幻想大剣』にて受け止める。
炎に包まれた逸話によって得た魔力放出は槍に付与され、『幻想大剣』で防いだとしてもその熱にてジークフリートの肉を焦がす。
得難い難敵と出会ったという確信を持ってジークフリートは、契約の経路（パス）を通じて行われる治癒に心中で感謝を告げながら油断なく眼前の敵を見据えた。